

---

# アッシュ戦記

神名 心

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アッシュ戦記

### 【NZコード】

N8021S

### 【作者名】

神名 心

### 【あらすじ】

私は母を殺した5人の法外の貴族と呼ばれる犯罪者たちに復讐を誓つた。これはその復讐劇である。毎朝10時更新!! ガンバリマス！！

## 序（前書き）

アッシュ・クロフォードは母の仇の5人ガルド・イニエーブ、グラ  
シア・シンシア、バルド・ゲール・アラン、シャルレ・ガージマス、  
イボニチエ・ゴルディーザに復讐をするべく立ちあがつた。

深い感情が横たわっていた。それはまるで地中一面に張り巡らされた電線のように私の根っこに浸透していた。いつ頃から私にその真つ黒な感覚が芽生えたのかは、はつきりしている。あれは、ただ一人の肉親であつた母が無残にも稀代の犯罪者たちによつて命を奪われた日だ。

そして、その首謀者5人はまだ生きている。彼らは法の及ばない存在く法外の五貴族<sup>アシュランテ</sup>と呼ばれ、政治的もしくは力的関係において、警察や軍隊も手出しできない存在だつたからだ。ガルド・イニエーブ、グライア・シンシア、バルド・ゲール・アラン、シャルレ・ガージマス、イポニチエ・ゴルディーザ。私は新聞や雑誌でこの名前を見ると、一日どうしようもない殺意と冷徹さを持つた人間に生まれ変わる。私は母を失つてから、親戚の家で肩身の狭い暮らしをしながらも、彼らの名前を忘れたことはなかつた。正確にいうと、私と母が巻き込まれた事件く秋の大殺戮<sup>オタム・バルバロッサ</sup>〉のことを聞かされたのは育ての親ともいふべき、ガルザ二叔父からであつた。15歳の誕生日の日だつた。私は叔父に皆が寝静まつた後に呼ばれ、テーブルについた。そこで、母のことを覚えているか?と問われた。私はもちろん覚えていた。当時10歳だつた私は記憶するには十分すぎる衝撃の光景があつた。けたたましい爆発音と銃声が響く中で母に手を引かれ私たちは逃げまどつていた。一介の市民にはその時何が起こつてゐるのかわかるはずもなかつた。ただ、何故か戦いが始まり、何故か人が死んでいった。まもなく母も凶弾に倒れた。私は母の身体のぬくもりが消えていくまで、ずっと母にすがつて泣いていた。そして、いつの間にか泣きつかれて、寝てしまつていた。気付いた時には戦いは終わり、母の冷たい亡骸がそこにはあるだけだつた。かくして、私は秋の大殺戮の数少ない生き残りとなつた。ガルザ二叔父

父は私がそのことを告げると、法外の五貴族のことを私に教えた。

アシュランテ

私は復讐を誓つた。だが、彼らの素性は謎に包まれていた。誰もが復讐を恐れて、口を閉ざしていた。ただ、犯罪を犯す時、彼らの悪業は大体的に宣伝されるのだった。私はその記事を頼りに、五貴族のことを調べまわった。そして、いつの日か彼らを法の下に引っ張り出して裁きを受けさせたいと思っていた。さらに、もし叶わなければ自らの手で復讐を決行するつもりであつた。上級大学に進んだ私は法外の五貴族についての研究をしているふうを装つて、ついに一人の手がかりを得た。ガルド・イニエーブだ。これから、このイニエーブとの熾烈な戦いを語りたいと思う。かくして26の夏、私の復讐劇は始まった。

## 序（後書き）

あらすじみたいな文章になつてもうたゝゝ；

## 一章ガルド・イニエーブ＜1＞

ガルド・イニエーブは法外の五貴族の中でもつとも謎に包まれている。だが、真偽はさておき、もつとも情報が人々の口からもたらされるのが彼だった。これには、わざと情報をもらし、人が人々に噂するのを喜んでいるという自己顯示欲の塊であるとか様々な説がある。謎によつて彼は法外の五貴族の仲間入りをした。彼は素性が知れないという一点によつて、国家警察の逮捕を免れてきたのだ。

グライア・シンシアのような、絶大な権力やバルド・ゲール・アランのような知略もなく、シャルレ・ガージマスのような狂気ももつておらず、イポニチエ・ゴルディーザのように畏怖される存在でもなかつた。即ち、彼には何の後ろ盾もなかつた。それでも、史上稀にみる法外の五貴族の一員と呼ばれるようになつたのは、変装術であるといわれている。彼はいわば、多くの人間に成りますことで、数々の悪行を重ねてきた。中でも有名なのは、世界に並び立つ2大國、ゲルマンとアーリア帝国の首脳会談の際、ゲルマンの統領、グニア・レンズブルクに成りすましていたといわれる。ゲルマンの英雄、二一チエリアによつて企みは露見したが、あと一步で全面戦争かというほどに両国の関係は悪化していた。そして、二一チエリアも彼を捕らえることはできなかつたのだ。本編の主人公である私は、アッシュ・クロフォードは既に退役していた英雄二一チエリアと会う機会をもつことを目指した。そしてある日それは実現した。

前日にゲルマンの首都アルベリンにあるベアトリー・チエ空港に降り立つた。ホテルに一泊し、理路整然と並んだ建築物に目を奪われた私は束の間の異国情緒を感じたが、すぐに本来の目的を思い出した。そう、ガルド・イニエーブの手がかりを求めて、ゲルマンの英雄二一チエリアと会う約束をしていたのだった。もつとも、英雄とはいつても、名声などは忘れ去られるのが早い国なのか、二一チエ

リアの家は「ごく普通の一軒家であつた。私を迎えるニーチェリアは白髪の髭を伸ばした老紳士だつた。そして、目には力ともいうべき光が確かに宿つているようだ。鋭い眼光でみつめられると一介の学生である私は緊張してしまつた。彼はイニエーブについて話したくてたまらないようだつた。

「さつそくですが、ニーチェリアさん。ガルド・イニエーブについて聞きたいのですが」

「もちろん。いいとも。アッシュ君。しかし、君も奇妙なことに興味を持つのだね。法外の五貴族の研究なんて一文にもなりはしないだろうに」

私は少しムッときた。が、相手を怒らせないように慎重に言葉を選んだ。

「たしかに、一文にもなりません。しかし、興味があるのです。それでさつそくですが、貴国の統領になりました事件。なんとこちらでは呼ばれているのでしたかね、それについてお聞きしたいのですが」

ニーチェリアは自分の知識をひけらかすように笑つていった。  
「ああ。グニア事件でいいよ。こちらでも様々な呼びかたがある。だが、この国では誰もあまり語りたがらない。なんといっても、わが国の誰もが気付いていなかつた一国の長のすりかわりだからね。いわば、恥な事件とでもいうべきであろうか。わが国民は極めてプライドの高い民族だからね。私も含めてね。君は私に感謝しなければならないよ。もちろん、君の熱意に負けたのだがね。君ときたら、一年間に300通もの手紙をよこすのだからね」

「その節は失礼しました大佐。しかし、どうしても、ガルド・イニエーブと直接会つたことのある人と話がしたくて」

大佐と私が言ったことで、氣を良くしたのか彼はますます饒舌になつた。

## 一章ガルド・イニエーブく2>

「いいだろう。グニア事件の話をしてやるう。まず私が知つてているのは彼の情報収集能力の高さだな。本来なら機密にもなるだろう統領の癖にいたるまでを詳細に調べて演じていたのだからな。そして、奇怪なのは彼がいつ統領と入れ替わったのか今をもつてしても謎ということだ。国の中にイニエーブの協力者が潜んでいたのだろう。ということになつてゐるが、どうも腑に落ちないのだよ」

私はニーチェリア元大佐の長いお喋りに幾分うんざりしながら、辛抱強く有益な情報を聞き出すチャンスを待つてゐた。そして、話がひと段落した時、すかさず訊ねた。

「ガルド・イニエーブとわかつたのは何故ですか？」

彼は話しに水を差されて不機嫌そうに眉をしかめたが、少し考えて、答えた。

「それは簡単だ。グニア様の死体が見つかつたからだ。顔を潰された痛ましいものだつた」

「顔を潰されたのに何故彼と？」

「我が国では警察によつて全ての人間の指紋がデータバンクに入れられているのだよ。もちろん、グニア様も例外でなくね」

「なるほど、それでは、偽者が何故ガルド・イニエーブだと？」

「グニア様とまったく同じ指紋をもつていたからだ。そして、ばれるやいなや、消えて犯行声明を出したのだ。我が国では最先端技術によつて、指紋の認証が公的なあらゆる場で使われてゐる。統領府も例外でなくね」

彼は最後にそう言つのが口癖のようだつた。まあそんなことはどうでもいい。つまり、ガルド・イニエーブは指紋にいたるまで、グニア氏の個人情報をいつの間にか盗んでいたのだ。そして、それほど用意周到にしておきながら、何故死体の指紋はそのまま残しておいたのか・・・・ここに私は違和感を覚えた。单なるイニエーブ

ーブのミスなのかもしれないが、とても世界の2大国を動かそうといふほどの野望のわりには随分とお粗末な結果だつたということだ。彼の目的はもしかして別にあつたのではないか。私はそう考えた。しかし、何の確証もなかつた。

「それで、イニエーブは指紋をどこで変えたのでしょうか？わかつていますか？そして、機械を欺くほどに指紋を変えることは可能でしょうか？」

私はさらに続けた。元大佐は立ち上がると、窓のほうを見ながら私に背を向けると言つた。

「蛇の道は蛇に聞けということわざが我が国にはあつてね。わが国ではもちろん指紋を変えるのは違法だ。しかし、別の指紋に変えることは可能なようだね。その瞬間もちろんゲルマンの国民でなくなるのだがね。すんでそんなことするものがいないわけではないようだ。そして、さすらいの指紋師といわれる男がいるらしい。」「その男の名前はわかりますか？」

「なんでも、アルバタール・フインガーマークと名乗つているそうだ。わが国でも全力で探したが何しろこの國の人間ではないようですね。しかし、君が指紋を変えたいといえば向こうから寄つてくるかもしれないね。しかし、それには莫大な金がいるだろう」

「わかりました。ありがとうございます。大佐。感謝します」

私はこうして大佐と別れた。次はいかにして金持ちを装い、フингガーマークと如何に接触するかであった。

## 一章ガルド・イニードルーム

お金は当然もつていなかつたので、故郷に戻つた私はガルザ二叔父に相談することにした。ガルザ二叔父の家、つまり私の青春時代を過ごしたトールキアという町にある石造りの家の前にくると、従妹のサニチエートが気づいて、私に駆け寄つて来た。

「アッシュ兄さん。お帰りなさい。来るという手紙をもらつて待つていました」

十分魅力的な若い笑顔は一時、復讐を忘れさせたが、立ち止まつている暇はなかつた。サニチエートに挨拶もそこそこに、叔父の待つ家へと入つた。ガルザ二叔父はいつものような暖かい笑顔で私を迎えてくれた。

「アッシュ。まあゆっくりしていけ」

叔父の言葉はもちろんありがたかつたが、私に時間はない。単刀直入に切り出した。

「叔父さん。どうしてもお金がいるんだ。どうにかして、お金を得る方法はないだらうか？」

「叔父は煙草を軽くふかすと、心配そうに私を見た。

「お前が、大学で法外の五貴族について調べているのは知つている。確かに、秋の大殺戮にはやつらが関わつてゐるのは周知の事実だ。お前もそれは知つてゐるだろう。だが、復讐を考えるなど馬鹿げたことだ。もつと自分の幸せを考えてはくれないか」

叔父は私の内面を驚くほど理解していた。だが、私の信念の固さは理解していなかった。必ず母の復讐を果たして初めて母は安らかに眠れるのだ。搖るきない意志でいたが、叔父を心配させるのは本意ではなかつたので、努めて明るく言つた。

「叔父さん。僕は復讐なんて考えていませんよ。安心してください。たしかに、彼らが憎い。そして、彼らの研究をしていくことも事実

です。しかし、自分の身や叔父さんの家族、いや僕の家族も同然の人たちを危険にさらすことはないです。投資をしようと思いましてね

壮年の叔父は幾分安心したように、

「それならば私が保証人になつて、お金を借りてあげよう。いくらほどだね」

「助かります。100万マルセルほど」

マルセルはアーリア帝国の貨幣単位で、ゲルマンのマルクと並んで国際通貨となつていた。決して、この金額で足りるとは思わなかつたが、私はこれを元手に増やすしかなかつた。叔父はアルベルト銀行の友人から借りてあげようと、言つて、一週間後に私の口座に振り込んでくれることになつた。帰り際、サニチエエートがまた門の所で待つていた。

「お気をつけ」

私は妹のように思つてゐる彼女を危険にさらさないと直ちに誓いながら、この家には事が終わるまで2度と近づかない覚悟であつた。それだけに、私は彼女の眼をじっと見て、

「ありがとう。健康に気をつけて」

と言つて家をあとにした。彼女は悲しげに、そして幾分私を哀れむように見送つてくれた。

それからの一週間私は自分の下宿でお金を増やすための投資の準備をし、またガルド・イニエーブのグニア事件での犯行声明を過去の新聞から探し見つけた。

その文とはこうだつた。

## 一章ガルド・イニエーブ<4>

親愛なるゲルマン国民に告ぐ。私、ガルド・イニエーブは諸君らの無知蒙昧な国家に対する信頼を明らかにすべく、今回の犯行を行つた。法外の五貴族にとつてみれば、一国のトップを冷たい亡骸にし、なおかつ、なりますますといったことは容易いことなのだ。諸君らは、普段から自分たち以上の国はないと思ひ驕つてゐるだろうが、法外の五貴族にかかるば、国さえも思いのままということだ。これにこりて、私を捕まえようと馬鹿げたことは以後控えるがいい。

### ガルド・イニエーブ

これは、ある意味彼らしいともいえるが、本当に何の利害もなく、このような危険なことをするものだろうか？私はまたもや引っ掛けた。一步間違えば、これはゲルマンという国を根底から敵に回す危険もはらんでいたのだ。現状はたしかに、ガルド・イニエーブとゲルマン国は敵対関係にあるわけではないので、彼のもくろみは成功したといえる。だが、どうしてもそれだけに思えなかつた私はイニエーブが統領とすりかわつたと疑われるだろう時期から可能な限り、統領グニアの出した命令を詳細に調べてみた。すると、ある新聞の一記事に、『グニア統領、行方不明者の指紋データの消去を命じる』とあつた。ガルド・イニエーブの指紋の件を聞かされていた私はこの記事が気になつてしまふがなかつた。表向きは近年の人口増加によるデータの膨大化によつて、記憶装置の負担を減らすためとあつた。しかし、行方不明者はゲルマンの人口およそ一億に対し、わずか10万人であつた。私は何かしら気になりながらも、投資の準備に次の日から忙しくなつたので、それ以上調査はできなかつた。投資の方法は手早く言えれば詐欺の一種だつた。世界中から、資金を集め、集めた資金の一部を配当し、どんどん無限に拡大させていく。私の計算によればこの方法を使えばおよそ、露見するまで

に10年。つまり私に残された時間は10年だった。その間に金は入り続けるのだ。当然逮捕や重罪は免れないが、私はわが身を犠牲にしても、法外の五貴族への復讐の念は強かつた。

さつそく私、アッシュ・クロフォードは実体のないダミー会社を作り上げ、資金集めに奔走する有能な人材を雇った。法外の五貴族の研究を行っていたせいもあって、こういう裏稼業にはかなり詳しく述べていた。こうして準備は整つた。私は新聞に広告を出した。『私はある理由があつて、指紋を変えたいのです。お金に糸目はつけません。連絡ください。 0× - 4535 - ビルグ・オノエーブラ』

法外の五貴族に私の身元を知られないように偽名も買つた。あとは指紋師アルバタール・フインガーマークが喰いつくのを待つだけだつた。もし違つてもイニエーブの指紋を変えた人間を見つければいいだけだ。他人の指紋をそつくり写しかえるなどという神業はできて、数人だろうと思っていた。もし、本当にできる人間がいるのならばだが・・・・・。

## 一章ガルド・イニエーブル5

一週間後、偽名であるビルグ・オノエーブラ宛ての電話は30件来ていた。半分冷やかしのようなものもあつたが、あとは有名な整形外科医などの本物の電話もあつた。私は人を雇つてその内容をレポートにして書き出させた。そしてある一件に私は目がひかれた。そこには、指紋を消すだけでなく、指紋をそつくりうつしかえることができると書かれていた。そして、その電話をしてきた相手はアルバタール・フィンガーマークだつた。私は確かな手ごたえと同時にあまりにもうまくいきすぎていることで不安を覚えた。だが、とりあえず、会つてみることにした。何回か手紙を往復した後、私は世界中のセレブたちの保養地になつていった神秘の国サルガッソーの高級ホテルで彼を待つた。もちろん高級ブランドの服に身を包み、靴、髪形、流行までセレブのようにふるまうこと私が課せられた。自分は金を持つていると相手に思わせることが重要だつた。そして、現れた男は東方の人らしく背の低い、浅黒い肌をしていた。

「ビルグさんですか？私はフィンガーマークの代理人でサムというものです。あなたが、国際語であるジャスール語があ出来になるということで、私が選ばれました」

ビルグと呼ばれた私、アッシュ・クロフォードはフィンガーマーク本人が出てこなかつたのを残念に思った。そして、ジャスール語というのはアーリア帝国の言語で、私がもつとも得意とする国際公用語である。どうやら、フィンガーマークはジャスール語ができるいらしかつた。私は気を取り直して喋りだした。

「はい。ビルグといいます。私は様々な享楽をむさぼってきたのですがね。他人になりますという最高のスリルは味わえていないことに気付いたのです。フィンガーマーク氏は何でも他人の指紋をうつせると聞きましたが、本当ですか？」

サムは満面の笑みを浮かべて、

「はい。私の主人にかかるべきことは可能です。ただし、それを行うには手が必要です。残酷な話ですがね。生死は問いません。両手がいいですね。それは御自分で用意していただかないと」「わかります。それはごもっともです。しかし、サムさん。本当に可能だという証拠をこちらもみせてもらわなければなりません。そうでなければ死体にしろ、手を準備するということはリスクが高すぎます」

私は静かにしかし、力をこめてささやいた。サムはそのような言葉も想定内といった様子で、ささやき返した。

「あなたが指紋まで変えたいということは、相手はゲルマン国人なのでしょう？ 実は、統領グニアの成りすまし事件ご存知ですか？ あれはうちの主人も一枚かんでましてね」

「ということは、ワインガーマーク氏はあの、ガルド・イニエーブにあつたことがあると？」

私は一層、声を潜めてサムに顔を近づけた。サムも顔を近づけて、やはり小声で言つ。

「ビルグさん。その名前だけは出しちゃいけません。法外の五貴族の怖さはむしろあなた方よりも法外の人間こそ、知っているのですよ」

サムの顔には怯えの色が濃く漂つてゐる。なるほど、と私は思つた。とにかく、この男は何か知つていてると確信した。そして、前もつて準備しておいた超小型のゲルマン製の発信器を自分のコップの中に入れると、セレブの間で流行つていた親愛の証として口をつけたコップの飲み物を相手に半分飲ませるという行為をするふうを裝つて、サムに超小型発信器を飲ませた。

「では、また後日話あいましょう」

こういつて私とサムはがつちりと握手をして別れた。私はサムの体内から出る発信器の電波を頼りに追跡を開始した。

## 一章ガルド・イニエーブル

最初、追跡は順調だったが、発信器が体内にとどまる時間までに、相手の居所を掴まなければならぬという焦りもあつた。サムの信号はサルガツソーのある別荘地帯まで来ると、動かなくなつた。高級別荘地は一軒が広い敷地を持つてゐるので、サムのとどまつてゐる別荘地の番地はすぐにわかつた。その辺りを散歩をするように、歩いたが、門以外の壁の上部には有刺鉄線が張りめぐらされていた。さて、どうしたものか、と思案に暮れていると、ふいに声をかけられた。

「何をしているのだね。若いの」

人相の悪い、男がこっちを見て聞いてきた。

「いやあ、散歩をしていたら道に迷つてしまつてね」

私は平然として言うと、男は低い声で脅かした。

「ここはアルバタール・ギンガジザス様のお屋敷だ。用がないならさつさと帰れ」

アルバタールという名前はフィンガーマーク氏の名前と一致する。私はまたもや、何か仕組まれたような作為を感じたが、逆にいえばこれは情報を聞き出すチャンスでもあつた。

「ギンガジザス様? 何をしている方だね? 私は鉄鋼王デニス・オノエーブラの四男ビルグ・オノエーブラだ」

私は早速この偽名の効果を確かめる機会を得た。アーリア帝国の鉄鋼産業界の巨人才ノエーブラ家を簡単にあしらうわけにはいくまい。案の定、男は慣れていない作り笑顔で、

「そうでしたか。そうとは知らずに申し訳ありません。私は実は、こここの屋敷に雇われているラビンというものでして、以後お見知りおきを」

と精一杯媚を売つた。小物とはこうしたものだ、と私は思つた。

同時にアッシュ・クロフォードという本名でなくて良かつたと思つ

た。偽名とは不思議と違つた自分を生まれさせてくれるものだと感じた。私は威厳のある顔つきで、せつかくだから、この館の主人に会いたい、と告げた。ラビンは

「主人は忙しい人として、屋敷内の案内程度でしたらできますが、御礼は弾んでもらいますよ」

と渋つたが、私が屋敷案内で良いと答へ、お金を渡すと、それではどうぞとばかりに手招きのような不思議な動きをした。こうして門を開けてもらい、私は中に入ることができた。屋敷の中はがらんとしていたが、まばらに使用人らしき人間が働いていた。豪華な2階建ての邸宅はゆうに一階だけで20室はありそうだった。

「どうです。この、絵画は？」

ラビンは美術が好きらしく、有名な絵を自慢するために私を中心としたような有様だつた。イタリーナやフランシエルなどの国々で描かれた絵画が多くあるようで、聖母の絵や天使と悪魔の有名な作品が贋作か本物かどうかは判断できなかつたが、並べられていた。どうやら、これらをサルガッソーにやつてくる金持ちに見せて小遣い稼ぎにしているらしい。

私は屋敷の奥に入つて人影のなくなるのを確認すると、ふいに薬をしみこませたハンカチをポケットから取り出すとラビンの口元に後ろから押し当てた。ラビンは激しく抵抗した。私が口に手を当てることができたのは一瞬だつたが、それで十分だつた。

「な、何をする。お前、ただの金持ちではないな、何者だ……。」

・

とそこまで言つて、倒れた。私は彼の体を物置まで運ぶと、中に入れた。さて、いよいよフインガーマークの屋敷を探ることができる。日も暮れかけていて、使用人は先ほど皆帰途につきかけていたのを確認していた。後はラビンのような警備人が心配だつたが、私はラビンから奪つた銃と地図をもち、服を着替えて、さらに屋敷の2階へと上つた。

アルバタール・ギンガジザスという人間が、フィンガーマークと同一人物かはわからないが、可能性はかなり高いように感じた。それだけに、ガルド・イニエーブの手がかりを得られると期待して私は主人がいなはずの部屋に入った。そして予想通り、そこにいたのはサムと名乗った男だった。だが、既に息をしていなかつた。死体が一体そこにはあるだけだった。これは、一体??私は動搖し、呆然と立ちつくした。

## 一章ガルド・イニードル

サムのこめかみには穴が開いており、即死だつたようだ。銃で至近距離から頭を一発撃たれた跡が残つてゐる。一体何者がサムを？私は考えた。そして、フインガーマークとはサムなのか？疑問も浮かんだ。すると、トントントンとドアをノックする音が聞こえた。私は慎重にドアの裏に回ると静かに相手が入つてくるのを待つた。

「旦那様。飲み物をお持ちしました」

使用人らしき、髪を生やした小さな男が部屋に入つてきた。

「だ、旦那様。ヒイ」

私は男の背後に回ると銃を背中に突きつけた。

「静かにしろ。この男はお前の主人か？」

小柄な男はまた、ひいと小さな声を上げたが、やがて

「はい。そうです。旦那様に間違ひありません」

と答えた。男の声は動搖しているのか上ずつてゐる。明日から仕事を失うだらう彼の境遇を考えれば哀れまずにはいられなかつたが、人の心配をしている場合でもない。このまま警察に通報でもしようものなら、まず疑われるのが私だからだ。とりあえず殺人が露見する間に手短に男に尋問した。

「主人の仕事はなんだ？」

「ギンガジザス様は法に触れる手術を多く行つたせいで、今はもうぱら裏の仕事をしてゐる医者です。あなたがギンガジザス様を殺したのですか？」

間違いない。フインガーマークはギンガジザスであり、サムだつたのだ。

「違う。私ではない。恐らく、お前の主人を殺したのはガルド・イニードルだ。奴のことについて知つていてあれば話せ」

「あの法外の五貴族の……。たしか、5年前に主人が確かに手術をつけおつたことがあると思います。その時は多額の金額を得て、

専属の指紋師になつたようです。ただ、最近は仕事がないといつて旦那様も愚痴をこぼしてらつしゃいました。それで、最近、新たに客をイニエーブに隠れて探していましたようです」

男の声は震えていた。それもそうだ。死体はまだ暖かい。ガルド・イニエーブか、もしくはその手下は確實にこの国にまだいるだろ。もしかすると、この屋敷にいるかもしれないのだ。私は麻痺していだ恐怖が湧き上がつてくるのを感じた。だが、ここで諦めるわけにはいかなかつた。

「お前も仇が打ちたいだろ。ガルド・イニエーブに関する情報は何かないのか？」

良く見ると主人の部屋は荒らされていた。ガルド・イニエーブ一味は何かを探していたようだ。

「そういえば、ガルド・イニエーブの現在の指紋がわかるデータを保存していると言つていました。それさえ、あれば自分は安全だとも。あなたは一体何者ですか？」

使用人にしては知りすぎていると不信に思つた。私は逆に男の名前を訊ねた。

「私はギンガジザス様の秘書デンドラロと言います。もう仕えて20年になります」

「では、デンドラロ。指紋データのあるところに案内しろ。ギンガジザス氏を殺したやつも、まだそこにいるかもしね。仇を討ちたいだろう？」

「それは、もちろんですが、私は銃の扱いには慣れておりませんで···

「わかった。それはいい。私が撃つ。お前は案内すればいい」

「わかりました。こちらです」

怯えていた男は覚悟を決めたように部屋の外に出て歩き出した。どうやら、この屋敷は地下があるらしかつた。生ぬるい風が階段の下からそよいできた。一歩一歩階段を踏みしめながら私の心は、ガルド・イニエーブに会うチャンスに恐怖よりも心躍る気もちになつ

た。何年この時を待つただろうか。

「や、ドアが開いている」

デンダロは小さな声でつぶやいた。どうやら先客がいるらしかった。私たちは静かに音を立てないように中に入った。

## 一章ガルド・イニード<sup>8</sup>

地下室はひんやりとしていた。石造りの室内を柔らかな灯りがともしている。二人はおそるおそる奥へ歩を進めた。ふいに、私は物音を聞いた。奥の部屋から聞こえてくるようだが、音が反響してどこから響いてくるかわからないようでもあつた。だが、確かに人の気配もする。デンダ口の背に突きつけたままの銃を持つ手をぐつと握り締めた。デンダ口も心得ているらしく、そろりそろりと足を動かした。進むにつれ、いよいよ物音が大きくなってきた。どうやら、聞こえている物音はやはり、奥かららしかつた。私は身振りで「デンダ口にそこにどどまるように指示して、奥へと一人入つていい」。耳元で「逃げたら、どうなるかわかつてないな」とも脅しておいた。デンダ口は小心者らしく、青い顔で無抵抗に目をつぶっていた。恐らく、忠誠心のみでここまで出世した男なのだろう。

私は灯りで作られた人影が動いているのを確認し、本体がいるに違いない方向に銃を構え声を発した。

「動くな」

何かを探していた男はびくつとして、両手を上げると、抵抗する意思がないことを表した。男の顔立ちは無骨でたくましかつた。日に焼けた黒い肌とその隆起は少なくとも私以上の筋肉が備わっていることを確信させた。年の頃は50くらいだろうか。顔には皺が刻まれている。さすがにフィンガーマークを殺した人間らしく、目には冷たい感情が滲み出ている。

「なんだい。坊や。おじさんは今仕事中なんだ。邪魔しちゃいけないな」

そう両手を上げたまま一言、殺人者は言った。

「ギンガジザスを殺したのはお前か？」

私はわかりきつていたことを聞いた。

「さてね、知らないね。坊やはこの屋敷の雇われ人かい？おかしい

な。家にいるやつは銃持つている警備兵は全て始末したはずなんだ  
がね」

「この男は嘘をついていた。警備兵を殺したと言っているではない  
か。やはり、ギンガジザス、フィンガーマークを殺したのはこの男  
に違ひなかつた。私は相手がもし、肯定すれば即座に引き金を引く  
つもりで聞いた。

「質問をするのは私だ。お前はガルド・イーホーブか？」  
変な沈黙が辺りを包んだ。男は両手をだらりと下げて、ポケット  
に手をつっこんだ。

「動くな」

私はさつきより大きな声で言つたが、さして、射撃の腕があるわ  
けでもない。男を万が一殺すのにためらいがあつた。男はポケット  
から煙草を取り出すと、ライターで火をつけゆっくりと吸い始めた。  
「坊やも、もしかして、同じ目的で来たのかね。ガルド・イーホー  
ブの指紋が欲しいんだろ」

ふいに背後で気配がしたと思った瞬間、銃声が響いた。私はあま  
りの速さにあっけにとられていた。男が撃つたのだ。抜く瞬間さえ  
見えなかつた。倒れたのはデンダロだつた。その手には銃があつた。  
私はこの秘書を甘く見すぎていたらしい。九死に一生を得た。男は  
私も撃つかと思つたがそつはしないらしい。

「何故。私を助けた？」

「別に坊やを助けたわけじゃねえよ。この男がデンダロか、そうい  
や始末し忘れていたぜ。まあ昔、死んだ家族に良く似ていたからと  
でも言つておくかね」

男は顔を見ただけで、デンダロとわかるほど下調べをしているら  
しかつた。それは事実だつた。だが、言葉の後半は、また適当な嘘  
を並べているらしかつた。敵ではないようだつた。男の銃の腕前は  
私を遥かに凌駕しているらしかつたので、私も銃口を下げた。形勢  
は逆転したのだ。男も持つていた銃を下げた。わりに紳士的な男ら  
しかつた。

「坊やが法外の五貴族の手下っていうんなら、こんな楽なことはありやしないわな」

そういうて男はまた煙草の煙を吐き出した。

「俺は、法外の五貴族に法外な手段で戦う組織の一員だ」

男の口から出たのは驚くべきセリフだつた。私は味方を得たと思つていいのだろうか？はつきりとはまだ判断がつかなかつた。

## 一章ガルド・イニエーブ⑨

「法外の五貴族と戦う？組織？」

私は寝耳に水がはいつたかのように、驚いた。この男は信用できなかつた。だが、とりあえず私の命を奪う考へはないようだつた。半信半疑ながらも話を進めることにした。

「“法外な”ということは法の枠内に入らない行動をして、法外の五貴族を倒そうと？つまり、今回のように何人もの罪のない命を奪うということか」

少し怒氣をはらんだ口調で私は男に問いただした。

「坊や。だから、坊やなんだよ。罪の良し悪しは俺らが決めることではない。ただ、法外の五貴族と戦うためだけに作られた組織といつたはずだ。そのためにはあらゆる手段もいとわないのだよ。ただ、それだけだ。ほらっ。ガルド・イニエーブの指紋だ。もつとも、それは過去の物らしいけどな。それで満足するんだな」

男は小型の電子記憶装置を私に渡すと、さらに続けて  
「さて、やつの現在の指紋も手に入つたし、俺はそろそろお暇するぜ。俺のことは“スモーク”とでも呼んでくれ。また生きて会えたらの話だがね。この屋敷はもうじき爆破するぜ」

と言つて今いる部屋から出て行こうとした。何故このスモークが、私にここまで親切なのかわからなかつた。そして何故顔を見られたにも関わらず私を生かしておいでいるのか。

「待て。何故私を殺さない？」

スモークは蛇のような恐ろしい目でこちらを見ると

「殺して欲しいのかい？」

と聞いた。私が何も答えないのをみると、スモークは去つていつた。脱出は簡単だつた。使用人は既に引き上げているらしく、屋敷には人影もなかつた。警備兵の姿も見えなかつた。どうやら、スモークはかなりの人数を率いてきていたらしい。死体もきれいにかた

づけられていくようだつた。急いで屋敷を出て、歩いて最寄の駅に着くと、ギンガジザス邸から煙が上がっていた。

法外の五貴族は必ず倒すと誓つていたので、思わぬライバルの出現に、少し先を越されないか不安になつた。しかし、今日の収穫はガルド・イニエーブの指紋が手に入つたことで満足しなければいけない。その夜、電子記憶装置のデータにはたしかに、何者かの指紋が入つていた。だが、ガルド・イニエーブも馬鹿ではない。ギンガジザスが死んだことに遅かれ早かれ気づくだろう。その前に過去の指紋をどう使つて、イニエーブを追いつめるのか?と考えたが、一個人には不可能なものばかりだつた。スマーケの組織にはたしかに力がある。だが、私も法外の五貴族の知識に関しては勝りこそすれ劣つてはいなはずだ。何か、もう一つ、ガルド・イニエーブの居場所を見つける情報が必要だつた。そのとき、はつと思い当たつた。そうだ、グニア事件・ゲルマン統領への成りすまし事件 の時消された行方不明者の指紋のことが浮かんだ。もし、あれが、ガルド・イニエーブが自分の昔の記録を抹消するために行つたことだとしたならば・・・・・再びゲルマンに向かう必要があつた。

ゲルマンは以前きたときと季節が変わっていて、もう暑かつた。今度はゲルマンでありきたりな服装をして、うまく街に溶け込んだ。行方不明者の指紋の照合を行つてくれる部署がこの国にはあって、行旅不明人捜索部というらしい。私はさっそく、過去のガルド・イニエーブの指紋を持つていった。調査には2～3週間かかるらしい。ゲルマンは大きな官僚国家であったが、腐敗もまたひどかった。最初一ヶ月といわれたとき、どうしようかと思ったが、賄賂を払うことによつてだいぶ縮まつたのだ。もっと急いで欲しかつたが、それ以上はいくらお金を積んでも無理らしかつた。

暇な時間などない。私はライバルとなるだろう、スマートの組織を調べることにした。大きな組織ならば、当然何らかの情報も出ているだろう。首都アルベルンのカルトアサラ大学の図書館で私は調べた。過去20年の間に、法外の五貴族に挑んだ組織は4つあったが、今は全てなくなつてゐるらしい。この4つのうちのどれかがスマートの組織の前身なのだろうか。組織の名前は『天使の輪』『革命団』『国際警察機構』『国際協同体犯罪部』前者2つが、民間の組織。後者一つが公的な国際機関である。だが、4つとも、壊滅したとある。このような巨大な組織をも退けてきた法外の五貴族の恐ろしさを改めて認識した。私のやり方は甘かつたのだろうか。いや、そうではない。法の外というところは、私も同意する。本当はしたくないのだが、金集めに違法すれすれのことをやつてゐる身としては否定などできるわけもなかつた。だが、人を無造作に殺す組織もまた、法外の五貴族と同じ穴のムジナではないのか。そう思つからこそ、スマートたちの仲間になろうとは思わなかつた。2週間調べてわかつたことは、あまりなかつた。暗い氣もちでいたところに、指紋の照合結果が届いた。

そして、2週間後結果が来た。答えは該当者なし。これは予想通りだつた。何故なら行方不明者のデータは偽のグニア統領によって既に抹消されているはずだからだ。しかし、同時に私は賄賂で、犯罪歴のある人間のデータについても調べてもらつていた。結果は見事にあたつた。ヨーゼフ・ケックスルーという名前の前科者とぴたりと一致したのだ。犯歴は窃盗だつた。住所はズデー＝県アルタラ街7-18。私はそこに向かつた。いよいよ、ガルド・イニエーブの本名を掴んだのだ。これから過去を暴いてやるぞ。待つている、ガルド・イニエーブ。

アルタラ街というのはゲルマンでは珍しい貧民街だった。住所の場所を人に聞いて回つたが、ジャスール語ができる人間はいなかつた。聞かれた人々は黙つて笑顔を向けてくるだけだった。仕方なく、地図を頼りにようやく、ヨーゼフ・ケックスルーの当時の家を見つけた。が、見るも無残な廃墟であつた。みすぼらしい家に雑草などが生え放題になつていて人の住んでいる気配はなかつた。少し考えた後、通訳をアルベルンから呼び寄せた。通訳の人は朗らかで、有能な女性だつた。名前をコレニア・マクマーシといつた。私たちはすぐに打ち解け、コレニア、ビルグと呼び合つことになつた。私はさつそく、近所の住人にコレニアを介して話を聞いた。最初に聞いたのは、この街の長老とも呼ばれる老人だつた。

「ヨーゼフ・ケックスルーという名前を覚えていませんか？」

「ああ。覚えているとも。可哀想な子だつた。今はどうしているのやら」

「知つてることを何でも教えてくれませんか？お礼は弾みます」「わしらを貪しい者と思って馬鹿にしているのか？若いの」

「いえ。そんなことは、あくまで気もちです」

「ふん。まあいいだろう。話してやろう」

「感謝します」

ヨーゼフは若くして両親を亡くし、よく隣町の子供たちにいじめられていたらしい。祖母がいたが、もう年で介護も彼がしていたらしい。子供のヨーゼフ少年にとって、このような、居場所のない境遇がどれほどつらかつただろうか。彼はやがて、成長するにつれ、人の顔色を窺うのがうまくなつていつたと老人は話した。そして、抜群の物真似の才能を開花させ、詐欺を繰り返していたという。その時捕まつたのが、記録にあるデータであろう。そして、刑務所を

出た後パタリと消息を絶つたらしい。最後に老人は、彼が詐欺で貯めたお金で、『死者復活の技術』の情報を収集していたことを話した。

「決して叶わぬ禁断の果実に手を出そつなど・・・・・。変わった青年じゃつた」

老人は最後にこう言って懐かしむように遠くをみやつた。

なるほど、彼が何をしようとしているのかの情報がとりあえず手に入った。もちろん可能性の域を出ないが、ヨーゼフことガルド・イニエーブは死者の復活に興味があるらしい。これが、大きな鍵になりそうだ。私が何故このようなことを調べているかコレニアは興味をもつたらしかつた。ただ、彼が今どこにいるのか探している、とだけ答えた。聰明な彼女はさらに聞こうとはしなかつた。こうして、私たちは握手をして別れた。彼女の好意は感じていたが私のような終末者が応えられるはずはなかつた。そして、イニエーブは一体誰を復活させようとしているのか。そのようなことが、可能であるはずもないのだが……。彼の犯罪で貯めた金をもつてすればあるいはとも思った。そして、その技術は私にとつても母の生き返りを夢想させるには十分だつた。何もかも、が元通りになるなんてありえないにもかかわらず。

## 一章ガルド・イニエーブく12く

あたり一面に金色の庭が現れた。小麦だった。新しい世界の門出に立つてゐる氣もちでガルド・イニエーブは庭の中央に立つた。大いなる小麦“ドラゴニア・エターナル”から取れるエキスを抽出すれば、夢はきっと叶うに違ひない。法外の五貴族として、数々の悪行を重ねてきた甲斐があろうというものだ。自然と笑みが漏れる。ようやく、ようやく今度こそ叶うに違ひない。この至福の楽園には誰であろうと決して入ることはできないのだ。

「アッショ。アッショじゃないか」

ふいに後ろから声をかけられた。本名を知つてゐる人物がいたのには驚いた。ここはアーリア帝国のイエニチヨーリ大学だつた。蘇生技術の第一人者、アルラウネ博士の研究室で、何故私の本名を知るもののがいるのだろうか。恐る恐る振り返ると、ガルザ二叔父だつた。なるほど確かに聞いた声だつた。

「叔父さん。何故ここに？」

「出張でここに博士に会いにきてね。仕事なんだよ」

叔父は真剣にそう話した。叔父とは別にアルラウネ博士に用事があつた。ガルド・イニエーブの重要な情報をもらいに。できることなら叔父は巻き込みたくなかった。何よりも従妹のサニチヨーネー<sup>ト</sup>を。

「アッショも似たような用事らしいな」

叔父は察したように言った。

これ以上私の本名を吹聴されるのが我慢できなかつたので、早々に別れようとした。しかし、叔父はお茶でもどうだ、と半ば強引に私を誘つた。渋々と私も危険を承知でカフェに向かつた。

「投資は順調か？」

「ええ。まあまあです」

そわそわしながら私は答えた。

「私も投資をしてみようと思ってな。ビルグ投資会社といつとこりに投資したよ」

なんだって。これは果たして偶然なのか。ビルグ投資会社とは私が作つた無限連鎖講の運用会社である。何故叔父がよりによつてそんなどころに投資をしたのだろうか。少し聞いてみることにした。

「それで叔父さん。どんな会社なんですか？」

「なんでも、会員を増やせば増やすほどお金が入つてくる仕組みなんだよ。今日も、さつそく知り合いの博士に世間話ついでに入らなかつたのだよ。何故か断られたがね」

叔父は満面の笑みで煙草の煙を吐きながら話した。叔父は勤勉な人間だが、人の好さでだまされやすいのだ。なんということだ。お金が入れば入るほど叔父は首謀者の私との関係から共犯者として扱われるに違いない。そして、お金を損しても、また地獄だつた。というのも、カレラ叔母は重度の心臓病にかかり、多額の手術費がいるようになったからだつた。叔父はそう私に話すと、最後に立ち上がりつて明るくいった。

「こつちのことは何も心配するな。仕事で作った人脈できつとカラを助けてみせる。お金を返せなどとはいわないから心配するな」

「叔父さん。私も出しますよ。いくらですか。いつてください」

だが、叔父は黙つて首を振つた。

「何も心配するな。アッショ。万事うまくいく。うまくいくぞ」  
自らに言い聞かせるようにカルザ二叔父は優しく言つと帰つていつた。私はしばらく茫然としていたが、本来の目的を思い出してもアルラウネ博士に会いに、研究室に再び戻つた。

博士は部屋に戻ってきていた。汚れた白衣を着ていた。薬品がかかつたのだろう、変わった黄色に変色していた。体は小さかつたが頭は大きかった。脳の後頭部が大きく後ろにせりだしていた。大きな脳をもっているらしかった。だが、言動はどこか奇妙だった。まばたきを頻繁に繰り返し、口元には薄笑いを常に浮かべていた。

「博士。人間の蘇生について聞かせていただきたい」

思い切って言ってみたが、答えは冷たいものだった。

「断る。わしは今、あるお方と研究をしていてな。決して他言無用というわけじゃ。わしの研究の偉大さの理解者がよつやく現れたのじゃ」

「博士。お金なら出します。私も関わらせててくれませんか?」

「だめじゃ。だめじゃ。お前さんの財力がどれほどのものか知らんが、あのお方は桁外れの金持ちじゃ。素性は謎じやがのお」

「1000万マルセルでいかがです」

「ケツケツケ。そんなはした金いらぬわ」

間違いない。これほどの財力を持つているものはガルド・イニエーブに違いない。この博士が計算違いをしていたのは私の意志の強さだった。若い私の容貌もあなどりやすかつたのかもしない。翌日から、掃除夫の姿をして、博士の動きを探った。博士は学内の誰にも関心ないらしく、2・3度すれ違つてもまるで、ただの障害物のように私を避けていった。そうすると、博士はある日、学校の外へ出かけた。すかさず後を追つたが、どうやら、博士を追っているのは私一人ではなかつた。じつと、博士をつけている男がいた。スマートだった。スマートはとっくに私に気づいているらしく、にやりと薄気味悪い笑いを浮かべた。博士が昼食に入つた時、私とスマートも同じ店内で食事をした。スマートは近づいてきた。

「よう。坊や。驚いたな。この男にまで辿りつくとはね。過去の指

紋が役に立つたようだな

「おかげさまで。だが、お前たちの仲間になるつもりはない」

「それでいいさ。だがな。気をつけな。組織には俺のように優しい奴らばかりじゃないんだぜ。おつと奴が動き出したぜ。いくとするとか」

博士は大きなビルの最上階にエレベーターに向かつたらしい。それとともに、大きなプロペラ音があたりをにぎわした。

「まずいな。逃げられる」

スマーケは軽く走り出すと、銃弾をヘリコプターに打ち込んだ。ヘリからは数十発の銃弾が発射されて、返ってきた。スマーケはその反撃を予期していたらしく、壁に隠れてかわしている。ヘリコプターは何事もなかつたかのようにどこかへ飛んでいった。

「さて、発信器つきの銃弾を打ち込んでおいた。一緒に来るかい。坊や」

私は黙つて肯いた。

スモークは私を組織の仮本部のようなところに案内した。道中、スモークに彼らの組織のことを少し聞いた。

「法外の五貴族には『法外の革命結社』と呼ばれているがね、我々は自分たちのことをなんとも呼んでいない、ただ『我々』というだけだ。俺が部外者である坊やにいえるのはそのくらいさ。いや、ビルグ・オノエーブラを騙るアッシュ・クロフォード君」

「私のことを調べたのか。スモーク」

「おつと。怒りなさんな。こっちも見逃した以上は、それなりの調査はするさ。君は攻撃はいいが、防御はまだまだな。もつとも、ガルザ二叔父さんが現れるまでは、こちらもなかなか掴みようがなかつたがね」

スモークはまた軽く笑った。確かに、彼らの組織をもつてすれば、私のことなど調べるのは容易だろうとは思った。知られたところで、法外の五貴族にさえ知られなければ敵ではないのだから、構わないという気もちもあった。むしろ私の素性を知つて、積極的に勧誘していくだろうことはこちらも想定済みである。

到着した仮本部は薄暗い部屋だった。高層マンションの一室にスマートの仲間も集まっていた。

「き、君は」

思わず、私は目を疑つた。コレニア・マクマーシだつた。

「ようこそ。ビルグ。いえ、アッシュ。この前はどうも」

女はすいぶん化粧の仕方などを変えてはいたが、間違いなくコレニアの顔と声であった。

「コレニア。君もこの組織の一員だつたとは。当然あれも偽名なんだろう?」

私は不快気に言った。

「ええ。そうね。でも、あなたコレニアを気に入つていたようだか

ら、そのまま呼んでもよくてよ。もつとも本物は50近いおばさんだけどね」

女は意地悪そうに笑った。彼女を罵倒することもできたが、目的の前には個人の感情など無意味だつた。はやく、ガルド・イーエーの居場所をつきとめなければならなかつた。

「ふん。なんでもいい。それよりもスマートが撃ちこんだ。発信器が相手に見つからぬうちに、追跡しよう」

冷静に私が言うと、もう一人部屋のすみにいた若い男が口を開いた。

「いいねえ。こいつ。気に入った。もう仲間取りは、ちと不快だがな。よく、何をすべきか心得ている。俺はジョベルジアっていうもんだ。よろしくな」

男が差し出した手を私は黙つてみると

「追跡はどうなつてている」

とだけ言つた。ジョベルジアは肩をすくめてスマートを見た。  
「おやっさん。どうしましようか。仲間でもない。敵でもない」「安心しろ。坊やは俺たちの情報をもつてているわけではない。この作戦だけ協力者ということにして、その後はそれから考えよう。もう、すでに本部には了承済みだ」

スマートは部屋の中の椅子に腰掛け、テーブルの上にのつている機械をみながら言つた。これが追跡装置らしかつた。

「大丈夫かねえ。おい。ガゼル。お前も何かいつたらどうだ」

ジョベルジアはコレニアだった女にも聞いた。仲間内ではガゼルと呼ばれているらしい。

ガゼルは髪をかき上げて

「あら。私も賛成よ。この人頼りになるわ。それに本部の了承を得ているなら、私達が口を出すことでもないでしょ」

「そりや。そうだけじよ。ちつ」

ジョベルジアは舌打ちして、黙つた。

「この座標は、監獄島か……。またやつかいなところにい

るもんだな」

スマーケは一人つぶやくように言った。

監獄島？ 犯罪者たちの脱獄を防ぐために作られた人工島のことか。中には凶悪な犯罪者が囚われていると聞いたことがあった。私たちには、微妙な壁をお互いに感じながら、監獄島へ向かうことになった。ガルド・エーブがそこにいると信じて……。

当然、犯罪者たちの仲間による監獄の襲撃から島を守るために監獄島には様々な仕掛けがおかれていった。だが、看守たちは交代のために、島を出入りしていることはおよそ間違いない。正規ルートが使えない時にどれほどの困難が生じるか想像に難くない。スマートたちは真っ当な理由をつけて、入れるだけの力があるのか、いい見極めにもなる。彼らの組織に入るつもりは毛頭ないが、利用できるならば利用してやろうといったところだ。が、スマートはただ利用されるつもりはないらしかった。

「アツシユ。お前さんの持っている情報が欲しいのだよ。我々は確かに組織を組んではいるが、相手の情報を大っぴらに探るわけにはいかない立場でね。特にあの事件のことは」

過去を克服していたはずなのに、急にあの時の母を亡くした悲しみが襲ってきた。そして、同じくして記憶も脳裏によみがえってきた。スマートに無表情に顔を覗き込まれているのに気づくと、かすれた声で返答した。

「秋の大殺戮のことか。話してもしうがないことだ。私の母は流れ弾に当たって亡くなつた。それだけだ」

「それだけのために、復讐を？ 直接手を下した人間ではなく、首謀者を追いかけているのかね？」

「わかつてもらおうなどとは思つていいない。だが、法外の五貴族はかならず裁いてみせる」

ガゼルが少し苛立つた様子で口を挟む。

「昔、あなたと同じようなことを目指した組織はあつたわ。でも、敗北した。法外の五貴族にね。あなたは傲慢ね。何かを失わずに何かを成功を収めようなんて。ただ、だらだらと家族とも中途半端に距離を保ちながら、事が終わつたら何もなかつたように戻ろうとしている。ここにいる人間はね。何人もの人間をこの手で殺めてきた

のよ。それだけの覚悟があつて初めてやつらと戦えるのよ  
話はまだ続きそだつたが、スマートがすつと手をあげて興奮しているガゼルを制した。

「アッシュ。ギンガジザス邸でのことを覚えているかね？俺が助けなければお前さんは死んでいたんだぜ。恩にさせようつていうんじゃない。お前さんは甘ちゃんつてことだよ」

確かにその通りだつた。甘かったのだろうか。再び自問自答してみた。だが、やはり、彼らの信条とは、あいいれなかつた。

「私は私の道を行く。協力してくれなければ結構だ。私一人でやるまでだ」

そう言つと、ジョベルジアが腹をかかえて、笑いだした。

「クツクツク。とんだけ喜劇だ。どうやって俺らの組織の協力なしに、監獄島に行こうつていうんだ。たいがいにしろよ。このやろう」

後半では怒声に変わつていた。私は静かに去りうとした。が、スマートが銃を構えて私を制止する。

「卑怯だぞ。スマート」

歯噛みする私にスマートは

「とにかく、ついてきな。監獄島へ行く準備はもうすぐ整つ。お前さんの知識も必要なんでな」

とだけ言つた。渋々従つしかなかつた。

法外の革命結社は、アーリア帝国とも強力なコネがあるらしかつた。まもなく、迎えの車が来て、ヘリポートに私たちは到着した。肩書きは監獄島の犯罪者の実態を記事にするジャーナリストだった。プロペラが回りだし、4人は監獄島へ飛んだ。

海面からビル5階程の高さに監獄島は位置していた。この断崖から何人の受刑者が自由を夢見て、散つていったことは容易に想像できる。空から見る限り、この島には海岸らしきものがまったくないようだった。沖の激しい波は、波間に漂う無数の岩に打ちつけている。島の中心部の一角にヘリの離着陸場があつた。私たちはヘリを降り、出迎えの人間に監獄島の所長のところに連れていかれた。所長室はヘリポートからすぐの建物の3階にあつた。

「ようこそ。ジャーナリスト諸君。近年ここを訪れようとするつわものもいなくなってしまったね。まあ、ここでの恐ろしさを存分に記事にしてくれたまえ」

所長は座つたまま、黒子に生えた毛を一生懸命に手で引っこ抜こうとしている。私たちには目もくれない。スマートは何気なく、窓の外を見ながら質問した。

「どうやら、もう一機ヘリがあるようですが、先客ですか」「ここはスマートに任せたほうがいいらしい。それに、ガルド・イニードがここにいるとすれば、すでにここは敵地であると見たほうがいいかもしれない。慎重に行動しなければならなかつた。所長は作業を続けたまま、

「ああ。あれはね、囚人への面会だね。こんなところまでよくきたものだよ」

と呆れたように言つた。スマートはジャーナリスト風にペンをメモに走らせ

「その囚人の名前はなんですかね？取材できますかね？」

と訊ねた。ジョベルジアとガゼルは油断なくあたりを観察している。よく教育されている。問題はどこからどこまでが敵で、どこからどこまでがアーリア帝国の官吏かということだ。手段を選ばないといつても、アーリア帝国を敵にまわすとなると、さすがにまずい

だろう。眼鏡をかけた所長は初めてこちらを見た。

「さあね。直接そこに行つて聞いてみたらどうだい。おい。ゼルド」  
大声で、所長が叫ぶと、一人の背の高い男が部屋にのつそりと入つてきた。

「お呼びですか？」

「ああ。呼んだ。囚人に面会に来ている、なんといったかな。アルラウネさんだつたかな。その人が、いるところにこの人たちを案内してやりなさい」

所長が命令すると、ゼルドという男は少しビクッとしてから  
「はい。わかりました。こちらへどうぞ」

と部屋の外に出るよう私たちを促すと、先頭に立つてゆつくり  
と廊下を歩き始めた。4人は囚人の監獄にどうやら連れていかれる  
らしかつた。獄舎は所長室のある建物のさらに奥にあるようだ。

「さあ。着きましたよ」

しばらく歩くとゼルドが言つた。そこには、アルラウネ博士がいた。彼は私の顔を見ると  
「お前は！！」

と驚愕した。

「博士。ガルド・イニエーブはどこです？」  
私は思いあまつて聞いた。

## 一章ガルド・イニエーブく17>

「イニエーブ。そこにいたのか」

博士は私たちを見ながら誰かに声をかけた。

一瞬何を博士が言つたのか理解できなかつた。だが、博士は私以外の誰かを指してイニエーブと呼んだのだ。看守のゼルド、中年のスマート、若い女性のガゼル、うるさい男のジョベルジア。一体、誰がガルド・イニエーブなのか・・・・・。可能性として最も高いのはさつき会つたばかりのゼルドだろうか。だが、他の3人も信頼できるほどに時を過ごしていいたわけではなかつた。ジョベルジアが口を開いた。

「おやつさん。アッシュュという人間なんかもともと存在していなかつたんだよ。一杯食わされたわけだ。こいつがガルド・イニエーブなのさ」

スマートは少し考えて、

「アルラウネ。お前はこの中にガルド・イニエーブがいるといつているのかね？」

「わしのいうことに間違いはない。まあ良い。誰がイニエーブでも、あそこにいけばはつきりするじゃろう。イニエーブ以外は受けつけない。例の部屋に入る人間だけがイニエーブなのじや。ケッケンケ。ついてくるがいい。ゼルドお主も来い」

博士は不気味に笑つた。看守もどうやらついてくるようだつた。

私もとりあえずは誰がガルド・イニエーブなのかは置いておいて、秘密の部屋に行くことを決めた。真後ろにはジョベルジアが私を警戒して、ぴたりとついて歩いている。

監獄の奥深くには地下に通じる巨大な扉があつた。

「さあ、それぞれ指紋をあわせてみるのじや。黄金の庭に通ずる道を開くためのな」

まずはガゼル、何も起こらない。

次にジョベルジア、何も起こらない。

そして、看守のゼルド、また何も起こらない。

私も手をドアに押し当てる。が、当然何も起こらない。

残るはスマートとアルラウネ博士だった。私はここまできて、アルラウネ博士の勘違いであろうと思い、入る方法を考え始めた。だが、音をたてて扉が開き始めた。スマートの手によつて。

「スマート！」

私はつぶやき絶句した。この男だけはないとつっていたのに。それとも、スマートがいつの間にかガルド・イニエーブにすりかわっていたのか？？アルラウネが愛想笑いをして中を案内しようと先頭に立つ。

「さあ、参りましょう。ガルド・イニエーブ様。相変わらず完璧な変装ですな。他の者はどうされますか？」

スマートは茫然と立ち尽くす4人を見て

「ついてこい。私の偉大な研究成果をみせてやる」と言った。武器をもつていなかつた私たちは黙つてスマートに従うしかなかつた。

## 一章ガルド・イニエーブル（後書き）

6月1~3日から再開します。

「おやつさん。いつたいぜんたいどういうわけだ？俺らは法外の五貴族を葬るために、やつてきたんじゃないのか！それが、おやつさんがイニエーブだつて？？そんな馬鹿な！」

ジョベルジアの悲痛な声。ガゼルの重苦しい沈黙。

「ジョベルジア。いいから黙つてついてくるんだ！」

スマートはいつものように、子供に言い聞かせるように辛抱強く言った。スマートの皮の靴が石段を鳴らす音がまた始まつた。まるで、この世界でないどこかから響いてくるようなそんな、音だつた。それにつられるように、アルラウネ、ガゼル、ジョベルジア、私、ゼルドの順に階段を降りはじめる。下へ深く延びる階段の先に強烈な灯りが見えてきた。どうやら、目的地についたらしい。そこには黄金色の穂が広い空間いっぱいに生い茂つていた。

「何故こんな地下にこれほどの小麦が？？太陽もあたらないのに…」

ガゼルは不思議そうにつぶやく。すると得意気にアルラウネ博士が口を出す。

「ケケケ。太陽がない。そうとも太陽がない。ふふふ。そこに蘇生の秘密を解く鍵があつたのじゃ。大昔、人間は土から生まれたと神話にあるのをご存じかの？お嬢さん？」

「人間は神が創造したのじゃなくつて？」

「それはお主の国の考え方だ。世界は広くての、そういう神話もあるのじゃよ」

スマートは黙つていた。その様子を気にしながら、アルラウネは話を続ける。

「そこにおられる変装の名人であり、法外の五貴族であるイニエーブ様の莫大な金銭的助力を得て、わしの理論を実行する機会を得た。そして、できたのが、永遠の小麦とも言われるものだつたのじゃ。

だが、生育方法は普通の稻とはまったく別じゃ。決して光を当ててはならぬ。決して日の光をな。南アルドニアの洞窟の奥地で、やつと見つけたのじや。幻の古代文書に記された。永遠の小麦をな。ふふふ。イニエーブ様。どの人間でお試しになりますか？ケケケ

スモークは銃を懷から取り出すと、看守のゼルドに向けて撃つた。ゼルドの胸からは真っ赤な鮮血が飛び散り、ゼルドは倒れた。

「良いのですか？ゼルドはあなたの忠実な部下……

アルラウネ博士は怪訝そうにスモークを見つめる。

スモークは銃に弾をさらにつめながら、死体を冷たく見ると、「かまわん。どうせ生き返るのだらう？」

「もちろんですとも」

アルラウネは自らの研究の成果をイニエーブが信頼しきっているとみて、満面の笑みを浮かべた。

「使い方は簡単です。小麦を沸騰させた水で煮てやれば良いのです。その液体を傷口に塗ればよいのです」

そういうて、あらかじめ作つておいたらしい、小麦の液を汚れた白衣のポケットから取り出すと、看守の死体の傷口にかけた。

## 一章ガルド・イニエーブ×19×

傷口はみるみる塞がつていったようだつた。看守の制服から血が止まつた。やがて、看守ゼルドの顔に血の気が戻つてきた。ただ、その目は虚ろだつた。そして、ゆっくりと片膝を立て、手をついて立ち上がつた。アルラウネ博士は狂喜していた。

「イニエーブ様、見ておられますか？生き返っていますぞ。そう、今、人類史に残る禁断の扉が開かれたのですじや」

喜ぶ、アルラウネの他の4人はゼルドの異常に気づいてた。目だけではない。全身が黒ずんできて、口から涎が出ていた

「おやっさん。やばいぜ」

ジヨベルジアがガゼルをかばうように位置を変えた。

スマートは憎憎しげに、今まで聞いたことのないような悲しげな声を出した。

「やはり、だめだつたか。もう俺の記憶の中のあの人はいないのだろうか……」

叫び声があたり一面にこだました。生き返つたゼルドは既に正気の人間ではない。

アッシュはスマートが深く失望しているのを感じた。そして、隙をついて、次の瞬間、銃をスマートから奪い取ると、ゼルドめがけて、撃つた。撃たねばこちらが危なかつたのだ。常人とは思えぬ脚力で、ゼルドは5人に向かつてきていたのだ。向かつてきていた看守だつたものの体は慣性でアルラウネ博士を吹つ飛ばした。強く壁に体を打ちつけられた博士はその場に崩れ落ちる。

「説明してもらおう。スマート。お前はガルド・イニエーブなのか？」

アッシュは銃を握り締めて言った。主導権は私に移つたのだ。

スマートはポケットから煙草を取り出すと、ライターで火をつけた。「もちろん。違うさ。これは、ガルド・イニエーブの指紋を手に移

植したものさ」

「おやつさん。何故俺らにまで黙つてたんだよ  
ジョベルジアは非難がましくスモークを見る。

「俺は武器を持っていたら迷わず撃つていたぜ」

「ふふふ。お前らしいな。ジョベルジア。坊や。さあ、銃を下ろしてくれ」

スモークは少し頬もしそうに青年を見てから私に声をかけた。だが、私はまだ聞きたいことはあった。

「では、本物のガルド・イニエーブはどこだ?」

スモークの口の方で煙草がポツと燃える。その質問はガゼルとジョベルジアも聞きたいものだつたらしく、一人とも興味深そうにスモークに視線を走らせる。

「奴は必ずここにやつてくる。待とうじやないか」

その時だつた。イニエーブの指紋でしか、開かないはずの扉が開く音がした。ギギギイ。鈍い音だつた。スモークは人差し指を唇にあてると、皆に小麦の中に隠れるように手振りで示す。私も3人にならい、身を潜める。階段を下りてくる足音はだんだんと近く大きくなつてきた。そして、洞窟の部屋の入り口で止まつた。私はサツと銃を持ち飛び出した。

## 一章ガルド・イニエーブ×20×

そこに立っていたのは、真っ黒な顔をした背の高い男だった。一日で、一般の人間ではないと私は気付いた。視線の鋭さ、シルクハットをかぶった威容。どれをとっても、この男がガルド・イニエーブだと私は確信した。黒衣のマントに口焼けしたような浅黒い肌を顔だから窺わせながら、男は口を開いた。野太いしつかりした声だった。後ろの小麦畑には人の気配がある。まだ、スマーケたちは隠れているらしかった。

「やれやれ、銃など向けて何様のつもりだね。ここは私の私室だよ。君、早々と出て行きなまえ」

私は男の放つどす黒い威圧感に緊張しながらも必死に声を絞り出した。

「確認したい。ガルド・イニエーブに間違いないか？」

黒い男は無表情に私に答えた。

「そうだ。もしかして君かね。腕のいい私の手術師を亡き者にしたのは？まったく困ったことをしてくれたね。私の正体を知っているということは目的はなんだね？金かね？それとも名声かね？女かね？」

「ふざけるな。そんな目的のためにお前に会いにきたわけではない」怒気をはらんだ声で私は告げる。これまでの復讐の旅路を・・・

眉一つ動かさずにイニエーブは煙を見回した。

「これを見たまえ。これは今は不完全だが、やがて、この研究は全世界にとってなくてはならないものになるだろう。何しろ死者が生き返るのだからね。だから、そんな人一人の命で復讐などと器の小さい言葉は慎みたまえ。君の母さんも生き返らせてあげると約束しよう」

「母が生き返ることを望んでいると？」

「そうじゃないのかね？」

イニエーブはわずかに唇を歪めた。

私はもし、母が生き返るならば、どうするだろ?と考へた。今の段階では、神秘の小麦の力は不完全だ。そして、この先も、何かをまったく元通りにすることなんてできやしないだろ?私の復讐に費やした年月のよう!」

「イニエーブ。お前は夢を見過ぎている。人を生き返らせて何をしようというのだ!」

「よろしい。特別に、君には話してやろう。これを見たまえ」

イニエーブは自分の黒衣の中を手で探ると、中からひからびた骸骨が出てきた。

白骨化した人の頭部を取り出したイニエーブは高らかに宣言した。

「この頭部は偉大なる古代人種グラザビルグの頭部だ。かつて、無限の力をもつと言われた人種だ。彼らは我々とは大きく脳の構造を異にしていて、不思議な力“不可術”を使つた。大地を搖るがし、暴風を起こし、雷をあたり、一面に鳴り響かせた力だったという。君はその力を前にして、畏敬の念を持たないかね？そして、古代のロマンあふれる時代に時間軸を戻すのだ」

「つまり、古代人種を蘇らせたいということか。そのために、それだけのために多くの人々の命を奪つてきたのか？」

「何をいっている。犯罪者と資本家の違いは自ら手を下すかそうでないかの違いだけだ。わたしは正直者だと思うね。至極まつとうな方法で金を稼いでいる。偽善者ぶつた人間とは違うのだよ」「ならば私がお前の命を奪うことも、また正直者ということだな」「まったくそのとおり、だが、残念ながら、君の望みは絶望的に空想じみている。君は引き金を引けばいいと思っている。それで終わりだとね。だが、実際は違う。力にとりつかれた、自分でいうのもなんだが、そんな男が銃程度で死ぬ体だと思うかね？」

私はイニエーブの奇妙な自信に不思議と信じこまれていた。もしかして、やつに銃が通じないのではないかと。だが、強い私の憎しみの動機は指をとめてはくれない。銃を構え良く狙うとイニエーブの胸めがけて、撃つた。

ゴオオン。

あたりを弾薬の嫌な臭いがたちこめる。

イニエーブは胸を撃たれたにも関わらず、何事もなかつたかのように立っていた。

「ば、ばかな」

私は確かに、胸から滴り落ちる血液を見て、イニエーブの胸の銃

弾が命中したのを確認した。だが、動かない。

ギギギギ。金属の音がする。イニエーブの体から聞こえてくるようだつた。

「サイボーグ化だな。イニエーブのうち元の体が残っているのはおそらく脳と心臓だけだろう」

スマートがいつの間にか立ち上がっていた。

「坊やの手には負えんよ。下がっていなさい」

銃が効かなかつたことで手の内がない私は懲愧に耐えなかつた。スマートはポケットから特殊な銃弾を取り出した。そして、私から優しく、銃をとつた。

## 一章ガルド・イニエーブく22>

「何者だ。お前は」

今のイニエーブの声は機械じみた変な電子音だった。問われたスマークはゆっくりと銃を構えながら答えた。

「フィンガーマークの命を奪つた者といえばいいのかね」

「なるほど。お前か、どおりでこの復讐に燃えた青年に手術師を倒す氣概が感じられないわけだな。かなりのてだれとみえる。だが、人に私は殺せぬだろう。私はあまりにも強くなりすぎてしまった」

「人に倒せぬ人などありはせんよ。慢心したなガルド・イニエーブスマークはそう言つて銃をイニエーブの腹の部分に向けた。

「ほう。私の弱点を知つてているわけか。どうやらゴルディーザがいついたことは真実だつたようだな。今、我ら法外の五貴族に敵対する者たちが、大きくなりつつあるということか。だがな私を倒すには腹の核の部分を寸分も違わず打ち抜く必要があるのだ。それこそ寸分もね」

「私の眼に見覚えはないか？イニエーブ」

スマークの眼は真っ赤な色に変じ始めた。

「それは・・・赤化眼！！まさか、あの男が生きていただと？」

電子音のような奇妙な声は人の驚愕とは違つたが、私は確かにその中に驚きを感じた気がした。真っ赤な眼のスマークの言葉はさらに続く。

「そう。お前を改造した『あの男』だよ。正確にいうならば、私が先に改造されたようだがね。機械人間一号といったところだろうか」

「ふん。ずいぶん人間らしい機械人間だな。もつとも私は無理に人間を装つてはいないだけだがな」

「変装の名人の理由はあらかた予想はつく。元の体が心臓と脳だけではあらゆる変装術を駆使できるだろうぞ」

「ふん。兄弟が再開したといつたところか。だが、生憎私はそんなセンチメンタルな感情などどうに捨てている」

初めて、イニエーブは自ら動いた。スマーケが動くに値する相手と思つたらしい。凄まじい加速力とともに空気を切り裂き、イニエーブの体が向かつてくる。

「おやつさん！！」

ジョベルジアは思わず叫んだ。

## 一章ガルド・イニエーブ <23> 終

ガキン。金属と金属のぶつかり合う音がする。私の視力では二人の動きの全では追えなかつた。ただ、うつすらと動く影が見えるだけだつた。イニエーブのシルクハットがひらりと宙に舞い、地面に落ちた。小麦の近くで一人が動いたために、あたりに粉が飛び散つた。その粉が一人の力を高めるように働いたのか、戦いは數十分にわたつて続いた。私とジョベルジア、ガゼルはただ、次元の違う戦いを見ているしかできなかつた。

ふと、一人の動きが止まつた。スマーケだつた。ついに力尽きたかと、私たちは息をのんだ。だが、次の瞬間、大きな轟音とともに、スマーケの体が吹つ飛んだ。イニエーブらしきものは燃え盛る炎に包まれた。同時に小麦も炎に包まれた。スマーケは苦しそうに壁に打ちつけられた己の体を起こそうとして、起こせない。起こそうとする。起こせない。3度目でやつと、起こせた。しかし、足元がふらついている。私は燃え盛るイニエーブと小麦を見ながら言つた。

「終わったのか？」

スマーケの傷ついた顔は微塵の笑いもなかつた。

「まだ、始まつたばかりだ。だが、とりあえずは終わった。終わつたよ。坊や」

ガルド・イニエーブは死んだ。そして、スマーケの体も傷ついた。もはや、ジョベルジアとガゼルが肩を貸していいないと立つていられない。

監獄島を脱出した私たちはイニエーブの野望の巣窟を後にした。

「そういえば、おやつさん。口走つていた、記憶の中の人つて誰だい？」

「妻だ。ずいぶん昔に亡くした。それだけだ」

アッシュは痛い程わかつた。スマーケの悲しみが、無念が、それは自らも体験したことだからこそ。恐らく、ジョベルジア、ガゼル

も似た境遇なのかもしれない。皆、法外の貴族に恨みを持っている。私は、不思議と彼らの上司に会つてみる気になった。法外の貴族は私の想像を遥かに超えた人間、いや、生物だった。私のやり方では復讐は叶わないかもしれないのだ。私は帰りのヘリコプターの中でもつくりと明瞭な発音で述べた。

「スマーケ。私を法外の革命結社の上役と会わせてほしい」「その言葉を待つてたぜ。坊や」

スマーケは微かに笑った気がした。

私はスマーケ、ジヨベルジア、ガゼルの3人に連れられて、アーリア帝国の首都サンタアルベニアへ向かつた。

第二章グライア・シンシアへ づく

## 一章グラニア・シンシア＜1＞

サンタアルベニアは、アーリア帝国の首都だ。皇帝ラクシャ4世のポスターや写真がいたるところに貼りつけられている。鋼鉄で作られた町の建物はひどく、通気が悪ながらも頑丈に建っていた。首都の中央に皇帝の住むアルナブラ宮殿があり、中央官庁も密集している。そこから北に数キロのところにある、赤い外観をしたホテルの一室をスマートにあてがわれ、私は連絡を待つ身となつた。部屋はアーリア人気質なのか、雑然としていた。ゴミ箱には前の人を使つたらしいティッシュや、食物の容器が入れられていた。だが、そのようなゴミも気にならないくらい、この国のゴミ箱は大きかつた。そして、部屋も広かつた。スマートは私に、「別に一等室を取つたわけじゃない。部屋が広いのはこの国のかただ」と言ったことを思い出した。確かに、部屋全体の広さも私の生まれ故郷のホテルの安ホテルとは比べ物にならない。スマートが嘘をついている可能性も考えたが、ホテルの廊下を歩く人の服装は、私とたいして身分は違わないようだつた。皆カジュアルな服装をしていた。私はてつきり、本部のような所につれていかれるのかと思ったが、そうではないらしかつた。私はもう、丸一日ここに留め置かれていた。ガゼルも隣の部屋に泊まつている。日常の中で見ると、割合魅力的な女性のようだつた。最初感じた印象のとおりだつた。だが、彼女は私に好意がないことは、はつきりしている。彼女が通訳のコレニア・マクマーシになりすまして、近づいてきたのも、私から情報を得るために違ひなかつた。ただ、それだけのことなのだ。もちろん、私も健康な若い男だし、女性とのロマンスなども考えないでもなかつたが、全ては復讐の前には、小さなことだつた。むしろ、ガゼルを利用して、法外の革命結社の情報を探ろうかとも考えたが、そこまで自らを貶めることはまだ、できなかつた。

ガゼルは昨日の夜、部屋をノックして、私に書類を渡していった。

「グライア・シンシアの国の情報よ。もし、仲間になるならあなたにもみせておこうと思つてね」

「それは個人的判断でそうするのか?」

ガゼルは嘲笑した。

「まさか。スマートからの命令よ」

私は少し会話を楽しみたくなつた。

「命令がなければ動けないのは眞の組織人とはいえないんじやないか?」

「もちろんよ。ただ規律を守らないと組織は成り立たないのもわかるわよね?坊や」

私は少し不機嫌になつた。スマートから呼ばれるときも前々から引っ掛けっていたのだが、26にもなつて、坊や扱いとは馬鹿げている。それを自分より、年下らしき女性からも呼ばれたのだ。気分の良いはずがない。そんな私の表情を見て艶然と微笑むとガゼルは部屋を去つた。

思い出して少し不快になりながらも、昨日渡された書類に私は目を通した。要約すると、以下のようになる。

## 一章グライア・シンシア＜2＞

グライア・シンシアはアトランティスの女王である。大西洋に浮かぶ巨大な島に忠実な同志とともに乗り込み、暴政をふるっていた時の王アンゴルモアを倒し、代わりに王位についたのが、始まりである。これは一般にグライア・シンシアの好きな花ひまわりからサンフラー革命とよばれている。

グライア・シンシアの側近で有名なのは3人、革命時からの同志である親衛隊長エドワード・ジルゴスター、グライアの身の回りの一切を取り仕切るパロワ・アーディング、そして民衆を導く、終身占星術長であるシトルマリル・ピクレナン。

世界の情勢はゲルマンを中心としたゲルマン同盟とアーリア帝国を中心としたアーリア連合、どちらにも組しない小国連合がある。アトランティスは第三の小国連合のリーダー的な国だつた。ふたつの巨大連合の間でキヤステイングボードを握つて、なんとか平和を保つてきた。その間、グライア・シンシアは部下を使って様々な事件を起こしたが、それらはどれも、大国のパワー・バランスがどちらか一方に傾くことを避ける目的で行つたともいわれている。そのせいで、世界中にグライア・シンシアは熱心な2連合パワー・バランス論者の仲間を持つといわれている。もし、本当に2連合が戦争になれば、多くの人命が失われるからだ。だが、一方で、グライア・シンシアの批判者は、シンシアが目的を偽つて様々な犯罪に手を貸し、私利私欲を満たしたと言つている。眞実は大国や小国の様々な思惑の中で闇に沈んでいる。

アトランティスで、莫大なエネルギーを持つ宇宙石を他国に輸出し、国民に恩恵を与えていたため、国民の人気は絶大である。

一通り読み終わった時、もう時間は正午を少し超えたあたりだつ

た。改めて、グラニア・シンシアを倒すには、一筋縄ではいかないだろうことを知ったが、決意は揺るがない。私の意志は固かつた。昼に、ガゼルがやってきて、書類を読んだことを確認すると、私を食事に誘つた。

「はやる気持ちはわかるわ。でも、私たちは多くの仲間とともに動いている。その仲間を危険にさらすような真似はしてはいけないわ。あなたもそのことを肝に銘じておきなさい」

私に諭すようにガゼルはミートソーススパゲッティを食べる手を少し止めて言った。ナポリタンの美味を味わいながら、私はたしかに焦っていた。スマートはいつも帰つてこないのだ。たかが、一日で、こんな状態になるとは、自分でも予想外だった。

「ガゼルはなぜ、この組織に入った？」

女は不快げに眉間に皺を寄せると、言葉を濁した。

「まあ、入り口は少し違うわ。でも、彼らを裁く決意はあなたと同じよ」

入り口とは、入った動機のことをいつているのか。それともどういった経緯で入ったのかをいつているのか。よくわからなかつたが、後半の言葉は私を勇気づけた。一人はしばらく沈黙して食事をたいらげた。

ふと後ろに気配がしたと思うと、ジョベルジアが立つていた。

「待たせたな。さあ、いこうぜ。の方に会いにな」

ガゼルにしよ、ジョベルジアにせ、人に会話を聞かれるのを恐れているらしかつた。慎重な言い回しをした。それもそのはず相手は法外の貴族なのだ。立ち上がり、私たちは、ホテルの外に出た。外にはタクシーが待つていた。車体は緑色の目に優しい色をしていた。私たちは乗り込むと、ジョベルジアは行き先を告げた。

「アベニユー通り、135番地へ向かってくれ」

タクシー内では運転手の軽い世間話に適当に相槌を打ちながら、3人はお互に對しては沈黙を守つた。數十分すると目的地に着いたようだつた。ジョベルジアがお金を払うと、タクシーはすぐに去つていつた。

「ここから少し歩く。ついて来い」

背の高いジョベルジアが先頭に立つて歩き出す。ガゼルと私はその影を踏むように南に向かう。ジョベルジアが歩を止めたとき、目の前には古い館が建つていた。

少し緊張しながら建物に入ると、中は思いのほか明るかつた。階段を上り、2階に向かう。絨毯の上を3対の足が連なつて、移動する。2階の廊下を進むと奥に大きな扉があつた。ジョベルジアはノックすると、「失礼します」と言つて中に入り、私に中に入るよう促した。まず視界に飛び込んできたのは、赤い仮面を被つた男の姿だつた。仮面の内から鋭い目で射抜かれた。

「君がアッシュ君か、ようこそ法外の革命結社へ。ずいぶん待たせてしまつたようだね。君は不思議に思つてゐる。こんな狭い所、みすぼらしい所が法外の革命結社の本部なのか?とね。君の予感は正しい。ここは、急場にこしらえた場所だよ。ただし盗聴器も、怪しい人間もいない。さびれた、廃墟といつてもいい館だよ。そもそも本部はこの国にはないし、仲間でもない人間に教えるわけにはいかない。仲間内でさえ本部にいつたことのある者は限られている。まあそれより、君はどうしたいのだね?」

「まずあなたの名前を聞こう。話はそれからだ」

かなり、革命結社の上位にいるだろう男に対して、臆するわけにはいかない。ジョベルジアが非難の視線を向けたが無視した。

仮面の男はわりと寛容な人物らしかつた。穏やかに立ち上がり、「これは失礼した。私は赤のシユナイルと呼ばれている。赤仮面と

も呼んでくれて構わないよ」

と言い、また座った。どうやら、少し足が悪いらしかつた。立つた時に微かに足が震えているのが見えた。だが、無表情な仮面の下からは如何なる感情も読みとれない。

「ご存知のとおり、アッショウ。アッショウ・クロフォードといいます。シユナイルさん。私はあなたたちの組織に是非とも入りたいと考えています」

落ち着いたいい声が腹から出た。組織が私を葬ろうと思えばわけもなかつただろうが、その恐怖を隠し、役に立つに足る人物を精一杯演出してみせた。大事なのは役に立つ男と相手に思わせることなのだ。

「いい度胸だね。アッショウ君。気に入ったよ。もし、君が私たちの組織に依存するような復讐者だつたら、そんな人間はいらないとうところだつた。入社を認めよう。だが、赤のシユナイルは表面的な人間の態度というものを信じない。君の深層心理を探らせてもらう」

そういうつて、シユナイルは私の脇に立つ、一人に目で合図した。二人は腕を取つて私を動けなくした。

「何をする。ジョベルジア。ガゼル」

私は戸惑つた。二人の力は強く、シユナイルの前まで引き出された。仮面の男は私の額に手をあてた。その瞬間意識は途切れだ。

目覚めたとき、館の部屋には誰もいなかつた。明らかに、違和感を脳に抱えながら、起き上がつた。ふらつく足取りの先には扉があつた。扉？私はどこにいこうというのだろうか。扉の先には何があるというのだろうか。扉のノブに手をかけようとしたとき、赤銅色のドアが音をたてて向こうから開いた。ガゼルだつた。だが、以前のガゼルではなかつた。それは私の感じ方の問題だらうと思つた。外見上ガゼルに変わつたところは見出せなかつた。ただ、なにやらガゼルの胸の中に味方である証めいたものが備わつてゐるのを感じることができた。

「ガゼル。私の体に何をした」

ガゼルは少し氣の毒そうな目でこちらを見た。

「おめでとう。あなたは名実ともに我々の仲間になつたのよ。体はその証拠。私たちは、皆シユナイルによつて力を与えられた存在なのよ。けれど、その代償として、魂の自由を失うのだけど……」「魂の自由だと？何を言つてゐる。きちんと説明しろ」

「今にわかるわ」

ガゼルはさらに語る気はないようだつた。

また扉が開いた。ジョベルジアだつた。やはり、この男にもガゼルと同じ、信号のようなものを感じた。脳に直接響くようだつた。ジョベルジアはガゼルのほうをみると、悲しそうに眉をひそめた。「おやつさんは再起不能だそうだ。もう体のあちこちにガタがきてやがつたんだな。もう一人では動けない体になつてしまつた」

「そう。スマーケはこれからどうするのかしら。アルミナスの力でもダメなの？」

「おやつさんは元々、体のあちこちを改造してゐたからな。寂しいが一線からはリタイアだ」

スマーケがもはや私達と共に戦うことないと一人の会話からは

知れた。命を救つてもらった恩人であり、一番信頼していた男を失うのは痛かった。ジョベルジアはこっちを向くと怒った表情をした。「アッショ。お前は俺たち『法外の革命結社』の実働部隊となる。つまり、法外の貴族の命を奪う最前線に立つんだ。そして、俺が一番気にはいらないことに、お前がおやつさんの跡を継げっていう命令がきた。もつとも俺らはこれから3人、アトランティスに乗り込むことになるんだがな」

「そうか。アトランティスにか」

私は静かな声でつぶやいた。しかし、同時に疑問が浮かんだ。

「どうやって、行くんだ?」

「声に命じるままに動くんだ」

ジョベルジアは短く答えた。

「声?」

その時、私の頭の中に声が響いた。

( (アッショ…。アッショ…。) )

(アッシュ。私は法外の革命結社のリーダー。皆は灰色の男と呼ぶ。私との会話に声は必要ない。今の君なら、私との会話の方法を知っているはずだ。)

確かに不思議と男と会話する「」事が苦もなくできた。脳内での会話とは何とも変わったものだ。

『いつたい私の体に何をした。灰色の男！』

(（君は少し礼儀を知る必要があるよつだな）  
（（））からともなく、痛みが脳にやつてきた。

「う……」

片膝をついて崩れ落ちた。心配そうにガゼルとジョベルジアが一步前に踏み出した。

「アッシュ。その方に逆らうんじゃないぜ。地獄だぜ」  
ジョベルジアが忠告した。

(（今の君は私の思い通りの人形に過ぎない。おつと今さら後悔しても遅いぞ。我々は裏切り者を出さない。何故なら、裏切った瞬間に死んでいるからだ）)

『わかった。法外の貴族に復讐できさえすればそれでいい』

大粒の汗を出し痛みに耐えながらなんとか声を腦に向けて絞り出した。実にやつかいことになってしまった。法外の革命結社を甘くみていたらしい。その声は愉快そうに響いた。

(（ふん。いいだろ？。とりあえず、今回は指令を伝えることが重要だからな。何も君を怖がらせようといつのじやない。3日後、ポート・ド・アーリアに向かい、そこからアトランティスに入国するのだ。必要な物はそろえておく。健闘を祈る。いいか。君の代わりはいくらでもいる。そのことを忘れないことだ）)  
（うして、声は遠ざかっていった。

「ポート・ド・アーリアね」

「ああ。3日後だな」

ガゼルとジョベルジアが言った。

「ああ。そうだな。それまで自由行動をとらせてもいい」  
時間が必要だった。そして、残った家族。特にサニチエートがどうなつたかということが心配だった。二人は黙つて私を見送つた。その日の夜、叔父に電話をかけた。

「ガルザー叔父さん。叔母さんの調子はどうだい？」

「アッショ。わざわざ心配してかけてくれたのか。そのことは万事解決したよ。ビルグ投資会社とはアッショの会社だそうだね。何故いつてくれなかつたんだ。君の友人名乗る人が来て、万事お金の問題は解決したよ。アッショが頼んでくれたんだろう？感謝するよ」

「叔父さん。私は・・・・・」

一体何がどうなつてゐるのだ？思わず言葉に詰まる。投資会社の人間に本名など少しも教えていないはずなのに。そうか。私はピンときた。法外の革命結社の仕業だらう。また声がした。

（（そのとおりだ。アッショ。我々は鬼ではない。最低限のことはしてあげるつもりだ。ビルグ投資会社はもはや無用の長物だからね。こちらで処理させてもらつたよ））

『どこまで人に干渉すれば気が済むんだ！』  
（（どこまでも。ふふふ））

笑い声は遠く小さくなつていつた。

「アッショ？ アッショどうした！！」

受話器の向こうから叔父の心配そうな声が聞こえる。

「ああ。叔父さん心配いらないよ。まあそういうことだよ。じゃあ元氣で」

「また、いつでも帰つてこい。サニチエートも待つてゐる

「ああ。じゃあ」

自分の無力さと、組織の力を知つた。2日後、私はポート・ド・アーリアに向かつた。

ポート・ド・アーリアはアーリア帝国の東海岸にある巨大な港湾都市だ。歩くと潮の香りが漂っていて、海を身近に体感する。声の命じるまま、歩いていくと、埠頭で見知った顔が現れる。ジョベルジアとガゼルだ。

「よう。アッシュ。ちゃんと来たな。待っていたぜ。準備は出来ている。すぐにアトランティスに向かおう。手はずは整っているぜ」背の高い青年は手をあげてこっちだといわんばかりに、歩きだした。ガゼルも後を追う。私も後を追つた。

いよいよアトランティスに乗り込むのだ。本来なら様々な雑事、ビザの取得、船の手配などを用意しなければならないのが、手間がいらなくなつたのはありがたい。そして、協力者を得たことも。だが、私はここ2日意識の封じ込めを行うことを試してみた。つまり、灰色の男に気づかれずに思考するということだ。灰色の男も始終私を見張つていていたわけではなかつただけかもしれないが、ここ数日、私の思考を読みとつた形の相手の声は聞こえなかつた。意識の封じこめとは、思考を言語化するのではなく、感情的に思考することに他ならない。今私の組織に対する持つている感情は複雑だ。恩もあり、怨もある。そういうふうに思つてはいた力を与えられた存在とはどういうことだろうか。謎はまだ多い。だが、生きるのだ。困難はこの復讐を思い立つた時から、まったく変わつていなければだ。船は50人程度の客が乗れる大きさだつたが、他の客はいなかつた。しばらくして、外海に出ると、船長と名乗る男が船酔いに苦しむ私に挨拶にきた。ジョベルジアとガゼルもそれぞれ広い船内で自分の時間を満喫している。

「アッシュさんですな。私は法外の革命結社の一員として、船の管理を任されておりますトニー・ブラウンと申します。私の役目はあなたたちを運ぶことだけですが、良い航海をお届けできればいいと

思つております

鼻の下に髭を蓄えた船長は優雅に慣れた様子でお辞儀をした。私はまだぐつたりして答えられなかつた。

「酔い止め薬を持ってこさせましょうか?」

「くそ。なんだつて船で行かなければならんんだ。飛行機で行けばいいだろうに」

力の限り悪態をついてみる。だが、体調は変わらない。船長は哀れむように、「アトランティスは飛行機の離着陸はできません。濃い霧が常に上空を覆つていてるからです」と丸い錠剤を差し出した。

「すまない」

受け取ると、口に放り込む。船長は去つていつた。それとともに少ししづつよくなつてきた。船内アナウンスが流れた。

「あと、3時間で、アトランティスにつきます」

船長以外は普通の船員らしかつた。そう、革命結社の人間ばっかりがいるはずもないと思つた。ガゼルが海を見つめる私に近づいてきた。

「上陸してからの作戦会議を始めましょう」

## 一章グライア・シンシアくつ

アトランティスについたのは夕方だった。船長から私たちは青いパスポートを身分証明書として渡された。アッシュ・クロフォードとそこには書かれてあつた。これでは私の身元が特定されるのではないか?と思つた。船長に尋ねると、厳しい表情で鼻を指で書きながら

「アトランティスは偽造を行うのが極めて難しい。皆本名を入れてある。大丈夫だ。入国したくらいでは、法外の貴族の敵対者とはみられないだろう。ただ、パスポートをみせるみせないは各自の判断ということだ。もつとも入国するときはみせなければならないのはやむをえないがな」

と言つ。もしアッシュという男が法外の貴族を葬るために活動していく、実際、ガルド・イニエーブを倒す一助を成したと知れば、残つた法外の貴族はどうであるうか?ただ、ガルド・イニエーブは個人的な恨みをかつて殺されたと考えてくれるだろうか。まだ、一人なので、その可能性はあるかもしれない。だが、二人、三人と消えていくと残つた者たちはさすがに警戒するに違いない。そもそも、彼らの間に仲間意識や、連絡網があるのかさえ不明だが・

アトランティスの入国管理官は皆太つていて、丸々としていた。空港を出で、道を歩くと、やはり、気のせいいか皆太めの体型をしている。ここでは太つていることが美德なのだろうか。陽気そうにジヨベルジアは話しかけてきた。

「おい。アッシュ。皆太つてやがるだろ?」ここではそれが当たり前なんだとよ。なんでもグライア・シンシアが自分より美しい女や男を許さないらしい。もつともただの噂だがな」

「昔ここにきたことがあるのか?ジヨベルジア?」

「ああ。ずいぶん昔の話だがな。俺は元々ここに生まれだ」

「俺の両親はアトランティスに、いやグライア・シンシアに殺されたようなもんだからな」

「そうだったのか」

私は深くうなずいた。もつと詳しく話を聞きたかったが、やめておいた。まだ、人生の深遠について話す関係ではないからだ。私たち三人は急いでバスに飛び乗った。

バスの窓から見るアトランティスの風景は驚きだった。眼を模つた建物。魚のような格好をした車。あらゆるものは海に支配されていた。

「やけに、海と関わりの深いものが多いな……」

ぽつりと私がつぶやいたのを後ろの席のガゼルが聞いていたらし

い。「ここは99パーセントの人が海神信仰だからね。熱心なお金持ちは神社に寄付したり、自らの建物を権威づけているのよ」

「グライア・シンシアが信仰されているわけではないのか」

「そうね。でも、グライアは海神の娘として万神殿に加わっているわ」

「万神殿？」

「アトランティスの神々を集めて祀った神殿よ。これから向かう首都アトティカにあるわ」

と、そこでジョベルジアがガゼルの隣から口をはさむ。

「ちょうど明日は誕生祭だな。グライア・シンシアの顔を拝みにいくとするか」

「ついたわよ」

ガゼルの高い声が響く。

私たちはアトティカのシーサーペンル停留所で降りると、協力者の待つ家の住所へ向かつた。

ランフルニア番地43-6。そこに協力者の住む家があった。ジョベルジアが呼び鈴を鳴らす。すると、中から40代くらいの女性が出てきた。彼女の耳元でガゼルが何事かを囁いた。女性は激しく身を震わすと、「少々お待ちください」と言つて、家に戻つていった。

「おい。ガゼル。合言葉はちゃんと伝えたんだろうな」

ジョベルジアは乱暴にガゼルに問いただす。ガゼルは少し眉を上げると、抗弁する。

「もちろんよ。ちょっと家に入つただけじゃないの。何を一々心配しているのよ。相変わらず器の小さい男ね」

「なんだと。ガゼル。それはいつちゃならねえセリフだぜ」

今にも掴みかかるんとするジョベルジアの腕を取ると、私はしつかりと意思の通つた声でジョベルジアを諫めた。

「落ち着けジョベルジア。時と場所を考えろ」

軽く舌打ちするジョベルジアは黙つた。一人は時たま、こうした衝突を起こすらしい。ジョベルジアの血氣盛んな性格とガゼルの冷静沈着さは火に油を注ぐものだつたのかもしれない。何か一人の間に感情的なしこりを残す出来事があつたのかもしれないが、今はまだわからない。

すると、ガゼルは何事かに耳を澄ませるように目を閉じた。不思議な感覚だ。ガゼルの中にオーラとでもいうべきものを感じる。まるで、過去の偉人に出会つたときのような恐怖の気持ちだつた。ジョベルジアがアッシュにそつと囁く。

「ガゼルの耳は離れた空間の音を認識できる。もちろん気をつけないと鼓膜をやられちまうがな。今、さつきの女が何を主人に話しているか聞いているんだろ? ゼ」

私は驚いた。この華奢な女性にそんな能力が備わっているなど半

信半疑だつた。彼女は目を開くと私たちに告げた。

「大丈夫。さつきのおばさんは召使みたいね。すぐ主人である協力者ランズベルクが降りてくるわ」

「そうか。アッシュュに今お前の能力を教えていたところだ」ジヨベルジアは安心したように言つた。お互の能力に関する信頼関係はあるらしい。疑り深いジヨベルジアが信じているようだつた。

「そう。私たちは赤仮面のシユナイルによつて力を与えられた者なよ。あなたにもその力はあるはず。まだ、どんな力かは知らないけどね」

「超能力というわけか……」

私は頭の声を思い出して、憂鬱になつた。あの頭に入られる感覚と痛みを思い出したからだ。

と、そこにドアが開き、ランズベルクらしき白髪の男性が現れた。年は50～60だろうか。私たちをじろじろ見ると、会釈した。

「ようこそ。アトランティスへ。みなさん

応接間に通され、ランズベルクは三人に軽いお茶をふるまつた。アルトウール産の紅茶だと匂いでわかつた。紅茶の中でも高級な品だ。情報通り、この国の民は良い暮らしをしているらしい。だが、この男はグライア・シンシアに敵対するものだという、一体何が不満なのだろうか？

「ランズベルクさん。ご協力感謝します。我々がやつを倒すまでの間、適当な隠れ家を提供してくれるそうですね」

ガゼルが丁重に口を開いた。ランズベルクは無感動な目で、ガゼルを見た。

「既に手はずは整つている。しかし、警備の厳重なグライア・シンシアを如何にして、護衛の天才と呼ばれるエドワード・ジルゴスターから遠ざけるのだね？」

ジルゴスターは確かグライア・シンシアの親衛隊長である。身の回りの一切の警護を司さどる。しかし、私たちは既に計画を練つていた。だが、それを彼に知らせる必要もなかつた。

「ランズベルクさん。ご心配には及びません。計画はできている、いや整つていいといつたほうがいいでしょう」

私はカップを口につけ、お茶をすすりながら言つた。

「私の望みはグライア・シンシアの命だけだ。他の物は壊して欲しい」

ランズベルクに突然愛国心が湧きあがりでもしたのだろうか？グライア・シンシア程の存在がいなくなれば、この国の混乱は疑いようもないだろう。私たちは三人ともそれを知つていた。

ジョベルジアは肩をすくめるような仕草をしている。ガゼルは優しく老人の正面を向き、

「少々の混乱には目をつぶつていただかないと目的に犠牲はつき物です。私たちも命をかけてやる以上、半端な気持ちではできません。

ただ、グライア・シンシア亡き後には、ランズベルクさんの出番なものではないでしょうか」と手を握り言い含める。

老人はさらに計画を知りたがるそぶりはさすがに見せなかつたが、何か言いたそうに口を動かした。ただ、何も口から言葉は出てこなかつた。

私たちは広い屋敷を召使いのおばさんに案内されて、それぞれの部屋に案内された。隣あつた3室だつた。

おおまかな計画はこうだ。アトランティスは多くの豊かさの恩恵を受けている。しかし、一方召使いや、肉体労働をしたいという人々はアトランティスの民には変な物好きしかいなかつた。つまり、多くの外国人労働者を雇うことが豊かさの源泉だつたのだ。私たちが目をつけたのは、この外国人労働者の過激派組織キラー・ユニオンだ。

三人はキラー・ユニオンに接触するためにそれぞれ別行動を取つた。

しばらくぐずつと三人でいたので、私は解放されたような気がした。情報が書き込まれた地図を片手に外国人労働者の集まる、夕方の酒場に向かつた。ここで一杯やって、一日の疲れを取るのだろう。不満を忘れるのだろう。私が向かつたのは数十人が入れる大きさの酒場だつたが、中には期待に反して数人しかいなかつた。とりあえず話しを聞いてみることにした。

「俺は祖国シンシニアから出稼ぎにやってきたんだ。この国は確かに稼ぎがいいからな。ただし、労働環境は最悪だ。この國の人間たちは俺たちに感謝の一つもなく、まるで、汚いものを見る目で蔑んでいるんだ。奴らにとつて俺たちは豊かさに巢食う寄生虫みたいなものなんだろうさ」

「しかし、デモはやりすぎじゃないかい？」この國の女王はあのグラシアだぜ

「知ったことか。俺たちはただ、当たり前の扱いが受けたいだけだ。こんな水ばっかりで薄めたような酒でなく、うまい酒が飲みたいぜ」「確かに。物価が高くて、こんな給料じゃあ仕送る分にはいいが、ここではとても生活していけない。それと、知っているか？なんでも、俺たちの故郷にお金を送るのに税金がかかるそうだぜ。しかも、その金はどこに消えると思う？」

「さあな。グライアの世界への貢献のための金とでも言いたいのか？」

「なんでもグライアはどうやら、第三国連合をアーリア連合、ゲルマン連合どちらかの連合に吸収させる腹らしいぜ」

「あん？ その話と金の話がどうつながるんでい？」

「戦争の準備だよ。ついに2大国が戦争をおっぱじめるらしいぜ」

「なんだって！…それは大変だな。この國ともおさらばしなくちゃいけないかもしないぜ。しかし、数十年も大きな戦争がなかつたのに突然起くるとは信じられないことだ。酔いもさめちまわあ」「まあ、噂話だがよ。法外の貴族の一人が死んだらしいぜ。それで、こんな事態になつたんだと」

「どういふことだい？さつぱりわからねえ」

「まあ、噂だよ。噂」

なんだって。法外の貴族の一人がいなくなつたために戦争が起こ

るだつて？馬鹿馬鹿しい。私は自分の席で一人酒を飲みながら、聞いていた。男たちのいうとおり、こここの酒は粗悪品だ。まるでいい味もない。思い切つて声をかけてみる。

「すまないが。少し話しかけてほしい。デモにはどうやつたら参加できるんだ？」

男たちは目を見合わせると、聞かせるにはお金を払えと要求してきた。

「兄ちゃん。少しばかり、包んでくれねえとな」

「そうそう。みたところ旅行者みたいだな。大方、いい国のお坊ちゃんんつてどこだらう」

ポケットから財布を出すと、男たちに少しばかりの金を渡した。

男たちは喜んで、愛想よくなつた。

「デモは明後日の昼の12時からだぜ。参加するのはいいが、ふざけてんなら怪我するぜ。グラライアもただ見ていくわけはないからな」「場所は？どこでやるんだ？」

「もちろん。サンフラワー通りだよ。革命の聖地だな。グラライアのやつ怒りやがるぞ」

アトランティスの民が敬愛するグラライアを、まるで恐れることもなく、口にしているのに違和感を覚えないでもなかつたが、それほど、アトランティス民と外国人労働者の溝は深いのだろう。情報を得た私は他の酒場にもいつてみたが、特に新しい情報はなかつた。男たちの言つた、“明後日の12時、サンフラワー通り”ということが裏付けられるだけだつた。夜中12時をまわつたころ、ランズベルクの家に戻つた。

翌朝目覚めて、階下に降りていくと、朝食にベーコンと卵とパンが用意されていた。香ばしい匂いは、無条件に食欲を刺激した。召使いの女が「こちらへどうぞ」と言い、椅子を引いてくれた。お礼を言い、座るつて良くみるとナイフとフォークがない。

「すまないが。ナイフとフォークがないようだが？」

私が言うと召使いは「ああ。そうでしたか。そちらの国のお人でしたか」と驚いた。なんなのだ?と少々小首をかしげながら、持つてこられた金製のフォークとナイフで、ぎこちなく慣れない手つきで食べる。何せ、金の食器などを使うのは生まれて初めてだったのだから。この国の人間はどうやってナイフとフォークを使わずにご飯を食べているのだろう?と気になつたので、尋ねてみた。

「一体この国の人たちはどうのようにご飯を食べているんだい?」

「私たちはそのまま食べています。手で」

「そうだったのか。とっくの昔に廃れた風習がまだこんなところに生き残っていたとは。それと君の名前は?」

召使の女は少し恥ずかしそうに

「ランシアといいます」

と答えた。

まだこの国のこと何も知らなかつたのだと気づいたので、2,3の質問を彼女にぶつけてみた。サンフラワー通りへはどこへいくのか?とか彼女の生まればどこか?などを。彼女は明快な道順を教えてくれた。どうやら、その通りには大きな食材店があり、そこで毎日主人に出す献立を考えているそうだ。生まれば予想通りアトランティスではなかつた。だが、どこかはついに言つことはなかつた。言いたくなかったのだろう。ここで一生を終えるつもりかもしけない。少し故郷を思い出した。故郷と一概にいつても、私の場合は二つある。10歳までいた廃島イエローランド。そして、ガルザ二叔

父の住むトールキアだ。もちろん今の場合はトールキアをまず思い出した。だが、イエローランドもすぐに思い出した。緑の美しい樹木に溢れた場所だった。それが、あの日を境に……。さて、世間話もこのくらいにしよう。グラニア・シンシアを裁くチャンスが迫っている。部屋に戻つて、でかけようとするヒックの音がした。開けると、ガゼルだった。

「ジョベルジアがキラー・ユニオンに接触できたそうよ。今から一緒に行きましょう」

「早いな。わずか一日で見つかったのか。やつらは非合法組織なんだろう?」

ガゼルは微笑すると「たぶん、灰色の男から指令があつたんじゃないかしら。あなたの大嫌いな人のね」と私の手を引き、外に連れ出そうとした。

「大丈夫だ。一人で歩ける」

心を見透かされたようで気分は良くなかったが、一瞬触れたガゼルの手は温かかった。

過激派外国人労働者権利是正労働組合。それがキラー・ユニオンの正式名称だ。道中、ガゼルに聞かされた。目的の場所に着くと、小さな倉庫を改造したような集会所でユニオンのメンバーたち数人が集まっていた。真っ黒に日焼けした肌をした、筋肉のたくましいタンクトップを着た男。赤い口紅を薄く塗った、ロングスカートの色白な女。そして、奥にはジョベルジアとなにやら話し合っている、知的な眼鏡をかけた、黒いみすぼらしい服を着た男。

私たちが入ってきたのに気づくと、タンクトップの男が寄つてくる。威圧感のある風貌をしている。

「何か用か？ここには何もないぜ」

「あそこにいる男の連れよ」

すかさずガゼルが前に出る。  
「ジョベルジアを指さす。

「ほう。あの男の……。なんでもリーダーと話がしたいらしいな。グラニア・シンシアを倒すとか言つてているとか。根性だけは、かつてやるが三人に何ができる」

色黒の男は吐き捨てるように口をきいた。ガゼルが私を肘でついた。打ち合わせ通りにやれといつことらしい。そこで、私は男に言った。

「そこで、あなたたちのお力を借りしたいわけです」「俺たちにとつてもちゃんととうまみのある話なのだろうな」「もちろんです。リーダーに話をさせください」「好きにしな」

と、そこに椅子に座っていた色白な女が口をはさむ。

「まちな。ローグ。この男たちは本当に信用できるのかしらね？覚悟の程を試してみたいわ」

ローグと男はいらっしゃい。ローグは女をティールミラージュと呼ん

だ。ぶつぶつさういっていたが、最終的にはローグは女に任せることにしたらしかった。

「今から、ローグと本氣で戦つてみせてくれるかい？もちろん、兄ちゃんだけでいいぞ」

馬鹿げている。私は思った。何故にこれから味方にならうといつもの同士が争わねばならないのか、まったく理解できない。

「なんだって、そんなことを」

言いかけたところで、ガゼルが後を引き継いだ。

「もちろん。いいわよ。この人、みてくれば華奢だけど、強いわよ」この女、なんといふことをいつのだ。私に取つ組みこをやれとうのか。

「へえ。ローグはうちの組織一の力自慢だよ。いいね。ローグ」

ローグは困ったように、頭をかいた。

「本当にいいのか？そりゃ、俺はこんな時のためにいるわけだし、いつでも戦うがよ」

ガゼルが私に耳打ちをする。

「あなたの力を私もみたいわ。まだ覚醒していないみたいだし、ピンチになれば、でてくるはずよ。本能と私たちの力は関係しているのだから」

「まったく。もし、力がでなかつたら、私は死ぬんじゃないだろうな」

「こぞとこうときは助けるわよ。それにどっちみち力がでないと起きは、はつきりして、法外の貴族と戦つても、無駄に命を落とすだけよ」

もつともだと思った私は「話は終わつたかい？」と聞いてきたローグと向き合い、睨みあつた。

ローグは喧嘩慣れしていた。しこたま顔を殴られ、腫れ上がった。攻撃はほとんどかわされた。あたつても彼はまったく意に介するそぶりもない。これが、私の実力なのだ。息巻いて、法外の貴族を倒すといいながら、一人では何もできない駄目人間。それが私だつた。あげくの果てには、怪しげな組織により、精神の自由を失い、代わりに力を得たかに思えたが、それも幻想に過ぎなかつたらしい。何も変わつた現象が起こつている様子はない。もう立ち上るのはよう。もう無理だ。何度もそう思ったことだろう。だが、私は立ち上がつた。ローグに必死で向かつていつた。何のために？復讐のため？いつたい何度殴られただろう。顔はとつゝの昔に腫れ上がつているはずだつた。ジンジンと顔も腹も足も打たれたところあらゆるところが痛かつた。だが、相手は殴るのをやめない。さらに、相手の表情は何故か恐怖に包まれている。

「お前……。不死身か」

ローグは呟いた。キラー・ユニオンのティルミラージュも畠然としている。たしかに、私の痛みは一定の痛みを持つていたし、殴られるたびに痛かつたが、不思議と痛みはある程度を超えることは決してなかつた。さらに、長く倒れていて、次に殴られるまでに時間があると痛みが合間に引いていくような錯覚に陥ることもあつた。だんだん、ローグも殴り疲れて息が切れてきた。私はさらに立ち上がり向かつていつた。ついに、ローグが折れた。拳を使いすぎて握れなくなつたのだ。手は真っ赤に腫れ上がつていて、

「もう、勘弁してくれ」

ガゼルもふらふらと立ち上がる私の肩に手をあてて、

「もういいわ。あなたの力もわかつたわ。もうやめて時間とともに、体中の痛みはなくなつていつた。ティルミラージュが奥に案内するように手招きした。

奥に座つて、ジョベルジアと話していた眼鏡の男を彼女は紹介した。

「キラー・ユニオンのリーダー。バラトよ。バラト。お密さんよ」

バラトと呼ばれた男は立ち上がった。

「良く来たね。ジョベルジア君から話はある程度聞いているよ」

私たちはがつちり握手をした。

「君たちには悪いが協力はできない」

バラトははつきりと強く確かにそう言つた。ジョベルジアめ。今まで何をしていたのだ。私は非難の眼をジョベルジアに向けたが、彼は手をあげてお手上げとするだけだった。

「今はデモだ。とりあえずデモを成功させなければならぬ。話しはそれからだ」

バラトは頭を抱えている。

「だからよ。そのデモの規模をもつとでかくして、富殿に突つこもうぜつて話なんだがな」

「ジョベルジア君。我々のデモの現在の参加人数はどれくらいだとと思うね？」

「千人くらいか？」ジョベルジアの問いにバラトは首を振る。「五百人くらい？」また首を振る。「まさか百人？」またまた首を振る。そしてバラトは残酷な数字を告げる。「50人だ」

目の前が真つ暗になつた。殴られたよりも効いた。この人数ではどうしようもない。親衛隊のエドワード・ジルゴスタは出てこないだろう。富殿にでも突入しない限り。だが、50人ではどのみち無茶だつた。すると、ガゼルが提案した。

「今から、新聞社にデモの呼びかけを載せてもらえないかしら？」

## 一章グラニア・シンシア～～（後編）

余裕もできたので、近々連載を再開したと思こます。またよろしくお願いします。

バラトは悲しそうにガゼルの思いつきを否定した。

「何度も頼んださ。でも、だめだった。それもそのはずさ。大手の新聞社になればなるほど、トップにはアトランティス国民の大好きなグラニア・シンシアの賛同者がつくんだからね。実際そのほうが部数も売れている」

部屋には沈黙が流れる。誰もが現状を開拓するアイディアを持たなかつた。バラトは嘆くように重苦しい沈黙を破つて話し続ける。「この国の人間はグラニア・シンシアに毒されている。自分たちの頭で考える人間なんてごくわずかさ。全て、グラニアの作る甘い汁を吸つているにすぎない。そんな中で外国の労働者が宇宙石を掘らされているつていうのにだよ。そして何より問題なのは外国人労働者の行方不明事件だ。警察は認めていないがたしかに存在する。逃げ出してきたある労働者は死の間際に俺の腕の中で言つた。やつらは悪魔だと」

バラトの顔は怒りと悲しみで奇妙な表情を形づくつた。悪魔といふ発音は鋭く私の鼓膜を鳴らした。ガゼルが何かを思いついたらしく手をあげた。

「私良い事思いついたわ。私たちもデモに参加してわざと暴徒のフリをするのよ。そして、捕まる」

「何いつてんだ。ガゼル。捕まっちゃ意味がないぜ」

ジョベルジアがまた口をはさむ。ガゼルは手で彼を制し目を輝かせながら自らの考えを話し続ける。

「もちろん。捕まるのは一人よ。そしてグラニアの悪事を暴くのよ」  
ガゼルの意見はかなり危険に思えた。万が一、その一人が命を落とせば大きな損失だ。私はガゼルの目を見て首を振つた。  
「危険すぎる」

隠れ家のランフルニアの家まで戻ると、とりあえず明日のデモにどう参加すべきかをめぐって深夜まで議論したが、結論は出なかつた。そしてデモの日がやってきた。

その日は朝早く目覚めた。よく眠れなかつたのだ。屋敷を出ると人通りは皆無だつた。ふいに後ろから声をかけられる。

「アッショ。よお。早いじゃないか」

同じように起きていたらしい、ジョベルジアはいつになく爽快な顔で挨拶してきた。自分の眠れなかつたのを悟られるのが気に食わなかつたので、適当に挨拶を返す。

「ジョベルジアか。ずいぶん早起きだな」

ジョベルジアは意外そつた顔をして、高い場所にすわつた頭からこちらを見下ろした。

「それはこつちのセリフさ。毎朝、俺は早く起きてるんだぜ。まあ、故郷に帰つてきてからとこつもの、じいでつけられた傷がうずいてしそうがないのさ」

「傷?」

私は何のことだとばかりに聞き返した。彼は遠く昔を懐かしむよう遠くに田線をやり答えた。

「お前には見せたことがなかつたか。背中の傷さ。まあ、昔の話だ。ずいぶんと昔のな」

「一つ聞こう。お前の憎しみはグライア・シンシアに向けられたものか? それとも法外の5貴族に向けられたものか?」

ジョベルジアは人通りのない道を指し示すと、一緒につくるように促した。私たちは並んで歩いた。彼はしばらく歩いていたかと思うと、何かを探すそぶりをした。何かを見せたいらしい。朝の冷氣はあたりを包み、身体を冷やした。

「アッショ。あれを見る。リンゴナシの木だ。当時貧しかつた俺はグライア・シンシアの側近のエドワード・ジルゴスターの家にリンゴナシの実を盗みに入った。リンゴナシは、これでもかとばかりに果実をまるまると太らせていたのを思い出す。塀の向こうの仲間にり

ンゴナシをたらふく手渡して、降りようとした時だ。ハードード・ジルゴスターに見つかった。奴は俺を縛り付けると俺がどこの誰か白状するまで喜びながら鞭で叩いた。そして親の責任が問われ、母が捕まつた。そして、数日後、収容所で母が病死したと伝えられた。俺はなアッショ。俺のせいで母が死んだってことを、自分を責めるかわりにやつらを憎んできた。やがて荒んだ生活をしていた無法者の俺はアトランティスを追放された。その時のことを見れないためのコードネームなんだぜ。ここの一言葉で『鞭で打たれるもの』つまりジョベルジアさ」

ジョベルジアは怒りをこらえながら静かに言った。ジャンプして、リンゴナシの実をもぎ取ると、獣猛にかぶりつく。

この話を聞いている限り、完全にジョベルジアの逆恨みのような気もした。この男の怒りの方向はどこか間違えている。一体この男は“まともな”考え方を持つていないような気もした。だが、私は理解しているふりをして彼をなだめた。

「必ずグライア一味を破滅させよう。君のお母さんのために」

帰るとガゼルが待っていた。私たちに笑いかける。

「朝食の用意はできているわよ。友情じつけどもほじけじなさい

よ

本当にくだらない朝の散歩だった。

正午になった。キラー・ユニオンのメンバーが通りの一角に集まつていた。大男のローラ、色白のティルミラージュ、リーダーのバラトがいた。その他に、血氣盛んな労働者たち。やはり集まっているのは50人ほどらしい。

あたりを通る人々は何事だらうと思って立ち止まって見るものいるが、大半が何事もなかつたように通り過ぎていく。ここでは警官も機能を果たしていないようだ。あたりには制服を着た人間はみてとれない。グライア・シンシアと側近の数人は自分たち以外の人間が力をもつことを極度に恐れたらしい。

そしていよいよグライア・シンシアの宮殿に向けてのデモが始まつた。当初の計画が破綻していた私たちは新たな方策も持たぬまま、ただ後ろから親鳥について回る子鳥のようなものだった。バラトは私たちに気づいたが、何も言わなかつた。サンフラワー通りを出発した一行は大声で叫びながら宮殿に向かつていった。順調だつた。遮るものもなにもない。天気はいつもどおり上空には霧が立ち込めていたが、太陽がぼんやりと見えた。この霧がアトランティスを天然の要塞に仕立てあげているのだなと思いだした。空には鳥が数羽見えるだけだ。これでは本当に散歩ではないか。

しかし、突如宮殿に着くまであと数十メートルの時、銃声があたりに響きわたつた。一人の労働者が地面に崩れ落ちた。どこからともなく撃たれた銃弾に、デモの群衆は散り散りになつて、逃げ出そうとした。だが、一人また一人と倒れていく。バラトは必死に叫ぶが、皆混乱している。宮殿から一気に衛兵が飛び出してきた。

そこから少し遅れて、一人の白髪の男が出てきた。ジョベルジアはアッシュとガゼルに小声で

「あれが、エドワード・ジルゴスタだ」

男の目は離れているせいで、よく見えなかつたが、衣服の胸には

たくさんの勲章がついている。男は大声で何やら叫んでいる。ガゼルがすかさず能力を使って私たちに教える。

「生け捕りにしろといつてるみたいよ」

その頃には銃声は止んで、バラトたちキラー・ニーオンの幹部たちは手錠をかけられていた。見物人は皆無だった。ただ私たちがいた。衛兵の一人がこっちによってきて、あっちに行けと仕草をした。私たちはそっとその場を離れた。

その夜、私たちはランズベルク氏も交えて、これからどうするか話あつた。

「やはり、暗殺が一番いいのではないか？」

ランズベルクは低い声で、顔の前で腕組みをした姿勢で言った。

「武器はここ数年でやつと銃10丁と200発の銃弾を手に入れられただけだ」

「すいません。ランズベルクさん。我々が甘かったのです。しかし、暗殺はあまりに危険です」

私は素直に謝罪し、なんとかこの味方の出せるだけのものを出させようとした。しかし、ランズベルクは我々を脅迫してきた。

「君らの代わりはいくらでもいる。今日の夜、宮殿に忍び込み、グライアを暗殺してくるんだ。そうしなければ、親衛隊に身柄を引き渡す」

我々に選択の余地はなかつた。銃口はこちらに向いていた。応接間には4人のランズベルクの私兵らしき男が銃を取り出し構えていた。ランズベルグは厳しい顔で本性を露わして机を叩いた。

「地下に穴を掘つてある、2ヶ月前に開通した。だが、通じた穴は宮殿の中心部までは遠い。いけ！」

私とジョベルジア、ガゼルは夜になり、宮殿に侵入した。

「ちつ。こんなことになるなんてよ。どうなつてやがるんだ。こんなに苦労するなんて聞いてないぜ。こりや、いくつ命があつてもたりねえな」

舌打ちをしながら、不満を言つジョベルジア。私たちは宮殿のいすれかの場所にいるらしい。あたりはけばけばしい建築物が所狭しと並んでいる。どうやら中庭らしい。隠れるには格好のものだが、何故こんなところに得体の知れない美術品のようなものが並んでいるのか。人の巨大な頭をした女の石像はこちらを断末魔の叫び声でもあげている表情でじつと見てい。頭と胴体がライオン尻尾が蛇、そしてその胴体の部分からひどく個性的な人間の顔が何人分か生えている。私たちはここが敵の本拠地であることも忘れてしばし、美術品の放つ強力な魅力にぼうぜんと眺めているだけだつた。不思議なことに警備兵はない。どうしたのだろうか？

「気に入つていただけたかな？ 我が美術品を？」

ふいに声がした。一人の年老いた老人がそこには立つていた。いや、立つていてるという表現はおかしい。植わっている。そう彼は足の先が土に植えられていた。

私たちは皆、ランズベルグから渡された銃を構えた。しかし、相手は武器を持つていないようだつた。この奇妙な人のような物はどう。私は静かに銃をおろし尋ねた。

「何者だ。何故そこから出ない」

老人はシワだらけの顔を緩やかに傾けると答えた。

「わしはシトルマリル・ピクレナン。かつてのグライアの占星術師だ。未来を予知する力を持つていたが、グライアの破滅を予言して、不興を買い殺されるところだつた。しかし、植物として生かされるとになり、今に至るわけじや。まさか、お主らがグライアを破滅させるものたちか？ いや、まさか、今のグライアは誰にも止められ

ん。生涯にして唯一の予言失敗だらう。私を解放してくれるものを待つてもう一〇年になる。今では誰も気味悪がって近づかないのじや」

資料で読んだグライアの側近であるシトルマリル・ピクレナンがまさかこのような状況に陥つてはいるとは考えもしなかつた。ガゼルは銃口を構えたままだ。ピクレナンに狙いをさだめる。私はそれを手で制した。

「待て。ガゼル。何かいい情報が聞けるかもしれない」

「私はこの人が憎いから、撃とうというのじゃないわ。解放とは死よ。せめてもの情けでしよう？」

彼女は強い口調で私に向かつて言った。たしかに、そうかもしれない。それでも、今の私たちの『敵の懷に侵入しているにもかかわらず、危機に立たされている状況』を好転させる必要があった。そのための鍵はこの老人だった。

「我々はグラニアを倒したい。何かいい考えはないか？」

ピクレナンはフェフェフェと不気味に笑うと、

「いいじやろう。とつておきの秘策があるのじや」

植物と化した老人は話しだした。

「グラニアの弱みは神の子として生んだ子供じやて。知つて追つたか? グライアに子供がいることを」

ピクレナンは立つて胡散臭そうに見つめる3人を相手に問い合わせた。私たちは首を振つた。我々を導き、束縛する存在である灰色の男も知らなかつたのだろうか? それともあえて、話さなかつたのかどうも、段取りの悪さやランズベルグの裏切りなど、灰色の男の力が薄れているらしい。私たちは自分の力を頼るほかなかつた。何があつても、これはグラニア・シンシアを倒す絶好の機会なのだ。植えられた老人は話を続ける。

「子供が誰の子供かはわしも知らぬ。ただ、グラニアはその子供を目に入れても痛くないほどにかわいがつてある。人質に取れれば……。あとはわかるな?」

ジョベルジアは激昂した。

「この爺。俺たちにそんな卑怯なことをしろといふのか」  
大声で叫ぶ。私はこの男のＴＰＯをわきまえない物言いに腹が立つた。だが、冷静に押しどどめる。

「ジョベルジア。君の気持ちはわかる。もちろん殺すことはない。こどもには罪はないんだからな。だが、グラニアを倒す大きな鍵になるのも事実だ。どうかわかつてくれないか」

「アッショ。お前まで、ガゼルお前はどう思うんだよ」

ガゼルは目をつぶつて一瞬考えると、

「アッショと同意見ね。それ以外にしようがないわ」

と静かな声で、あたりを見回しながら言つた。なおも動搖を隠し切れないのでジョベルジアを私は説得に乗り出した。

「ジョベルジア。君のエドワード・ジルゴスタに対する憎しみを思い出して欲しい。そして、この組織は手段を選ばない組織ではなかったか? もちろん私も子供を傷つけないと約束する」

エドワード・ジルゴスタという名前を聞いた途端彼の目の色が変わった。ぶつぶつ何やら、小声で口ぼしる。

「そうだ。俺は奴を殺すためにきた。復讐のためだ。止まれない。止まらない」

ここに来てから彼は精神的に不安定なようだ。このジョベルジアははつきりいつてもう足手まといだつたが、捨ておくにもどうにもためらいがあった。ジョベルジアを放つておいて私はピクレナンに向き直る。

「それで、子供はどこにいるかわかるか？」

「それはわからぬ。だが、グライアはよく、北の庭でこの子を遊ばせていた。ことと反対の宮殿の端にある庭だ」

私の腹は決まった。子供を捕らえるために待ちぶせするのがいいだろう。機会をじつと待つしかない。だが、不安もあった。護衛の達人エドワード・ジルゴスタがどれほどの人数を子供にさいているかだ。なんとか少人数であつてほしい、私はそう願つた。

「行こう、夜のうちに移動しよう。ジョベルジア大丈夫か？」

ジョベルジアは焦点のあつていらない目をようやく私にあわせると虚ろな返事をした。とりあえずついてくる意志はあるようだった。

ガゼルは頑なにピクレナンの尊厳死を求めたが、本人が同意しない以上騒ぎになるのは目にみえていたので、許さなかつた。ガゼルは不満そうに唇をとがらしたが、渋々承知した。

深夜に紛れて、私たちは静かに移動した。ピクレナンに教えられた道を通つた。昼のデモ隊の騒動の時に見たような、いかめしい姿をした警備兵はいなかつた。代わりにきつちりとタキシードを着た執事のような人間があたりを忙しそうにいつたりきたりしていた。どうやら、銃の類は宮殿の中心部では禁止されているらしかつた。ピクレナンの情報は確かそuddつた。私たちにとって、これは好都合だつた。しかし、闇雲に持つている銃を使って警戒されて計画を駄目にすることはもつとまずいことだつた。慎重にも慎重を重ねて、移動した。だが、これ以上警備の目が厳しくて進めなかつた。もう明け方で、夜が明けようとしていた。私は焦つっていた。気持ちは人に伝染する。ジョベルジアはみるみる落ち着きをなくし、今にも銃をもつて突撃しようかといわんばかりの態度であつた。

そして、とうとう私たちは一人の執事に見つかった。正確にはジョベルジアが見つかったのだ。

「何者だ!! 侵入者だな!!」

執事の男は懐から何かを取り出そうとする。ダン!! 乾いた音がした。ジョベルジアが撃つたのだ。さらにジョベルジアは先に進む。なんということだ。これで計画は台無しだ。

唇をきつく噛んで私は彼の後を追つた。警報が鳴り響く。ジョベルジアの足は早く、追いつけない。どっちにいつただろうかと考えていると、半開きになつていいドアがあつたので、中を覗いてみると、エドワード・ジルゴスターとジョベルジアが睨み合つていた。だが、何か様子がおかしい。

「コーネリアス。生きていたのか。こんなところで何をしている。

銃を下ろしてくれ。父の顔を忘れたか

「俺はお前に恨みこそあっても、親と呼ぶいわれはこれっぽちもないぜ。う……うひ……」

しかし、ジョベルジアは銃を持っていないもう一方の手で頭を押さえて苦しそうにする。

一体どうじうことだ。一人が親子だと？？私は混乱した。ふと、ガゼルをみると恐ろしげな顔をしている、まるで、この世の地獄を見たかのように蒼白だ。

なおも一人の話は続く。ジョベルジアも引き金を引くのを迷っているようだ。だが、警報が鳴っている以上時間はあまりない。すぐここに指示をもらいに部下たちがやってくるかもしないのだ。ジルゴスタは芝居をしていよいよ見えた。私たちも中にはいつてドアを閉めた。

「お前たちは？？」コーネリアスと一緒に侵入したのか？何が目的だ？」

ジルゴスタは不思議そうな顔をした。

「私の名はアッシュ。もつともこれから死ぬべきお前に名乗る必要などないが」

「私の命を狙いにきたのか？しかし、何故息子も？？」

二人の顔を良く見比べれば確かに似ていなくもない。ここで私はガゼルの顔からひらめいた。灰色の男の計略を知ったのだ。奴は実の息子に親を殺させる気なのだ。なんという残酷なことをおもいつくのだ。こうしてみると私たちの見ていたジョベルジアとはいったい何者であったのか……。ふと、ノックの音がする。

「ジルゴスタ様。入つてもよろしいですか？」

「今はならん。屋敷中を2級武装員で捜索せよ」

「ハッ。了解しました」

足音は去つていった。

「まあ座ってくれ。アッシュくん。コーネリアスお前もだ。我々も君たちの組織については少し情報がある。どちらが正義か、少し話

しあつてみようではないか」

部屋にはテーブルと椅子が並べてあった。私たちはだが、座る必要はなかつた。ジョベルジアはブツブツと銃を持ったまま一人言をつぶやいている。持っていた銃を構えると私は撃つた。白髪のたくましい男は床に倒れた。ジョベルジアは呆然としている。

「行こう。屋敷に火を放つぞ」

立ちぬくジョベルジアを放つておいて、私とガゼルは近くに落ちていたライター（おそらくジルゴスタの物）を拾いあげると燃えそうな紙をありつたけ燃やして火を強くした。

富殿は容易に燃えないだろうが、時間稼ぎにはなる。そして、ジョベルジアをどう扱うべきか。私は彼にとつて憎い仇になるのだろうか。復讐の連鎖という言葉が頭に浮かぶ。ならば、いつぞ、ここで決着をつけるべきか。

「アッシュ。何をする気なの！？」

ガゼルの声が響く。心はもはやここにはないジョベルジアの背中から私は撃とうとしていた。彼女は私よりもずっとジョベルジアとの付き合いも長いわけだし、情をわくといったところだろう。

「止めるな。ガゼル」

「何考てるの？ 彼は、ジョベルジアは私たちの仲間なのよ。たしかにあの男に親子といわれて動搖しているみたいだけど、それはあの男が錯乱していただけの話よ。まさか、あの男の話を真に受けているんじゃないでしょうね。ジョベルジアも、ジョベルジアよ。しつかりしなさい」

確かにそうかもしぬなかつた。私はここに来てからというもの疑心暗鬼になりすぎていたのかもしれない。だが、確かにあの時閃いた考えが、頭を支配してしまってとまらなくなつたのだ。ジョベルジアとあの男、エドワード・ジルゴスタは何の関係もない。心の中でこの文言を3度唱える。少し冷静になれたような気がした。

「すまなかつた。ジョベルジア。許してくれ」

ジョベルジアは虚ろな目でこちらを向いた。

「アッシュ。俺は誰なんだ。何故ここにいる」

「私たちは法外の五貴族を倒すためにここにやってきたんだ。まあ、もう一步だ。立ち止まっている暇はないぞ。いいづ」

「法外の貴族？ そうだつたな。忘れていた。俺が何をすべきかを」  
ジヨベルジアは少し立ち直りを見せた。少しづつ回復してきたようだ。しかし、部屋の半分は燃え盛っている。のんびりしている時間はもとよりなかつた。

部屋を出ると、軍隊のような縞模様のグリーンと黒の服を着た兵士たちが銃を持って立つていた。

「銃を捨てる。侵入者め！」

万事窮すだつた。ジルゴスタめ、やはり我々を逃がす気はなかつたな。用意の周到さに舌を巻いた。どうやら、ドアごしのセリフはあらかじめ決められていたメッセージのようなものだつたらしい。もつとも、当の本人はこの世にいないわけだが。

私たちは捕らえられた。念入りに身体検査をされ、何も持つていなことがわかると手錠をかけられた。

「ジルゴスタ隊長！！」

中に入った兵士が骸を見つけたらしい。兵士全員の目が怒りに燃えた。銃身で顔を2・3度殴られた。口の中が切れて、血が滴り落ちる。しかし、暴行は長く続かなかつた。

「待て！！ そのものたちには聞きたいことがある」

兵士たちは我にかえつて声の主を最敬礼で迎える。

「グラニア様。ただいま、此奴等が放つた火を消しております。危険です」

「とりあえず、その者たちには聞きたいことがある。これ以上痛めつけるな。後で直々に尋問を行う」

兵士の中で一番偉いものが、「了解しました」と返事をすると指示が与えられたらしく、床に倒れた私たち三人は意識朦朧としたまま、どこかに運ばれた。

「起きる。おい！！」

耳元で大きな声が響く。「ここは一体どこだ？ 脳はまだ十分目覚めていなかつた。辺りをぼんやり見回すと、灰色の壁に囲まれているようだつた。

「出ろ！！アッショ！」

何故私の名前を知つているんだ？ 服を探ると、持つていたものが全てなくなつていて。なるほどパスポートを取られたらしい。身体の調子はどうだらう？ 私は腕について体を起こそうとした。やはり、傷は完治しているようだ。どこも痛まない。赤仮面のシユナイルによつて与えられた能力がここでも役に立つた。グラニアたちは私の能力に気づいているのだろうか……。

私は傷ついたふりをして、ゆつくりと独房から出た。逃げ出すことも考えたが、私にそんな戦闘力はないのはわかりきつていた。また、ここがどこかさえわからないのに逃げ出すのは愚かなことに思えた。

「歩け！！！」

命令する役目をおつた人間が私に手錠をはめて叫んだ。のそのそと歩くと、「もっと早く」とか「シャキシャキ歩け！！」などと後ろから声をかけてくる。しかし、傷を負つたふりをして、周りを観察しながら歩いた。残念なことにジョベルジアとガゼルの姿はどこにも見えなかつた。

私は大きな車の後部座席にのせられた。周りを3人の警護人が囲んでいる。3人とも銃を持つている。どうやら、ここはアトランティスの街中にある刑務所のようなところしかつた。私はおそらくこれから宮殿に再び連行されるのだろう。車の窓には外が見えないように黒い幕が貼られてあつた。前部の運転席との仕切りにもやはり、黒い板がはめ込まれていた。後部にはわずかな電球が天井につ

いているのみである。

「どこに連れていくんだ？」

と私は尋ねたが3人の男女は機械のように前を向いたまま、まったく反応を示さなかつた。車が止まる動きを車内で感じた。体が少し前に慣性で動く。機械じかけの警護人も同様だ。ドアが開き、今度は別の如何にもしょぼくれた軍服姿の兵士が現れた。

「ご苦労様です」

私の周りにいた3人は立ち上がりて敬礼をした。どうやら、この男かなりの階級らしい。

「さつやとこの男を出せ！－－グライア様がお待ちだ」

「ハッ！－！」

3人の元気の良い返事が聞こえる。グライアの名を聞いたとたん、目は輝かしい任務につけた喜びにふるえているように見えた。3人の長銃を持つ警護人に連れられて、建物の中に入れられると、車のエンジン音が聞こえた。走り去つたらしい。ある一室に入ると、一人の女性が私を待っていた。まさか…この女が？

「よ来到了な。アッシュュというらしいな。ふふふ。ピクレナンに聞いたぞ。私の命を狙いにきたそうだな。もつともあの男はもうこの世にいないがな。私はグライア・シンシア。お前たちの組織と敵対するものだ」

サンフラワー革命が起こったのはおよそ20年前。今見ているグライアはどうみても二十歳少し過ぎたくらいの若い女性だった。いつたいどういうことなのだ。

「私を見て驚いているようだな。私の若さに驚いているのか？年老いたおばさんかと思ったか？」

グライアはひざまずく私を見下ろして立った姿勢のまま言った。服装は世界一高価といわれている光る夜叉布を使つた見たこともないような斬新なデザインをしたものを見つけている。服が輝いているために、やや眩しいのだが、太陽のような光ではなくちゃんと相手の姿も目に映る不思議な光だった。

黙つて手錠の感触を確認すると、周りを見回す。

警護人と軍服姿の兵士、そしてグライアと私がいるのみだった。「パロワ以外は皆下がれ」

3人の警護人はグライアの姿に見とれていたのを命令に我に帰つて、あくせくと回れ右をして部屋から出ていった。パロワ？どうやら、この軍服姿の兵士がパロワ・アーティングらしかつた。グラニアの側近の一人だ。私は厳しい顔をして、じつと相手の言葉を待つた。

「さて、アッシュ。お前を呼んだのは他でもない。表向きはもちろんお前たちの組織のことを聞き出すだめだ。しかし、私は慈悲深い。最後のチャンスをやろうと思つてな。ここにいるパロワもかつては私の命を狙つた一人だつたのだよ。人間の心は変わるものだ。真実を知ればな」

グライアは背を向けて語りだした。パロワは私を油断なく見張つている。

「真実だと？」

私はまったく聞く耳を持つていなかつた。ただ、ただ相手を殺すチャンスを狙つていた。それだけだつた。しかし、グライアは熱心に語りかけてくる。

「そう。お前の知らないだろう真実だ。おそらくお前は個人的恨み

か、もしくは組織の命令によって動いているのだろう。だが、そこに正義はあるのか考えてみたことはあるか?」

「人の正義などどうでもいいことだ。私は私の

わかつても「おうなご」と思わない

んだ。

「アッショ。もう、と世界を知れ。そうすればお前の考えも変わる」「知つていいさ。お前たちの悪事も、みんなな」

鋭い目で睨みつけると、グライアは今度は真剣な表情をして、パ

「ほんとハロ」かぎの長いナイフをハンガチは色んで取り出した。グライアは受け取ると、低い、うなるような声できつつくつた。

「呼べ」

訳がわからず、必死に相手が何をいつているのか理解しようとした。グライアが自ら死ぬ？ どういうことだ？ パロワが一旦部屋を出て、再び戻つてくると一緒に少女が入ってきた。グライアは子供の肩に手をかけると優しく言つた。

「その代わり、この子を連れていてほしい。ランブルヒと一緒に、一体、何をいいっているんだ。グラニア！」

私の声はひどく動搖していた。

「がやる

グラシアはナイフをパロワに握らせて言った。

「さあ、パロワ私を刺すがいい。

パロワはわずかなためらいもなく、グライアの喉を切つた。鮮血があたりを包む。ランムルヒは身じろぎもしない。まるで、魂の抜けた器のようだ。

パロワは私の手錠を外すと、グライア・シンシアの亡骸と向きあう私を哀れそうに見つめた。まだ、また自分の手で決着をつけることができなかつた。しかし、何故グライアは自ら死を選んだのだ。その疑問に答えるようにパロワは話しだした。

「グライア様は不治の病にかかつていらつしゃつた。その苦しみは想像を絶するにあまりあるものだつた。夜中に苦痛でのたうちまわる叫び声がよく聞こえてきたものだ。グライア様はお前に命を奪わせる気だつたらしい。だが、私がその任を受けることになった。もし、お前がグライア様の息の根を止めていたならば、きっと脱出するさい信者たちが大きな妨げになると思ったのであろう。そしてアッショ。この子を連れていつてはくれないか？私からも頼む」

はつきりいつて子供など私の復讐の旅に無関係だつた。そして足手まといだつた。子供の頭をなでるパロワに告げた。

「断る。私のなそつとしていることは危険だ。子供を連れて行くことはできない」

「もし、この子が法外の五貴族同士の間に生まれた子でもか？」  
「なに！？？」

パロワのいつていることが本当だとすると、これから戦いの大事件な戦術兵器となるだろることははつきりしていた。慎重に私は誰の子か聞いた。パロワは恐ろしげな口調で重々しく答えた。

「バルト・ゲール・アランです」

「なるほど。使えるかもしね。連れていつてやろ」

私は極めて実務的に判断した。バルト・ゲール・アランにとつては重要な人質になるからだ。子供に向きなあと、声をかけてみる。

「君。名前は？」

私が声をかけると目の前で育ての親は死んだというのに、眉一つ動かさなかつた子供がわずかな微笑を浮かべた。

「ランマルヒといいます」

「私はアッシュ・パロワ。これから君とともにアトランティスを離れる。覚悟はあるか？」

「全てお母様の言いつけ通りにいたします。ついていきます。アッシュ」

「よし。行こう。パロワ。案内してくれるんだろうな？」

パロワは嬉しそうに手を上下させると言った。

「はい。あなたの仲間とともにアトランティスを出る準備はできております。こちらへ」

何故グラニアは死んだのか、パロワの言つことを信じるべきか。だが、とにかくグラニアは死んだ。待つていろ、残りの法外の五貴族。必ず裁いてやる。私の正義の名のもとだ。

パロワに見送られながらアトランティスを去る3人の心持ちは暗い。

「おい。アッシュ。その馬鹿げた話を信じろというのか？」  
すっかり調子を取り戻したらしージョベルジアはいつもの喧嘩腰の口調だ。

「信じるかどうかはお前に任せる。ただ、さつき話したことが私の見た全てだ」

ガゼルが軽いため息をついて立ち上がる。何かいいたそうだ。  
「何だ？ ガゼル言ってみろ」

すかさず発言を促す。痛めつけられた影響だろうか？ ガゼルまで少し苛々しているらしく、持っている新聞を叩きつけた。

「あなたは敵の三文芝居を見せられてのこのこ帰つてくるなんてね。信用した私が馬鹿だつたわ。あなたにグラシアは死んだと言われた時、簡単に信じた私が馬鹿だつたわ。こんなことならアトランティスに残つていいべきだつた。明日のアーリア新聞が楽しみね。もし、グラシア死亡の記事が載つっていても、私は信じないわよ」

ガゼルとジョベルジアの言うことも、もつともだ。私は何故あの女がグラシア本人だと思ったのだろうか。だが、帰りの船には乗つてしまつた。とりあえず態勢を立て直す必要がある。それに、よく生きて帰れたものだ。3人とも死んでもおかしくなかつた。私の判断に間違いはなかつたはずだ。だが、なおもガゼルは噛み付く。

「それにその子供は何よ！ 法外の五貴族同士の子供ですって？？ いつたい、その子をどうするつもりよ。今に仇をうたれるわよ。私たちが法外の五貴族にしているようにね」

私は自分の考えを全て話すつもりはなかつた。

「ランマルヒには悪いが、この子がいればバルト・ゲール・アランの方からコンタクトをとつてくるはずだ」

ガゼルはため息をついて、もつ話す気はないといったようすで手を振った。ジョベルジアも、もう何もいわなかつた。ランムルヒを膝にのせて海を眺めていた。子供にはこんな話を聞かせたくないという配慮だらうか。ジョベルジアは子供好きらしかつた。

数時間後、アーリア帝国の最大の港ポート・ド・アーリアに着いた。陸に一步足を踏み入れた時、あの忌まわしい声が戻ってきた。

(アッショ……。アッショ……。)

灰色の男だ。私は立ち止まって、返事をした。

『グライアは死んだのか?』

(先ほど、グライアは死んだとの情報が入つた。よくやつてくれた。すべて君の思考は追つっていたよ。ジョベルジアのことだが気になるのか?お前も人の子というわけか。くくく。そう、ジョベルジアはエドワード・ジルゴスターの子供だよ。そう吹聴する浮浪者の若者がいると聞いてな。どうやら本当にしかつたのでな。少しネジをかけかえて、利用させてもらつた。安心しろ、これからもジョベルジアは忠実な仲間だよ。さすがに故郷のアトランティスでは少し記憶も搖らいだようだがな)

『何故そんな手のこんだことをする!…』

(なあにちょっとした余興さ。それこそ、君の目的つまりは復讐にはもつてこいの状況ではないかね?君が引き金を引いたのはせめてもの情けかね?ふふふ)

私はこの男の人間味のない受け答えに心底体中がぞつとした。

(次はバルド・ゲール・アランだ。今度は君たちは如何にして相手をおびき出すかにかかっている。今回は赤のシユナイルの指揮のもと動いてもらつ。君にはちと荷が重い相手なのでな。サンタアルベニアへ行け。敵ももう動き出しているかもしけん。子供は絶対に逃すな)

私たちはサンタアルベニアに向かつた。夜が迫っていた。ようやく、星空のわずかながら煌めく地に戻つてきたのだ。夢使い座が東の空に見える。そうか、もうこんな季節か。北半球は秋にさしかかっていた。封印したはずの、私と母を残していった父の言葉が脳裏によみがえる。「アッショ。星はいいぞ。地上の全てを超える夢がある。一つ星座を教えてやろう。あれが夢使い座だ。主星のカミナムシンは月の次に明るい綺麗な星だよ。ほら、一番上に一際輝いているのがそうだよ。お前も大きくなつたら夢を追う男になれ」父は夢追い人だつた。そして、夢のために家族を捨てた。今では顔も覚えていない。私が小さい頃に家を出た。母は何もいわなかつた。それが一層私には悲しかつた。

列車の旅はいつも過去を思い出させる。たいてい、それはいい過去ではない。悪い過去だ。忌まわしい過去。大人になつた今、父がどのような事情で家を出たのかはガルザニ叔父に聞いてみたが、言葉を濁すのみだつた。名前はたしか、クリム・ダー・デンスルト。今となつては記憶していることすら汚らわしい。私を捨てた父に、いや男になど一度と会うつもりなどなかつた。

私の座席のとなりにはランマルヒが座つている。窓際を占領して、うつろいゆく夜の闇と光にみとれているようだつた。言いつければ素直に守るし、いわゆる“良い”子であつた。もっとも彼女の出自を見れば、とてもそつは言えはしなかつたのだが……。

「ねえ。アッショ」

ランマルヒが外を見ながら私に話しかけてきた。父を思い出して機嫌の悪かつた私は面倒そうに「なんだ」と返した。

「お母様はとても思いやり深い人だつたわ。アッショはお母様の命を狙つていたんでしょう? 何故なの?」

私は子供に言い聞かせるように、そして残酷に言い放つた。

「君のお母さんは死ぬに値する人だった。君にとつて思いやりがつても、他の人からはそうとは限らないのだよ」

私は小声でランマルヒにからうじて聞こえる声でいった。ジョベルジアは後ろの席にいたので、聞かれるとまた「子供にそんなことを言うな」とか言いそうだつたからだ。ランマルヒは大人の悪意もしくは敵意を感じて、怖くなつたに違いない。しきりと静かに泣き始めた。私は黙つてランマルヒの後ろ姿を見ていた。

残酷かもしれないが、しょうがない。私を憎むことで生きる道を見出しがいい。それがせめてもの私の思いやりだ

ガゼルが列車に乗る前に言つたことをふと思い出す。

「この子はあなたに任せるわ。ただし、グラシアがあなたに託した意味を考えなさい。そして、どうするか決めなさい」

彼女の目は轟々と燃えたぎる釜のとき、怒りに燃えていた。私は預けるというのは灰色の男からの命令か？何故彼女が怒るのか理解できなかつた。自分が任せられなかつたのが悔しかつたのだろうか。どちらにせよ、私にも異論はなかつた。この子は責任を持つて育てる。ランマルヒにとつても、稀代の犯罪者の親を持つよりずつといふことだと思つた。

景色は徐々に明るさを増していく、秋の夜風がしんみりと窓の隙間から冷氣を運んでくる。もうすぐサンタアルベニアだ。そこで赤のショナイルと合流する。バルド・ゲール・アランはもう動き出しているのだろうか。列車は広大なアーリア帝国の陸地を少しづつ走つてゆく。ランマルヒに声をかける。

「もうすぐ着くぞ」

返事がない。耳を澄ましてみると寝息が聞こえる。到着まで寝かせてやろう。長旅で疲れているのはこの子も一緒なのだ。

サンタアルベニアに着くと、雨だった。滅多に雨の降らない気候と聞いていただけに不吉な感じがした。暗い雲に覆われた街ではいつもどおり人々が思い思いで行き交っている。

「ゲルマンとの戦争が近いって本当か？」

「さあ、まさか。2大国が戦争すれば世界戦争になるはずだぞ、皇帝陛下もわかつてらつしやるはずだ」

「しかし、ゲルマンが他国侵略の動きを見せてているというや。アーリアの平和も終わる日は近いかかもしれないな。嫌な時代に生まれたものだ」

タクシーを待つ間、中年の会社勤めの仕事人らしき一人の会話を何気なく耳に入れる。

「戦争か……」

思わず呟く。グライア亡き後的小国連合はアーリア連合、ゲルマン同盟いすれかに吸収されるだろう。私たちは以前訪れた古い館に泊まった。どうやらここは組織が借り上げている建物らしかった。部屋は大人たちは一人一部屋だったが、ランマルヒは私と寝るように既に部屋の片隅に小さなベッドが用意してあつた。ランマルヒは夕食を食べると、すぐに眠りについた。私は寝室でバルド・ゲール・アランのことを考えていた。

バルド・ゲール・アランは稀代の大盗賊と云われている。キングダイヤ事件、皇位継承の宝物盗難事件、アラン・ビルナウルの絵画事件。全てバルド・ゲール・アランが絡んでいるといわれている。そんな彼からしてみれば、子供一人我々から盗み出すのは簡単かもしれない。だが、一ついつもと違うところがある。それは今度はバルド・ゲール・アランにとつて血を分けた子供が対象ということだ。いつの間にか眠りに落ちていたらしい。夜が明け、いつもの快晴がサンタアルベニアを包んでいた。ランマルヒはまだ寝ているだろ

うか。寝床を見る。いない！！

私は跳ね起きると一階に走った。階下の大広間でランマルヒとガゼルは食事をしていた。

「ここにいたのか」

血相を変えた私の姿をガゼルは笑った。

「もうちょっと用心したほうがいいわよ。昨日はあなたも疲れていったようだけど……」

「ジョベルジアはどうした？」

不愉快げに顔を歪めると一人見えない男の姿を探した。

「赤のシュナイルを迎えてるわ。作戦はシュナイルから知らされるでしょう」

ランマルヒは屈託なく「おかわり」とか「もっとないの」とか拗ねた態度を見せた。ガゼルもそれに優しく応対している。手懐けていたほうが何かと便利ではある。私も黙つてテーブルにつくと朝食を食べ始めた。ガゼルが新聞を差し出す。無言で受け取ると一面に『グラシア・シンシア死す！』と書いてあつた。側近のパロワ・アーティングに裏切られたとなつていた。ランズベルクの名前はどこにもない。これからアトランティスは内戦状態に陥るだろうと締めくくつてあつた。哀れな老人の野望も成就しないだろう。と、そこにジョベルジアがドアを開け入ってきた。

「もうすぐ赤のシュナイルが来る。ここでまずは作戦の説明をするらしい」

赤のシュナイル。私にチカラを与えた男。同時に、灰色の男との忌まわしい絆も。脳の奥で男が笑つた気がした。心を空にして、シュナイルを待つた。

## 三章バルド・ゲール・アラン<4>

男は仮面を被つたまま、颯爽と大広間に入ってきた。ランムルヒが齎えている。仮面の奥から男は少女をみつめると、目で笑った。  
「やあやあ。よく来たね。お嬢さん。遠いところからようこそ。サンタアルベニアは気に入つてもらえたかね？」

少女は悪魔でも見るような顔つきでアッシュの背中に隠れた。  
「おやおや。嫌われてしまつたようだ。アッシュくん。彼女の護衛を頼むよ」

そういうとシユナイルは静かに椅子に腰かけた。

「さあ！！作戦会議だ。私がとつておきの作戦を用意してあげたよ。まさに法外の貴族にふさわしい最後をバルド・ゲール・アランも迎えられるだろう」

男の高笑いが響く。ランムルヒはまだ齎えている。ジョベルジアとガゼルは慣れた顔つきでシユナイルの話を聞いている。笑い終えると、さらに言葉の洪水を続けるシユナイル。

「要点を説明しよう。バルド・ゲール・アランは既にアーリア帝国に入ったとの情報もある。やがて、ここを突き止める日も近くあるまい。あの男なら一週間とかからずね。かつて、古代世界でこんな話がある。『矢の腕前で並ぶものないといわれたウイリアム・テルという男の話だ。自分の息子だか、娘だかよく覚えていないが、その頭にリングをのせて矢を放つたそうだ。矢は見事リングにあつた。バルド・ゲール・アランも相当な知略家らしいからな。彼が知略で自らの娘を救えるかどうかの大一番だ。彼の作戦が失敗すれば娘は死ぬ、そんな状況を我々は作つてやらねばならない。わかるね？アッシュくん。異論は後で聞くよ。つまり、タイムリミットだ。2週間をその期限にしたい。バルド・ゲール・アランには伝えてある。今朝の新聞をみたまえ。メッセージ欄にはなんと書いてあるね？」

ジョベルジアが新聞を手にとつて紙面を急いで探す。メッセージ欄を読み上げる。

「これか?』法外の貴族に法外の革命結社が告ぐ。娘は預かつた。2週間後に娘は処刑する。それまでに来られたし』」

シユナイルはまたぞつとするような高笑いをした。

「それだよ。ジョベルジアくん。さあ、奴の息の根を止めるのが先か、我々が娘を奪い返されるのが先か。楽しみだ」

私はこの幼いランマルヒの命を奪うのは反対だった。親には憎しみこそあれども、まだ子供だ。

「シユナイル。この子はまだ子供だ。本当に命を奪う気はないだろうな?」

シユナイルは今度は低い声でアツシユの肩に手を置いた。

「アツシユくん。そうならないように君たちが頑張ってバルド・ゲール・アランの命を奪うんだろう?愚問だよ。それ以外の未来は考えなくてよろしい。だが、時に非情さも必要だということはわかつていたものと思つたがね」

「十分わかっているさ」

私は語氣を荒らげてシユナイルの手を振り払つた。シユナイルは低い声でまた笑つて去り際に、こう言い残して去つた。

「本当にそうかな?ふふふ。まあ、がんばりたまえ。もしバルド・ゲール・アランに娘を取り返された場合は君たちには責任をとつてもらうからね。組織の人間は君たちだけではないと教えておこう。健闘を祈る」

### 三章バルド・ゲール・アラン<sup>く5</sup>

それから一週間は無事に何事もなく過ぎた。だが、変化は突然にやつてきた。ランマルヒを散歩に連れて行くのが日課になっていた私はいつものように昼頃に一人で出かけた。いつもは何事もなく、近くの公園で遊ぶランマルヒを見つめているはずだったが、この日はランマルヒに近づく少年がいた。

たしかに、ランマルヒは年頃の地元の少年にとつてはいかにも異国情緒あふれた美形の顔だちをしていたが、今まで前例がなかつただけに私は警戒心を強めた。数十分、二人は話しをしていたが、少年は残念そうに去つていった。帰り道、ランマルヒに尋ねた。

「さつきの少年はなんだつたんだ？」

「なんでもないわ。ただ、私に用もなく話しかけてきただけよ。何が目的かしら」

「ランマルヒと仲良くなりたかったんだろうさ。だが、気をつけろ。お嬢様育ちはまだまだ世間を知らないからな」

ランマルヒは少し反抗的な目で私を見ると  
「知ってるわよ。少しぐらい」

と言つた。そしてアッシュの手を握りながらこちらを向いた。  
「ねえ。アッシュ。お父さんのこと覚えてる?」

「父?君のか?」

「違うわ。あなたの父よ」

「いや。覚えていない。ずいぶん昔にいなくなつた」

歩きながら小さな子供に嘘をつく人間になつたかと自分を責めながらも、ほとんど記憶のない今ではあながち間違いとも思われなかつた。彼女は自分の父親のことを考えているのだろうか。私のように自分を捨てていつた父を恨んでいるのだろうか。私は彼女にさりげなく聞いてみた。

「君の父親のことは知っているね?」

「お母さんには何も聞いてなかつたけど、法外の五貴族の一人なんでしょう？アッシュの仇だつてことも知つていいわ」

「そうだ。そして私たちは君のお父さんを殺そうとしているんだよ？何故そんなに冷静でいられるんだ？」

私は彼女にとつて辛い現実を語つた。彼女の手を握る力が強くなつた気がした。

「冷静？私が冷静でいるですつて？アッシュ。あなたは優しい人だと思うわ。でも、どこか抜けているのよね。冷静でいられるはずがないじゃない。どんな父か想像は何回もしたわ。でも、今の生活より良いって保証はないし、夢はもつてないわ。それに、私が父と行つてしまえばアッシュたちも困るつてことは知つてるわ」

賢い子だと感心したが、同時にどうすれば皆が丸く収まるか考え

ている姿にいじらしさとともに、悲しさを感じた。

（こんな子供にしたグライアは親として失格だ）

アッシュはそう思い屋敷に戻つた。しかし、屋敷には誰もいなかつた。代わりに一通の手紙が残されていた。

「君たちの仲間は預かった。返して欲しければ、少女を連れてサンタアルベニアのスカイネイビー ホテルまで来い」

書かれている内容はすぐには信じがたいものだつた。家を離れたのはわずか一時間ばかり、そのわずかな間にジョベルジアとガゼルが捕まつただと??そして、この場所の指定は明らかに罠だつた。動搖した私に男が語りかけてきた。脳の隙間をいつも奴はついてくる。

( ( アッショ。アッショ…… ) )

『灰色の男か。ガゼルたちがさらわれた。救いにいかなければ』

( ( 君はまだそんなことを言つているのかね。彼らはドジを踏んだ。結果どうなるうと我々の知つたことではないですか ) )

『自分の部下をなんだと思っている』

( ( ふふふ。君だけはわかつていていたがね。お互い利用し利用される存在。それが君たちと組織の関係だ。君の考えはとつくにお見通しだよ。君は私に干渉される代わりに能力を得た。望む望まないに関わらずね。それが代償と報酬だよ ) )

この男の言い様は確かに私の考えていたことと同じだつた。しかし、共に苦難を共にしてきたジョベルジアとガゼルとの間に仲間意識が芽生えるのは情というものだつた。

『すると、何か?私はここにいて組織の人間がガゼルたちを助けだすのを手をこまねいでいる?バルド・ゲール・アランがいる可能性があるにもかかわらずか!』

( ( アッショ。君の出番はまだ後に用意してある。しかも、壮絶な出番が待っているよ。何でも自分でできると考えることは間違いだよ ) )

ランマルヒが立つたまま怖い顔をして虚空を見つめている私を心配そうにして声をかけてきた。

「どうしたの？アッシュ？ジョベルジアとガゼルは？」

「心配するな。少し出かけているだけだ」

「そうであつたらいいのにどれほど思つたことだろう。私はランマルヒと自分の部屋に戻ると、これからどうするべきか考えた。これは相手に知られている以上危険だつた。

「と、そこに一階に人の気配がした。奴らか？私は8発式のゲルマン製の銃を懐から取り出すと静かに手に持つとランマルヒにここにとどまるように言つて、音をたてないように階段を降りた。

一階からは声がする。

「一体……アッシュのやつは……」

「どうすべきかしらね。灰色の男の……」

聞き覚えのある声に私は驚いた。一階に急いで降りた。

「誰だ！？」ジョベルジアは銃口をこちらに向けた。私だとわかると狐につままれたようにキヨトンとしていた。

「何故お前が？？連れ去られたんじゃなかつたのか？」

なるほど、先程の手紙は彼らに向けて送られてきたものらしかつた。

「それはこっちのセリフだ。この手紙はいつきた」

「お前たちが散歩に出かけてすぐだ」

「我々に対する宣戦布告といふことか。バルド・ゲール・アランめ。やつてくれる。

私たちの居場所はすでに探りあてられていた。後は如何に隙をみせないかの持久戦になる。だが、もし万が一の場合私は本当にランマルヒに銃を向けられるだろうか？もし、バルド・ゲール・アランが私が少女を殺せないと看破したら？弱気になるなアッシュ。お前はやれるはずだ。少し一緒に過ごしたせいで情がうつったというのか！

手紙が来た日から散歩は中止になった。聞いたところによるとスカイネイビー・ホテルには誰もそれらしき人物はいなかつたそうだ。一体、私の所属するこの組織は一体、何人の構成員がいて、何人がシユナイルによって能力者とされたのかも不明だつた。ランマルヒは家中で退屈し始めていた。ジョベルジアとガゼルにランマルヒの護衛を任せて、私は久しぶりに外に出た。ランマルヒの読む本を買ううだめだつた。

少し都会の大きな書店に子供向けの本がたくさん並んでいた。私はその一つを手にとると中身をめくり、内容を確かめる。題名は『蝶とカマキリ』といった。食べられる者と食べる者の垣根を超えて仲のよかつた一匹は決して相手を裏切らない誓いをたてるが、腹をすかしたカマキリは本能のままに泣きながら蝶を食べてしまう。そんなお話だ。最近の本はついぶん暗い内容の本があるものだと考えて、そつと棚に戻すと古代神話の物語の一冊を手に取つた。これを買おう。これなら内容も知つている。当たり障りのないものに見えた。

ふいに後ろに人の気配がする。首を曲げて振り返ると、一人のメガネをかけたビジネスマン風の男が立つていて。背の高さはアッシュと同じくらいで平均くらい。時計は高価そうな金色の時計を腕につけている。アッシュが見つめると、男は満面の笑みを見せた。アッシュは何者かと疑問に思つたが、すぐに見当はついた。小声で男

はアッシュの耳元に顔を近づけると

「はじめまして。アッシュ・クロフォードさん。バルドといいます」と言い放つた。この男が法外の貴族の一人なのか？懐に手を伸ばし銃を確認する。いつでも抜ける。しかし、ここで騒ぎをおこすのはためらわれた。

「賢明です。アッシュさん。あなたが銃を撃つていたら、あなたの大切なご家族は今頃あの世行きだつたでしょ？」

男は澄んだ目でアッシュを近くの喫茶店に促した。私は従わざるえなかつた。やはり、私たちに関することは調べつくされているようだ。そして、第二の家族のことが心配だつた。強制的な力なしに初めて法外の貴族を前に撃つことをためらつた。灰色の男は何も語りかけて来なかつた。

「アッシュさん。あなたたちが組織のボスにいよいよに使われていることも知っています。それは魔術でもなんでもない。あなたの脳に電波を受信するチップが埋め込まれているんです。今私はその電波が届かないようにする装置を持っています。だから、安心して話をしてください。もちろん、あなたがイエローランドの件の生き残りであることも承知しています。どうしてもお知らせしたいことがあつて、あなたの家族を人質にとらせてもらいました。無粋な真似をして申し訳ありません」

なるほど、脳に直接語りかけてくる声はそんな仕組みだったのか。私は久々に開放感を味わつた。だが、バルド・ゲール・アランは私の家族を人質にとつてゐるらしいのだ。またハッタリかもしけなかつたが、どうにも難しい状況だつた。ぼんやりとした憎しみが心に渦巻いていた。だが、私は初めてこの男の話を聞いてみよつと思つた。

席に着いた私にバルド・ゲール・アランはゆっくりと話しかけた。「今世界は有史始まって以来の危機があります。というのも世界を2分する戦争が起きようとしているからです。どういうことかわかりますか?」

「アーリア連合、ゲルマン同盟のことか?」

「そうです。アッシュュさん。二つの勢力は常に均衡を守つてきました。しかし、両国の兵器産業界は長らく同盟間に守られてきた平和が気に入らない。そのためには様々な方策を巡らせてきました。戦争を起こそうとして。そして、まもなくそれは成就しつつあります。パワーバランスが崩れかけているからです。政府の要人にして、兵器産業界が送り込んだ政治家、役人と戦うガルド・イニエーブ。アトランティスを率いて第二国連合を作つていったグライア・シンシア。二人の仲間が倒れました。君たちの組織によつてね。我々の力は大きく削がれた。それとともに、我々を排除しようという動きは両国で高まりをみせています。いつの間にか悪者にされ、いつの間にか時代とともに我々は犯罪にも手を染めたせいもあって悪評もたつた。メディアも皆向こうの味方だつたのです。イエローランドは我々がやつたとされていますが、本当にそれが真実であるか考えてみたことはありますか?」

「イエローランドは法外の貴族が住民を虐殺した事件として有名だ。誰もが知つてゐる」

「あなたは復讐者です。それもとても意志の強い。ただ、あなたは我々を盲目的に憎むことで生きてきた。真実を何一つ知らないとせずには」

「真実だと? 誰もが知つてゐる? この男は何を言つてゐるんだ。私は混乱していた。背中からぞわぞわとナメクジがはつてきて、手の届かない所にいるような感覚だつた。だが、私にとっての真実は

相変わらず変わらないものだった。バルド・ゲール・アランはさら  
に続けた。

「何故我々があなたの命を奪わないのか？そこに疑問はありません  
でしたか？実はあなたのお父さんは我々の味方です。そして、あなた  
に手紙を渡すように頼まれました。どうぞ」

そう言って彼は私に小さな封筒を渡した。ふるえる手で封筒を開  
けると、そこには『クリム・ダーデンスルトよりアッシュ・クロフ  
オードヘ』とある。バルド・ゲール・アランが調べたのか定かでは  
ないが、確かに父の名前だ。記憶には曖昧に名前が刻まれている。  
私は読んでみることにした。

『アッシュ。お前が成人して復讐を企てることになるなど私は予想していなかつた。あの時、どうしてもお前の前から姿を消す必要があつたのだ。それはお前と母さんのためでもあつた。私は世界を戦争に巻き込もうとする組織と常に戦つてきた。法外の貴族とともに……。敵の反撃は強烈だつた。彼らは国というものを、権力というものを持つていた。一方我々は何ももつていなかつた。ただ、あるのは優れた科学技術のみだつた。そう。法外の貴族とは一つの組織の象徴的存在なのだ。ガルド・イニエーブは無敵の体を、グラシア・シンシアは永遠の若さをお前も知つてのとおり与えられていた。最新の科学技術によつてだ。我々はその科学力によつて、戦争へと世界を誘う存在に対し優位を保つてきた。しかし、我々の力は尽きようとしている。協力者だつた科学者は敵に抑えられ技術的優位は揺らいできた。そして極めつけが、非戦論者だつた皇帝の死だ。皇太子は主戦論者であり、まもなくその皇太子が帝位につく。もしそうなればゲルマン同盟とアーリア連合の戦争は不可避だらう。

そして何よりもイエローランドの事件は法外の貴族が起こしたものではない。歴史は常に闇を持つ。我々は歴史の闇の首謀者に仕立て上げられたのだ。その首謀者は、おそらく敵の組織の誰かということしかわからないが、必ず真実はある。お前の所属する組織は我々の敵と何らかの繋がりがある可能性も否定できない。バルド・ゲール・アランはお前にガルザニやカレラ、サニチエートを人質にとつたというだらうが、お前に話を聞かせるためだ。私たちはそんなことをしない。護衛の名目で彼らにつけられている人間たちこそ問題なのだ。だが、安心しろ我々も動いている。お前はバルドの娘を救出してくれるだけでいいのだ。頼んだぞ。アッシュ。』

父より

私は手紙を読み終えて、まだ狐に騙されたような気分から抜けだせなかつた。眞実はいつたいどこにあるんだ。寄せては返す波の如く心は揺れ動いた。どうすべきか私に判断はつかなかつた。ただ一つの解決方法はイエローランド事件の真相をもう一度丹念に調べ上げることだった。それまではどちらに協力するわけにもいかなかつた。

「バルド。私はもう一度自分で眞実とは何かを調べてみたい。時間が欲しいんだ」

バルドは深く頷きながら、少し考へると、黄金色の機械をポケットから取り出した。

「私はあなたのお父さんに大きな恩がある。あなたがそう考へてくれただけでも、来てよかつた。今シャルレ・ガージマスがあなたたちの家族を助けだそうとしています。安心してください。彼ならきっとうまくいく。これを持つて行つてください。脳内の埋めこまれたチップの送受信を妨害する装置です。彼らはあなたの思考がとまつたことで、きっと我々に誘拐されたと思うでしょう。あなたが眞実を見出し、我々の味方になつてくれるることを願います」

バルド・ゲール・アランは私に装置を渡して去つていつた。私は一人、ふらふらと立ち上がるとイエローランドに再び行く決心を固めた。過去と向き合つことで、眞実もみえてくるに違ひない。

廃島イエローランドはアーリア帝国のあるアリアナ大陸から北に行つたところにある。電車に揺られて数時間、私はイエローランドに一番近い港オテロッサに着いた。ここからさらに高速船に揺られて3時間の場所にイエローランドはある。しかし、今は近づけない。アーリア帝国によつて、立ち入りが禁止されているためだ。違法な密航は一步間違えば命さえ脅かしかねないことだつた。しかし、私は行かなければならなかつた。

港を眺めるとモーターのついた小型船、大きな漁船、ヨットなどが混雜氣味に狭い港に並んでいる。人影はまばらだ。組織から預けられたお金が懐にはまだかなり残つていた。大型船は無理かもしれないが、小型船を買つぐらいのお金は持つていた。さつそく私は船を売りたがつている人間はいないか探して回つた。しかし、余程の馬鹿者でもない限り生活に使う船を売る人間などいなかつた。私は新しく船を買うことにした。

帰つてきた漁船に乗つていた暇そうな乗組員を見つけて聞いてみると、ちょうど明日オテロッサでボートショーがあるらしい。その場で望めば購入も可能というではないか。私は運が良かつた。

とりあえず今日泊まるところだ。駅前のサンビーチホテルを選んだ。値段も手頃で清潔感が漂つてゐる、相変わらず部屋は広いのは同じだが……。ホテルのボーイにイエローランドのことをさり気なく聞いてみる。

「イエローランドを観光したいんだが」

ボーイは物好きな客もいるものだと少し悩んだあげく、

「あの島は立ち入り禁止のご存知ないんですか？もつとも今ものこる島民に週に一回定期便で食料やら雑誌やらが運ばれているらしいですがね」

と答えた。私は大いに興味をそそられたが、立ち入り禁止の島に

立ち入ることを許されるのはごく一部の人間にすぎないのであきらめかけた。しかし、偶然とは重なるものだ。ボーイはこんなことを言つた。

「実は立ち入りを許された船の船長が一人で今まで荷物を運んでいたんですが、高齢になるとかで、荷物運びを探しているらしいですよ」

これに私は飛びつかないわけがなかつた。宿泊の準備を済ませると、近くのショッピング施設で日用品などを買い揃えると、清潔な身なりにして船長に会いに行つた。

家は港から少し外れた小高い丘にあつた。人を寄せつけない寂しさが辺りに充満している。こんな丘を一週間に一度とはいへ、高齢で登るのは大変だろうと、私は船長に同情した。ノックをすると、みすぼらしいドアの隙間から片目に眼帯をした老人が顔をのぞかせた。

「何の用じゃ？」

私は手短かに用件を告げると、船長は私の中に招き入れた。家の中はわずかにスペースが来客用の椅子と老人用の椅子のまわりにできていた。それ以外は様々な物で乱雑に散らかっている。老人は初めて私に名乗つた。『バルト・ミュラー二ニア』。それが彼の名前だつた。

船長は私に2・3の質問をした。体は健康か?とかどこからきた?とかそんなことだつた。私は自分の健康をアピールし、サンタアルベニアから来たと言つて、船長を安心させた。船長はくたびれた顔で「明日、イエローランドに行かなければならぬので、朝8時にこの家に来るよう」「と言つた。私は深く素性を探られなかつたのに安心した。

翌朝サンビーチホテルを出ると、太陽が身体を照らした。いよいよ、イエローランドに戻る時が來たのだ。否応なく胸が高鳴り、興奮してきた。生き残つた住民に何か聞ければいいが…。なるべくなら目立つ行動は起こしたくないというのが今の偽りのない気持ちだつた。丘の家に向かうと船長は昨日よりは幾分身なりをきちんとしていて、きれいに髭も剃つていた。家を出て、港に向かう私達は道中無言だつた。船長は仕事さえしてくれれば後はどうでもいいという考え方の持ち主かもしだなかつた。

港に着くと、そこは相変わらず船が混雜していた。船長は港の外れのところにぽつんとつないのである船へと私を連れていった。船は外壁は新しく塗られたものらしく、外見はきれいに見えた。しかし、船内をのぞくと錆ついた操縦室があつた。どうやらかなり古い船を改装したものらしかつた。私が船に乗つて、珍しそうに見ていると船長が声をかける。

「おい。何してる。若造。積む荷物をあそこから取つてこい」といつて指差す方向には立派な青色の建物だ。青色はアーリア帝国では軍隊を意味する色だ。もしやと思い中に入つてみると、そこには軍服を着た、だらけきつた男たちがいた。こんな辺境に飛ばされてやる気を失つているのは明らかだ。だが、私を見ると少し目つきを変えてじつと見つめた。

「何者だ。ここは軍の詰所だぞ。用のない者は入るな」

一番入り口近くにいた男が大声をあげる。私はバルト船長に頼まれたことを伝えると

「そうか。そうか。今日の配給品はこれだけだ」

といつて、顎で示す方向をみると紙袋で包まれた荷物が数箱分置いてあつた。私は数往復して、荷物を船に運び入れると詰所に戻り、「終わりました」と言うと軍人に怪しまれないように、そそくさと船に戻つた。

バルト船長はすでに船のエンジンを動かしていて、私が飛び乗ると同時に

「よっしゃ。終わったか?」

とエンジン音に負けないくらいのがなり声で聞いてきた。私も目一杯の声を出して、終わったことを告げると、船は出港した。航海中も船長は無言だった。

数時間の後、イエローランドの島がみえてきた。私は船酔いで苦しめたが、もしかすると過去の記憶が苦しさを一層高めたのかもしれなかつた。とにかく私はイエローランドの地に降り立つた。

イエローランドの大地は記憶にあるとおり短い草木に覆われていた。おいてあつた荷台車に荷物を積み、船長とともに奥地へ入つていぐ。しばらく行くと曲がりくねつていた道の先に開けた土地、いや町が姿を現した。私は自分の住んでいた場所を記憶から必死に掘り起こそうとしたが、無駄だつた。緑色の薦に覆われた一軒の家に船長は入つていつた。私は外で待たされた。町に人の姿は見えない。私は意を決して、荷台を置いて一軒の家に入つてみた。中には老女がいて、毛糸でセーターを編んでいるところだつた。

「おばあさん。ちょっといいですか」

声をかけてみたが、返事がない。どうやら耳が遠いようだ。私は大声で話すことにした。

「おばあさん！！」

ようやく彼女は私に気づき、「ヒヤ」と驚きの声をあげると、近くから眼鏡を取つて、かけると私の顔をまじまじと見た。

「何者じや？お前さん」

「バルト船長の配給の助手だよ。ちょっと、この島に興味があつてね。なんで、ここは立ち入り禁止にされているのか知りたいんだ」  
彼女は口をもぐもぐさせると困ったように言つた。

「それをすることは禁じられておる。もう一〇数年前の話じや。聞いても何も面白いことではない」

どうしても聞き出さなければならなかつた。何かいい手はないかと考えていたが、ここは正直に話すほうがいいと思った。

「おばあさん！私は秋の大殺戮の生き残りなんだ」

途端に老婆は怯えるように身を固めると、「ひい」と言つた。そして、「帰つてくれ」と冷たく言い放つた。私は仕方なく家を出た。外では船長が私を待つていた。声は外に筒抜けだつたらしい。

「お前、秋の大殺戮の生き残りだつたのか……」

しばしの沈黙の後に私が頷くと、船長はため息をついて、話し始めた。

「 そりゃ。ならばお前は聞く権利があるかもしけんな。あの事件の真実を」

船長はどうやら秋の大殺戮について知つてゐるようだつた。

「 アッシュ」とか言つたか。父母の名前は覚えておるか?」

「 クリム・ダー・デンスルトとファティアです。母は亡くなりました。

秋の大殺戮で」

船長は驚きで目を見開き、またため息をついた。

「 君の母親の墓地に行こいつ。そこで、話してやう。あの事件の真相をな」

私たちは町外れの墓石のあるところまでやってきた。石には『戦いで命を落としたものたち』と書かれていた。ここが母の墓らしかつた。

「ここが、母の墓地ですか？」

私はバルト船長に問いただした。

「そうだ。アッシュ。ここにはあの大殺戮で命を失った人間たちが埋葬されている」

船長は重苦しく、言葉を選ぶようにゆっくりと答えた。手は小刻みに震え今にも倒れそうだ。大きく息を吐くと船長は話し始めた。「この前亡くなつたアーリア皇帝の兄にあたる人物に話はさかのぼる。当時、アーリア皇帝はその兄にあたる人物だつた。世界に対する野心を隠そつともせず、様々な戦いに介入していつた。そして、ようやく世界統一の兆しが見えた時、進んだ科学技術、いわゆる戦争技術だな、その基礎を担つていた科学者たちが戦争に協力することを拒んだ。彼らはゲルマンに技術を売り、そのお金で武器を買皇帝に反旗を翻した。そして内戦は始まつた。いくら進んだ科学技術を持つていたとはい、所詮科学者だつた。戦争は下手くそきわまりなかつた。ここまで言えばわかるね。科学者の拠点はイエロー・ランドの都市プロメテウだつたのだ。多くの島民が犠牲になつて死んだ。そして、住民と科学者たちの間に不信感も生まれた。科学者は住民を次々に戦争をするための兵士に作り変えていつたからだ。科学者自らが、人体改造されたとも聞いた。とにかく戦争は負け、イエロー・ランドは呪われた地となつた。私はただの住民だつた。妻も娘も失つた。そして今、島にのこることを許された人々に食料を届ける仕事をしている。せめて家族の靈が慰められるようにな。科学者たちはここを離れいざこかへ姿を消した。それから彼らは法外の貴族と呼ばれるようになつた。君の父も科学者の一員だつたのによ。アッシュ。しかし、彼らは時の皇帝の命を奪うことには成功した。暗殺といわれている。そして、非戦論者の皇帝が帝位についた。しかし、最近亡くなつた。そして、今――再び野望を抱く皇帝が立

つた。それが事の顛末だ」

そういうことだったのか。科学者たちはゲルマンにうまく進んだ科学技術を与えたながら、また様々な方策で戦争を避けようと動いてきたのだ。ということは、母は死ぬべくして死んだのか？科学者の父を持ったから？私は誰を憎めばいいんだ。戦争を止めようと戦争を始めた科学者か？それとも戦争を起こうとするアーリア皇帝か？何もかもが闇の淵に沈んでいく。私はふらふらと船長に促されて、イエローランドを離れた。

時間はまだある。私にできることは家族を救いだすことだ。ガルザ二叔父、カレラ叔母さん、サニチエートまつていってくれ。せめて大事な人間だけでも守つてみせる。

アーリア帝国は300年の歴史をもつ大国だ。広大な領地は北から南まで数千キロに及ぶ。北部の先端の港町オテロッサから南部のトルキアまでは交通の便も悪く、2日かかった。私はその間、自分に蓄えられた知識を間近で聞いた現実と照らしあわせていた。なるほど、アーリア帝国の中では決して真実の歴史など出てくるはずもなかつたか。私は今までなんと無駄な時間を過ごしてきたんだ。しかし、まだ遅くはない。叔父たちを説得して、戦争のない小さな土地に移り住もう。

叔父の家は相変わらず、いつもの場所にあった。ただ、叔父たちはいなかつた。戸には銃弾のあとがみえる。何かあつたに違いない。ここにいつまでもいるのはまずい。そう思つた瞬間、背中に棒のようものの感触があつた。

「アッシュ。こんなところで何してるの？」

ガゼルの声だつた。背中に銃を突きつけている。この女こそ、何故ここにいるのだ。私は思考を巡らせたが、どうやらバルド・ゲル・アランの件が片付いたので、ここにいるらしかつた。私は努めて冷静にガゼルのほうを向こうとすると

「動かないで。あなたには拘束命令が出てるわ」

と甲高い声で叫んだ。私は背中にガゼルを感じながら言葉を選んだ。

「ガゼル。君は騙されているんだ。君の組織は法外の貴族を倒すための組織なんかじゃない。戦争を起こそうとする権力者の集まりなんだ」

少し空気が和んだ。ガゼルが笑つたらしい。声は聞こえないが感覚でそうと気づいた。

「馬鹿ね。そんなこととうに知つてゐるわよ。いい? 今度の戦争で勝つてこそ、平和な世界がやってくるのよ」

「全て知つていて、手を貸していたというわけか。ガゼル！！」

「どうやらあなたとはもう違う道を歩み始めているみたいね。殺すなとはいわれているけど、ここで殺すべきかしらね。最初みたときからあなたは我々にとつて重大な脅威になると感じていたわ」

ガゼルは銃の引き金を引こうと力をこめた瞬間！鳥が大声をあげて飛び立つた。一瞬、ひるんだガゼルに、私は振り向くと銃を奪おうとガゼルの手を掴んだ。銃口は天空に向いている。一人はしばしひみ合つた。争つている様子を見て、見物人が集まりだしていた。

「おい。何してる。警察に通報するぞ」

近くの住民がざわざわと声を出す。その中の一人の力自慢の若者が銃を奪い取る。

ガゼルは軽く、咳払いのような声を喉の奥で出すと、息をきらして私を睨んだ。

「とにかく、あなたのことは組織に伝えておくわ。それと、あなたの叔父さんだけどね。死んだわよ」

腹が立つた私はガゼルに掴みかかるとしたが、若者に静止される。ガゼルは鋭い目つきのまま立ち去つた。

「あんたアッシュかい？」

ふいに群衆の中に見知った顔があった。隣に住むおばさんだ。

「おばさん。家族は無事ですか？」

おばさんは言いにくそうに額に手をあてて答えた。

「ガルザ二さんは亡くなつたのよ。何か事件に巻き込まれているのね？カレラとサニチエーツは行方不明になつてゐるわ。昨晩ここで撃ち合いがあつたのよ。警察に通報しても来たのが一時間後なのよ。まったく近頃の警察は！」

カレラおばさんとサニチエーツはどうにじつたのだろう。再びバルト・ゲール・アランに接触する必要があつた。

私に残された唯一の手がかりは、この黄金色の機械だった。これは一体どこで作られたものだろう？ふと後ろの平らな部分を見ると何やら文字が刻んである。傷のようにも見えて後から鋭い刃物によつて刻まれた文字らしかった。

『マカチユ遺跡』

とそこには記されていた。マカチユ遺跡といえば、アーリア帝国の古代アーリア人の住んでいた発祥の地とされる遺跡だ。広大な城跡と深いホリによつて作られた遺跡群だ。バルガルガラアス城と城下町が保存され、今も訪れる観光客が多いと聞いている。

ホテルの一室で考えていると猛烈な眠気が襲ってきた。よし、明日マカチユ遺跡に行つてみよう。思考が切れるとき私は眠りに落ちた。

次の朝、大陸横断鉄道で東のマカチユへ向かつた。人がとても多かつた。人々の話を聞いてみると皇帝の即位式がここで行われるのが習わしになつていいようだ。もしかするとバルド・ゲール・アランは皇帝の命を狙つてやってくるかもしない。私は明日の昼に即位式が行われると聞いて、それまで町を歩いてみることにした。すると警官に呼び止められた。

「あなた。アッシュ・クロフォードさんですか？」

「はい。そうですが」

答えると警官はちょっとついてきてほしいと言つた。二人組の警官だつた。

警察署につくと、暗い部屋に通された。中には淡い茶色の服を着た少し曲がった鼻の男が立つていた。

「おうおう。アッシュくんだけ。まあかけたまえ」

私は何の用で呼ばれたか見当がつかなかつた。

「君にはガルザニ・クロフォードの殺害容疑がかかっている」

なんだって。私がガルザ二叔父さんを殺した？何馬鹿なことを。しまった。これは奴らの計略だったのだ。警察にまで奴らの力が及んでいたのか。

「身に覚えはありません」

私は潔白を主張した。

「しかし、君。逮捕状がでているよ？」

肉食獣の目で私を見つめる男。

「知りません」

「困ったね。取りあえず、君はここから出られないよ」

私は鉄の棒で遮られた部屋に入れられた。中には薄暗い電灯がついているだけだった。明日までに出なければならないというのになんてことだ。私は唇を噛んだ。

閉じ込められた部屋で過ごす夜は憂鬱だった。サニチエエートは今どうしているだろう。そして、父は今どこにいるのだろう？今も父を恨む気持ちは変わらない。何故家族の幸せを第一に考えてくれなかつたのか。アーリア帝国に歯向かわなければ、こんなに人が死ぬことはなかつたかもしれない。もっとも、世界戦争が起こればどうなるかはわからないのだが。私は戦争がどういうものか知らない世代だつた。戦争がどういうものか想像がつかなかつた。ただ、暗いとても殺伐としたイメージだけがあつた。

夜行性の鳥の鳴き声がする。どうしたらここから出られるだろうか。私は薄明かりに照らされた部屋の中で自分の力の限り考えついた。その時、あの声が聞こえてきた。灰色の男だ。そうか、金色の機械を警官に取られてしまつたのだから、当然といえば当然だつた。脳の中にこびりついた苔のようにそれは違和感をともなつてやつてきたのだ。

（アッシュ。私は君を評価している。今ならまだ間に合つ。我々と共に法外の貴族を倒そう。君があいつらから何を聞いたか知らないうが、それらは全て虚言だ。目を覚ますんだ）

『灰色の男か。もうお前たちの味方も法外の貴族の味方もしない。家族と静かに暮らしたいだけだ』

私は自ら踏み入れたこの世界に都合よく別れを告げる心持ちだつた。だが、最初に復讐を決めた時から決して引き返せないとこころまで来ていたのだ。初めてそれを知つて、ガルザ二叔父の言葉の本当の意味を知つた。古代の格言がある。「戦いに一度足を踏み入れたら決して引き返すな。引き返した時、後ろから撃たれる」まさにこの通りの状況になつていたのだ。灰色の男が私の離脱を、逃げを許すはずがなかつた。

（アッシュ。それはできない相談だよ。そして、君の家族の身柄

は我々の元にない。法外の貴族の仕業だ。やつらから家族を取り戻すために、我々と共に戦おう）

ふいにそこで、脳に響く通信が途絶えた。一体どうしたことだろうと考へたが、灰色の男に何か起こったか、もしくは再び電波妨害装置を持った人間が近くにいるかだ。

「入れ！！」

警官の怒声がする。隣の部屋に誰かが入れられたらしい。再び警官が去つて辺りは静寂に包まれる。とそこに鉄格子の隙間から鍵らしきものを持つた手が隣の部屋から伸びているではないか。

「早く！…この鍵を使って逃げてください」

どうやら女の声らしかった。声の主のことはさておき、このチャンスに私はすぐさま反応し鍵をひつつかむと急いで鉄格子の鍵を開けると、外に出た。女の顔を見ようとしたが薄暗くてよく見えない。私は全ての部屋の鍵を開けると、一斉に囚人たちは警察署を出ようと駆け出した。私と女もあとに続く。警官は少なく、既に囚人たちに縛られていた。

私と女は悠々と外に出た。しかし、この女何者だろつか。

しばらくして私たちは立ち止まり電灯できらびやかに照らされたホテルに外を覆う闇から逃れるように入つた。どちらからというわけでもない。いつ死ぬかともわからないこの身にあっての情事はとても楽しいものだつた。私の経験人数は決して多くはない。2・3の言い寄ってきた女性と束の間の恋を楽しんだことはある。性行為自体が楽しいものであると今日まで思わなかつた。それ程女性のテクニックはずば抜けっていたのか、それとも私が心の底から女を愛してしまつたのか。私は自分を客観的に見つめることができないでいた。明るい部屋でみる女の容姿はまるでラテン系の女優アンナ・クルニセナに似ていた。私はその女優のスキヤンダラスな一面は好きになれなかつたが、容姿だけは好ましく思つていた。ただ一つ女優と女の違う所は腹の傷だつた。彼女は大きな傷跡が腹にざつくりとできていたのだ。私は何も聞かなかつた。彼女も何も言わなかつた。星は夜に燐々と輝き、やがて、消えていく。彼女もやがて消えて行くのだろうか。そんな感傷が私を襲つた。

「君の名前は？」と私がベッドの中で聞くと「レンナ」とだけ軽く答えた。情事の間の会話はそれだけだつた。一人は激しく朝まで求めあつた。

私の中で女に対する信頼も不性感もなかつた。ただ、味方だと思つていた。だから助けてくれたのだと。

朝二人はホテルを出る。料金は女が払つた。私は何も持つていなかつたからだが、軽く屈辱を感じた。これから私は彼女に連れられてどこに行くのだろう？ふと、そんな疑問に心を突き動かされた私はたまらず彼女に聞いてみたが、レンナはまるで言葉がわからない稚児のように柔らかに微笑むだけだつた。

朝早くの遺跡の周囲には早くも観光客が姿を現していた。昨日の脱走劇が嘘のように警察の姿はなかつた。通りを3回曲がつて狭い

道に入ると、観光客に決してみせない。マカチューの町に住む人々の貧しい暮らしが見えてきた。子供が井戸に水を汲みに来ている。どうやら学校には行つていらないらしい。レンナは私が子供たちを哀をこめて見るのに気づいたらしい。まるで、人形のように押し黙つていた彼女は強い語氣で私に言った。

「ここの人々は進んで今もこの暮らしを続けているの。文明は彼らにとつて毒なのよ。もっとも最近では若い子供たちは都會に行きたがるみたいだけも……。だから憐れむのは間違いよ」

「わからないよ。こんな生活の何が楽しいんだろう」

「あなたにはわからないかもしれないわね」

彼女は今度は私に子供を見るような視線を向けた。たしかに文明の科学の力を信じてきた私にとって、彼らの行為は實に時代錯誤なものだつたし、彼らの無力さはよくわかつた。

「あなたのお父さんは尊敬しているけれども、あなたは力の信奉者のようね」

レンナは悲しそうに私を見た。そして、その時目的地に着いたらしかった。ドアを開けて彼女が中に入るよう促す。

家の中にはバルド・ガール・アランが私を待つていた。顔は変わらないが、服装はこの土地の人々に似た服を着こなしていた。

「ようこそアッシュくん」

バルド・ゲール・アランは相変わらず紳士的な男だった。私に椅子を進めるとレンナに軽く目で合図した。レンナは少し戸惑いを見せたが、バルドの指示に従つて部屋を出た。

「彼女はなかなか優秀でしょう?」

レンナが去るとバルドは世間話のようにきつだした。

「ああ。助かつたよ」

これほど何もできない自分をもはや叱咤する気も失せていたので、素直に認めるに悲しみが胸を駆け抜けた。そして、もはや戦うことを見た男の成れの果てが自分だと感じた。

「私はもう戦えない。家族と一緒に暮らしたいんだ」

バルドは目を真ん丸くして驚きの表情をすると少し考えこんだ。  
「アッシュくん。君の復讐心はそのまま、アーリア帝国に向かないかね?」

「向かない。当時の皇帝も死んでいるし、もうこれ以上自分のできることはないと想い始めている」

「確かに君は何もできないかもしない。ヘマもやらかす。段取りも悪い。今や君はアーリア帝国のお尋ね者です。だが、何事も向こう見ずにやり遂げる力には感服していたのですがね。見込み違いだつたようですね。残念です。とりあえず、革命結社からとりつけられた発信機は日々手術で頭から取り去りましょう。我々の本拠地にあなたを案内しますよ。彼らのことを我々は“法内の悪魔”と呼んでいます。どうやら法外の革命結社は我々の見込みどおり法内の悪魔の実働部隊のようです。彼らも我々に対抗するためになりふりかまつてられなくなつたのでしょう。新たな名称を考えなければなりませんね。皇帝以外は表だって彼らの組織にどんな人物がいるのかはみえていません。我々は諜報機関ではありませんからね。そこもガルド・イニエーブが探つていたはずのですが、死んでしまった。

あなたを責めているではありません。我々もあなただと気づいたのはグライアから連絡をもらつてからでしたから」

バルドは一気にここまで言ってから、間を置いた。以前から聞きたかった事を聞こうと私は重い口を開いた。

「グライアは何故死んだんだ？」

バルドは後ろを向いて私に背中を見せた。彼の背中は思ったより小さくみえた。

「何故？ええ。疑問でしょうね。私も疑問です。彼女がこの戦いに疲れたのか、それとも若さの代償として持った病が苦しかったのか、私にはわかりません。ただ一つ言えるのはグライアはランムルヒをあなたに託したということです」

「どういう意味なんだ。以前、法外の革命結社の女からも言われた」「それは、あなたが考えて答えを出すしかないのです。ランムルヒは無事ですよ。たすけだすことができました。あなたの家族と一緒にいます。残念ながらガルザニさんはたすけだせませんでしたが」少し暗い顔つきをしたバルドは、氣をとりなおして、これから皇帝を襲撃する準備があると言つて別の部屋に移つた。私は明日、法外の貴族の本拠地に行くことになると想い残して。

彼らの皇帝暗殺が失敗したのは必然であった。唯一進んだ科学の力によつて、いつでも、暗殺という手段をとれるという脅しもはや通用しなくなつたのだ。時代は動いていた。それとともに私の心も揺れるようになつた。レンナは暗殺失敗の夜、豪快に酒を飲んで私の部屋にやつてきた。酒臭い彼女を私は受け入れはしたが、この女性に人生を支配される気はまったくなかつた。つまり、この日で私と彼女の一日間の蜜月は終わるはずだつたのだ。しかし、そなはならなかつた。バルド・ゲール・アランは「レンナに本拠地に連れていつてもうう」と言つたからだ。バルド・ゲール・アランは一人で皇帝暗殺の計画を新たに練るつもりらしかつた。「一人で大丈夫なのか?」と聞くとバルドは肩を叩いて「心配するな。君は何も考えずに束の間の余生を楽しみたまえ」と朗らかに語つた。

レンナはマカチユの伝統的な服装らしいアカルアという虹色のドレスを着ていた。聞くところによるとマカチユの王族の物らしい。彼女が何故警察に執拗に追われていないのであるかも、王族だからだと私は気づいた。バルドは彼女が古代アーリアの王族の血を引いているといった。マカチユの父であるカニシュカが戴冠式の時に皇帝に冠を授ける役目を担つていたようだ。レンナはマカチユでは少々の乱暴は私には許されるのよ、とだけ話した。バルドは私たちが隠れ家を去る間際まで熱心に如何に今回の戦いが重要か論じていた。

レンナと共に出発した私は世間話を彼女とした。学生生活のこと、小さい頃の思い出、ただし未来のことはお互に意識的に避けていた。私は語るべき未来がもし、戦争があつた場合、そしてアーリア帝国が勝利した場合暗いものになると感じ、悲しくなつた。カレラおばさんはともかくサニチエートやランムルヒを一生外の世界を知らないで小さな辺境の地で隠れるように過ごさせるのはやりきれなかつた。そして、彼女たちが不遇な生活を是とするかも私にとつ

て心配のタネだった。つまりは全ては私の絵空事なのではないかと考え始めたのだ。もし、彼女たちが戦いたいといえば？いや、ありえない。私は必死にその考えを打ち消した。

鉄道からマカチュ空港で100人用の中型の飛行機に乗った。向かう先は予想通りゲルマンだった。レンナは私のパスポートの偽造されたものを空港の職員にみせていた。

いざゲルマンへ。再び異国の方を踏むことになつた私は家族との再会を楽しみにしながらも、得体の知れない不安に押し潰されそうであつた。レンナは機内で私を心配して、そつと手を握つてくれた。情けなさとどうしようもなさに私はただ脅えているだけだった。

ゲルマンのベアトリー・ヒュ・空港は以前と少しも変わっていなかつた。私は前と同じ景色に安心した。そして、ようやく一息つけるなと思った。だが、レンナは相変わらず厳しい顔だ。私はゲルマンを味方の国と思っていたがそうではないらしい。レンナは稳健派が今は政権を握っているからいいが、そうでなければ我々の立場はどうも危ういものになると語った。

ゲルマン国営鉄道の駅に着くとレンナは切符を買つた。国際公用語であるジャスール語はゲルマンの國の第一外国語であることも手伝つてレンナはやり取りに困つてゐる様子はなかつた。蠅がレンナの肩に止まつたのに気づいたので、レンナの肩を軽く叩くと蠅は去つていた。レンナはこぢらを振り向いた。「虫がいたから払つただけさ」と言ひつと、明るくにっこりと微笑んだ。

ゲルマンの鉄道はホームが低く列車に乗るには登らなければならなかつた。明るい朱色の車両にはゲルマン神話の神々が描かれてゐるとレンナが教えてくれた。

ゲルマンで初めてあつたガゼルのことを思い出した。彼女は世界がアーリア帝国によつて統一されれば何もかも良くなると本氣で思つてゐるのだろうか。そして、ジョベルジアは元気だろうか。身近にいるときはどうしようもなく苛々させられた彼の言動も今となつては寂しさを増した。

「あなたの手術は本部とは別のところで行われるわ」

氣の毒そうに私の頭を見つめるレンナは中に入った電子チップを取り出したい欲求に抵抗しているようなそぶりを見せた。私は視線を逸すと、窓の外を眺めた。広がる田園風景はこの国がとても豊かな国であることを理解させたが、同時に医療分野での技術はどうなのだろうと不安になつたので、レンナに聞いてみた。

「あなたの手術は私たちの組織のドクターと呼ばれる機械によつて

行われるわ。心配しないで

「機械？」

思わず聞き返すと拳を握りしめた。不安感だけが増していく。

「それとあなたの体の検査も同時に行われるわ。何か気づいたことはない？」

「気づいたことか。それなら自分の体の傷が治るスピードがとても早くなっている」

「そう。それもみてもらいましょう。そつちは科学者の手によってね」

「機械でなくてほっとするよ」

私が言うと、レンナは口に手をあてて笑った。

「バーデン～。バーデン～」

「さあ。着いたわ。降りるわよ」

レンナは立ち上がった。私も立ち上がると、列車を降りた。

バーデン自治区にやってきた。ここは法外の貴族のためにゲルマンの国が貸した土地だという。赤い主色に黄色の線が入ったタクシーに乗ると運転手はやけに愛想が良かつた。ドアの開け閉めもやつてくれるし空港で買った家族への少しばかりのお土産も手際よくトランクに詰めていった。車がエンジン音を立てて走りだすと

「あなたこの車タクシーだと思ってるでしょ？」

とレンナが悪戯っぽい顔で声をかけてきた。「その通りじゃないか」と答えると、下品にも舌をチッチッチと鳴らし「違うのよね。それが」と言つた。じゃあなんなんだとばかりに相手に言葉の意図を理解できないでいると、「彼も私たちの仲間よ」と言つた。

すると運転手の男が待つてましたとばかりに喋りだす。

「そういうことだよ。青年。ここにはイエローランドを脱出した科学者たちと賛同した住民たちの新しい土地だ」

一国の中に完全に別の国を作つているようなものらしかった。「ここには荒地以外何もなかつたのよ。それを私たちが一〇年余りでそこそこの町以上のものを作つたんだから、すごいでしょう？」「そういうことだ。青年。なんといったかな。そう。アッシュュだ。

アッシュュ。参加する住民は世界中からやつてくる。もちろん我々がスカウトして連れてきたりしているのだ。中には世間のままの噂を信じてやつてきた凶悪な犯罪者もいるがな。アーリア帝国の一〇〇〇年囚のシャルレ・ガージマスは有名だよな

レンナの助けを借りながら運転士は楽しそうに話した。

病院に着いた。運転士は荷物は新しい住居になるとひに置いておくといったので手ぶらで中に入った。レンナも案内のためについてきた。

数人の医者や看護師にさつそく体を調べられた。皮膚を少し傷つけて、傷の治りの早いのを確認すると何か得体の知れない注射を腕

に射つた。すると私の意識は途切れしていく。レンナが手を握つて

「大丈夫よ。安心して、休むのよ」

と励ました。体が眠気に耐えられず診察台に倒れた。

田が覚めると、すっかり事が済んでいた。レンナに「おめでとう」と言われ、何か異常がないか確かめるように観察された。脳の中の異物はなくなつたために頭が軽く感じられた。医師のバルザスがやつてきて、説明を始めた。説明は一〇分程続いたが、よくわからなかつた。とにかく、一刻も早く家族に会いたかつたせいもあるのかかもしれない。そして、病院の暗い廊下をレンナと並んで歩き外に出た。

「あなたの新しい家までは歩いていけるわ。いきましょう」歩きだす彼女の後を追つてついていくと、走つてくる子供の姿がみえた。

「アツシューーー！」

ランマルヒだ！！気づいた瞬間、彼女が飛びついてきた。バランスを崩しながらも受け止める。遠くではサニチエエートとカレラおばさんの姿がみえた。

ああ。家族の元に帰つてきたんだ。安堵感が体に満ちた。

それからの一週間は最高だった。映画館、喫茶店、遊園地ありとあらゆる娛樂を楽しんだ。もちろん家族と一緒に。そして、ガルザ二叔父の盛大な葬儀を行つた。ランマルヒも参加してくれたのは喜ばしいことだつた。レンナとサニチエエートはすぐに親友になつた。ランマルヒはレンナに最初は反抗していたが、だんだんと仲良くなつて、ついにレンナの中に美德を見出したらしかつた。晴れ晴れとした気持ちだつたが、ただ一つ気になることがあつた。父のことだ。父はゲルマンにはいないと聞かされていた。なんとか会おうと試みたが、レンナをとおして断られた。だが、たしかに父は生きているらしい。そして町の人々みんなに好かれているらしかつた。町にひとたび買い物に行けば、歩いている人々は足を止めて珍しそうに見て、話しかけてクリム・ダーデンスルトの息子とわかると握手を求めてくるのだった。

一週間が経つた。ついに恐れていたことが起きた。そして、町は陰気な空気に包まれた。戦争が始まつたのだ。アーリア帝国がどちらの同盟にも属さない第三国同盟諸国を攻撃したことから始まり、ゲルマンのアーリア帝国への宣戦布告。アーリア帝国の宣戦布告が続いた。二つの大国はついに、衝突を開始した。歴史の必然か、はたまた人為的故意によるものなのか。判断はつかない。ただ、胸の中で自分が安穩に暮らしていることが恥ずかしく思える気持ちがあつた。

ゲルマンは戦時下だつた。そして、バーデンの町も例外ではない。戦線ははるか海上もしくは第三国に未だにとどまつていたが、まったく余談を許さない戦況だつた。そして、日々の戦況は日に日に悪化していく。レンナはある日「ついさつきゲルマンに我々が持つてゐる全技術を提供することを決めたわ」と告げた。法外の貴族の伝説の終わりであった。超人的人間が少数な時代は終わつたのだ。

皇帝暗殺に失敗してバー＝デン自治区に帰つてきていったバルド・ゲール・アランに誘われて高台で夕日を見ていた。

「アッシュくん。我々も困り果てています。人が人である時代は終わろうとしているからです。まさに人間が用いてきた科学の力によつてです」

バルドは悲しそうに言った。頬からは涙の線がすーっと引いた。  
「どうか、この苦しみを味わう人間が自分でいいと信じてやつてきました。しかし叶わなかつた。無念です」

バルドにどんな超人的力が備わっているかは知らなかつたが、バルドは“苦しみ”という言葉を使った。疑念の顔つきをすると悲しそうに頭をふつた。

「物事には代償があります。グライアが死んだように、人間の体を急激に弄ぶことを神はお許しにならなかつたのです。そして、私は人間として大事な力を失いました」

「大事な力？」

聞き返すと、彼は力なく「肉親には決して私の姿が見えないのです」と言つた。

「と、そこに遅いのを心配したランマルヒがやつてきた。  
「アッシュ。一人で何してるの？」

「ランマルヒ。お前にはこの人が見えないのかい？」  
「何のこと？アッシュつたら何いつてるの？馬鹿みたい」

どうやら本当のようだつた。ランマルヒにはバルドの姿が見えないのだ。そして、声さえ届いていないらしい。バルドはそつとランマルヒを見ていた。もう泣いてはいなかつた。

バルドとの再会から数日が経つた。バーデン自治区を出歩く人々は日々減つていった。ゲルマンの穩健派内閣が倒れ、戦時内閣が新たに組織されたことを耳にした。バーデン自治区は解体され、研究所が作られるとレンナは散歩の時に話した。

「もうすぐ私たちはここにいられなくなるわ。どこか行くあてはあるの？アッシュ？私もそろそろ休暇はおしまい仕事に戻ることになるわ」

ついにこの日が来てしまった。短い幸福だった。さて、どうするべきか？

「組織は世話をしてくれないのか？」

聞いてみると、レンナは笑った。

「甘えないで、組織ができるのはここまでよ。組織はゲルマンの科学部隊の一機関に組み入れられるわ。ゲルマンのどこでも住める手配はしてあるわ。ただし、戦況はアーリア帝国が優勢よ。ゲルマンもどうなることやら」

私たち家族とランマルヒはゲルマンの首都アルベルンにやつきた。組織から渡された手切れ金のようなもので住居を借りると住みついた。しかし、時はアーリア帝国からの人間には厳しい時だった。法外の貴族の組織もその力を失い、私たちは苦しい日々を送った。

そして2年の月日が過ぎた。カレラおばさんは病気のため亡くなり、サニチエートとランマルヒとの生活が始まった。そして、いよいよ私も徴兵の時がやってきた。科学技術部兵器人間製造部というところから呼び出しがきた。久しぶりに会ったレンナはやつれて見えた。私はバーデン市となつたかつての自治区にやつてきた。

「アッシュ。あなたには平和に生活してほしかったわ。でも、これも命令なのよ。あなたのお父さんからのね。それというのもちょっと

としたわけがあるのよ。あなたでなければならぬわけが。わかつてくれるわね「

レンナは申し訳なさそうに言葉を選ぶ。

父に必要とされることは戸惑いがあった。しかし、選ぶ道はなかつた。手術台に寝かされ改造を受けた。これは前線に配備される兵器になることを意味していた。

## シャルレ・ガージマス／1／

起き上ると体が重かつた。レンナが満足そうに見ている。体は至るところが機械化されていて、機械でない部分を探すのが難しかつた。足を触ると、その金属の冷たさにぞつとした。レンナは私の数少ない生身の部分である手に口づけをしてから言った。

「あなたは未来を予測する力を与えられています。未来を見通すことができるのは、あなたとあなたのお父さんの二人だけです。それは、この未来予測器官があなたのお父さんに適用することを目指して作られたからです。そして、その代償は生身の体を失うことでした。その他にも代償はあるかもしません。しかし、あなたの父親から聞いたのはそれだけです。これから、あなたは私と戦場へ行つてもらいます。そこで、未来を見通して欲しいのです」

未来予測だと？？そんなことが可能なのか？そしてその器官が私に備わっているというのは信じられなかつた。ただ、そのことを考えた時に脳が「トリと音を立てて動いた気がした。口は滑らかに動くようだつた。ここも生身だつた。私はレンナに尋ねた。

「戦況はどうなんだ？未来を予測して、勝てるのか？」

「あなたのお父さん、クリム・ダー・デンスルトは今全世界にアンテナを張つて情報を脳に入れながらゲルマンの首都で予測してゐるわ。そのおかげもあって、ゲルマン同盟は互角に戦えているわ」

病院を出ると、軍用のヘリコプターが通りに止まつていた。サニーチェエートやランマルヒの姿もあつた。二人は変わり果てた姿の私を見て、気味悪そうに見ていた。心配そうにといったほうが正しいのかもしれないが、今の私にそれを見分ける余裕はなかつた。

ヘリコプターは出発し、ゲルマンの首都アルベルンの空港に降り立つた。そこから東に1万キロの戦場ジャポンへと私は向かうことになつた。

機械の体はほとんど睡眠を欲しなかつた。常に興奮状態で覚醒し

ているようだつた。レンナは機内で、私に戦場の状況を聞かせている。

機内でその他にも意外な人物と出会つたシャルレ・ガージマスである。

「この人がサニチエートとカレラさんを助けだしてくれたのよ」  
ざらざらした肌質にきめ細やかな軍服を着て、勲章をぶら下げて  
いる男は控えめに一礼すると手をさしだした。握り返すと、口元に  
わずかな微笑もみせないで、そのまま手を引っ込めた。これが、ア  
ーリア帝国で懲役4000年の判決を受けた人間か。よくよく観察  
してみると普通の人間にしかみえない。だが、そこにはおそるべき  
力が潜んでいることが、雰囲気から察することができた。顔の割に  
は高い声でガージマスは話しだした。

「クリムの若い頃にそつくりだ。やはり親子だな。私は純粹な生物  
兵器だ。もし、君の未来予測によつて、敗戦が濃厚とわかれば体の  
中で調合したバクテリアをばらまく。そして、敵軍を殲滅する」

何故彼がここにいるのかはわかつた。だが、ジャポンというのは  
島国ではないのか？ 人も住んでいるのではないか？ もし、殲滅作戦  
にかかればどうなるのだ。それに対する答えはガージマスは持たな  
かつた。ただ、厳しい顔つきで首を振つた。

ジャポンに着いた私たちは飛行機のタラップから降り立ち滑走路のコンクリートに足をつけた。しかし、足に今までのような感触はない。鼻はまだ効くらしく、どこからか何かが焦げるような匂いがする。「うつ」と声がする。生身の人間には臭いは強烈らしく、レンナは気分が悪そうにハンカチを口元付近にあてている。シャルレ・ガージマスも悪臭に顔をしかめている。「何の臭いだ?」そう呟く彼の声が聞こえた。

ゲルマン同盟軍の指揮官が行進するように律儀に歩いてやつてきた。イソムラというらしい。周りの者からイソムラ隊長と言われている。初めて会った私たちにイソムラはいきなりマシンガンを撃つ。言葉の銃弾は私たちに降り注ぐ。

「いやー。よくおいでになられました。戦況は悪いのですよ。いや、実に悪いのです。これが……。つい昨日もかなりの人数が死にましてな。今火葬をしているのですよ。まったく、人間というのは焼くと、これほど悪臭なのですな。まさに、在世の罪を空気中に放つがごとくですな。はつはつは。あなた方がゲルマンから送られてきた最新兵器の改造人間というわけですな。実に頼もしい。それにしても向こうの技術力は凄まじいですな。勝てる気がしませんよ。もつともあなたたちがいればそれは可能になるのでしょうかね。相手の兵士を拷問にかけて調べてみたのですが、皆田使い方にに関する記憶を忘れているみたいでしてな。つい数時間前まで使って、我々の仲間を皆殺しにしていったやつがですよ?信じられますかな?」

最初、この男は気が触れているのかと思った。しかし、こういう人間らしかつた。拷問は国際条約で禁止されていることを伝えると。「ほう。それは知りませんでしたな」と明らかに嘘をつく。果たしてゲルマン同盟は本当に私たちが命を賭けて勝利に導くに値するものなのだろうか?シャルレ・ガージマスが私の肩に手を置くと、イ

ソムラに本部まで連れていいくように短く簡潔に述べた。

本部は大きな銀色の屋根が特徴的な高い建物だった。最も高いといつても3階までしかなかったのだが。ただ、他には何も高いものが見当たらぬ地域だったので、余計に感じたのだろう。こんな高い場所が攻撃を受けないということは我が軍は制空権を握っているのだろう。しかし、イソムラの答えは意外なものだった。

「なあに。ここは青十字の国際救援部隊がいるところと敵には伝わつてますよ。奴らも無茶はせんでしょう。それに、3階にはそれらしき、人間の死体を置いてありますので、何かあれば情報戦に役立つでしょう。アーリア帝国で内乱でもおこるといいですがね。はつはつは。さあ、行きましょう。本部は地下です」

地下にエレベーターで降りるとそこには様々な最新機器が備えられた場所らしく多くの人々が忙しそうに動き回っていた。

「あー！隊長。342部隊全滅です」

「なにー。あのくずども。こんなわずかな時間ももちこたえられんのか。まったく。困ったもんですな」

こちらに苦笑いをなげかけるイソムラを私は無視した。怒りがわいたからだ。仲間が死んだというのになんという言い方だ。彼は相手がユーモアのわからない、つまらない男と思ったのだろう。きわめて事務的な態度になり、私に戦況報告書を渡した。

## シャルレ・ガージマスへ

戦況報告書を読んだ私にはどうすればいいかわからなかつた。シャルレ・ガージマスは寝れば夢となつて現れるとアドバイスしてくれた。その晩私は地下の本部の一室で、この戦場の運命を決める未来予知を行つた。

ぼんやりとした明かりが見える。しかし、明かりは遠のいていく。ふいにイソムラの死体が現れる。その死骸を鳥がついばんでいる。十字架がかけられ、イソムラだつたものは吊るされていく。あたりには縁があつた景色が、今は何もない。全てが枯れて朽ちているのがみえた。視点が空へ昇つっていく、飛行機よりも高く。それでいて、雲に遮られずに大地を見ることができた。島全体はやつてきた時に見た美しい縁ではなく、地面の露出した黄土色をしていた。シャルレ・ガージマスがいつの間にか、そばに立つてゐる。上空にいるはずなのに確かに横いいる。そして私に言つ。「仕方がない。こうまでしなければ敵の戦力を削げない」レンナは私の内に秘めた情欲を表していると感じられた。危険だ。誰かが叫んだ。あの女はやがて身の破滅を招く。そんなセリフを誰かが言つた。

そして目が覚めた。夢は夢でも私の脳裏にはつきりと刻まれていたので、あとはイソムラたちに話すだけだつた。ただし、具体的なことは避けて、ただ「ゲルマン同盟はジャポンで負けた」と言つた。イソムラは「しかたありませんな」と言つて、ゲルマンの首都アルベリンから届いた命令書を良く読み、なるほどと頷いてから私たちに向きなつた。

「輸送部隊がやつてくるそうです。ただし、制空権は保証できません。一刻も早く脱出しなければなりません。それでは失礼しますよ」

と言つて脱出の準備を始めた。そして、ついに、シャルレ・ガージマスは自らの毒をばらまいた。彼は一人後からヘリコプターに乗つてジャポンの近隣の国カムにやつてくるはずだった。レンナは震えていた。「恐ろしいことよ。シャルレ・ガージマスを使うなんて」と声が漏れた。

翌朝、ガージマスはカムにやつてきた。カムはアルバニ教の聖地でもある。中立地帯だった

## シャルレ・ガージマスく4く

カムからゲルマンに戻った私たちは自軍が劣勢であることを知られた。もはや戦争を終わらせるには降伏が最良の道だと私には思えた。ゲルマン国軍本部、通称オーディングターに足を踏み入れると、建物の内部では血氣盛んに兵士たちが作業をこなしていた。

「東方戦況はどうなつていてる!!」

「西部方面部隊は撤退できたか?」

怒号が飛び交う中、私とシャルレ・ガージマス、そしてレンナはエレベーターに乗つて上へ上へと進んだ。

同盟軍最高位将軍ジルメルの部屋には彼ともう一人の人間がいた。軍服を着たその顔に見覚えがあるような気がしたが、はつきりと告げられるまでは父だとは気づかなかつた。

クリム・ダーデンスルトは冷たい目でこちらに一瞥をくれると「よく來たな」と言った。私はジルメル将軍の期待していたような感動の再会を演出できなかつた。父にどのように接すればいいかわからなかつたからだ。しかし、聞きたいことは山ほどあつた。

「何故母を見捨てたのです」

思わず口から激しい言葉が飛び出した。クリムは一瞬硬直したようになり固まるといつてこちらを向いた。

「アッショ。個人的な話は控える。將軍の前だぞ」

将軍は場に流れた険悪な空気を引き取るように私と父の間に入ると、私に席を勧めた。

「アッショくん。お父さんとつもる話もあるだろ?。しかし、今は戦争の見込みについて話しをしているところだ。何しろアッショくんがジャポンで見たとおり戦況は厳しい。未だに我が軍は旧式の装備で戦っているからなるもあるが、まったく君のお父さんたちの組織を活かしきれていないのだよ。何しろ大規模な人体改造をするにはまったく人手がたりないので。何人かの優秀なエリートは既に

改造してあるが、どうしても未来予測システムは特定の遺伝子を持つものでないと無理らしいのだよ。副作用の効果が大きくてね。初めて聞く顔をしているね。そう。未来予測システムは同時に精神の破壊ももたらすのだよ。もし、君たち親子のもつGDN遺伝子がなければ精神は墓場行きつてわけだよ」

この言葉をクリム・ダーデンスルトがひきとつて続けた。

「未来予測システムは戦術を考える上で有利にはなるが、どうしても決定打になりえない。私はさらに未来予測システムを進化させた未来改変システムを考えている」

私は父たちの夢というか妄執に腹が立つた。こうしている間にも人は死んでいるのだ。まるでその苦しみを理解しない男たちに怒りが湧いてきた。兵士たちを人形もしくは人体実験の被験体と思ってるようだった。精神の中に憎しみが再び突き上ってきた。それは内蔵から発して、血液を通り、脳関門を通過し脳に至った。「降伏してはいかがですか?」

私の言葉は一人に怯えをもたらした。

「何をいってるんだね。アッシュ君。最後まで我々は立派に戦うよ。勝つ可能性がわずかでもね」

「アッシュ。なあに、今によくなるさ。心配せずに働いてくれ」シャルレ・ガージマスは壁際によりかかって、立っていたが突然言った。

「反乱軍のことはどうなった?」

父はギクリとした。

「知っていたのか。ガージマス」

「戦争が始まった今、昔の仲間だったものは皆あなたのやり方には不満だつたものな

「お前もそうなのか?ガージマス」

「俺はあんたについていくさ。拾つてもらつた恩もあるしな」ジルメルは「そうそう」と言って私たちに反乱軍の鎮圧をお願いしたいといつてきた。改造人間、この軍では超人というらしかった

が、その超人たちの部隊と合流してゲルマンの中で反乱を起こした人々を鎮圧してほしいと言われた。その地とは旧バーデン自治区だった。サニチエエート、ランムルヒ。私は一人を心配した。巻き込まれていなければいいが……。

## シャルレ・ガージマスへ

その晩夢を見た。深層心理はバー・デン地区に飛んでいたのだろう。サニチエエートが出てきた。何事が私に必死に訴えかけているが声は届かない。ランムルヒの顔が見える、先日会ったときよりも成長してみえた。だが、顔の目の部分は暗い深黒に覆われて、感情を伺い知ることはできなかつた。

良く寝つけなかつたせいか日が高くなつてから目覚めた私は本部で他のゲルマンの超人に紹介された。皆、どこか人間の表情を失つたように、鉄仮面の顔をしていた。部屋の右側の窓の側にいたのはビクトワール・デノバという若い将校だつた。どういう改造を受けたかは知らないが鼻が少し曲がつた碧眼で、全身を覆うコートを優雅に着こなしていた。もう一人は紳士帽をかぶつた奇妙な風体をした女だつた。赤い髪は染めたものらしかつた。そして、手には本を持つていた。何を持っているのかと尋ねると、どうやらイエズス教のものらしかつた。いつでも暇な時に読めるように、持つているのだそうだ。

イエズス教は世界人口の6割を占める世界宗教であつて、キリスト教と世界を2分する宗教だつた。

その二人は自分の能力を明かさなかつた。私も何もいわなかつたが、彼らにとつて私もしくは私の父は有名人らしかつた。握手をかわすと、投入される部隊と人員の配置を相談した。彼らにとつて何の思い入れもない町でも私にとつては違う。なんとか最小限度に被害を食い止めて、反乱軍を鎮圧したい。シャルレ・ガージマスは私にそつと囁いた。

「ガルド・イニエーブが反乱軍のリーダーらしい」

あの！イニエーブが敵に？？何故彼は裏切つたのだろう。私の気持ちは暗く沈んだ。なんとか話し合いの道は残されていないのか？

⋮  
o

一週間後私は自らの未来予測システムが安全だと判断しただけの人員を引き連れてバー・デンに向かつた。その数なんと一万。これほどの人数をさくのは本部も難しかつたらしく、私たちは一週間も待たされた。ゲルマンの銃製造技術者マルグレー・テが作ったMG387を持つた兵士たちとともに私たちは列車で運ばれていく。この道を一民間人として通つたことがイメージとなつて、私をまどつた。今もレンナは私の側にいるのは変わらないが、もはやあの時のような穏やかな目ではない。私たちはもはや軍に監視され同時に使われる存在だつた。

「アッシュ・バー・デン地区に行つてどうするつもり？」

レンナが盗聴器の存在を心配しながらも私にこう尋ねた。私は慎重に辺りを見回し、誰もいないことを確認した。

「バルド・ゲール・アランを説得する」

レンナは絶望的な空想を私が見ていると思ったのだらう。嘲るようにな笑つた。彼女のこの笑いは私の緊張した神経をいらつかせ、ついに爆発させた。

「何が、可笑しい！－」

私のほとんど機械で埋め尽くされた腕はレンナに向かつてしまつた。しまつたと思ったが、気づいたのはレンナが数メートルふつ飛ばされた後であつた。

傷ついたレンナは何も言わずによたよたと隣の車両に移つていつた。介抱しようとした私に「触らないで」と言い捨てて。

数分後、紳士帽をかぶつた時代錯誤な赤髪の女が次に入つてきた。

「アッシュ・クロフォード。味方に手をかけるとは何事ぞ」

古めかしい言葉を使うこの女の名前はなんだつたろうと思いつくとしている、向こうから名乗ってきた。

「奇妙ね。私を忘れるなんて、あなたの目の前で死んだ女というの

に

私の目の前で??私は混乱した。まさか……。嫌な予感が私を過去へ連れ戻していった。

「グルミア・ファラデーか」

かつて偽りの恋愛をして捨てた女が何故ここに?彼女は私の目の前でガソリンをかぶり、火をつけ焼け死んだはずだ。

「そうよ。ふふふ。あなたはあの時から暴力的なところだけはちつとも変わらないわね」

「何を言っている。彼女に手をあげたのは今日が初めてた」

「ふん。どうだか」

「コートを着たビクトワール・デノバが入ってきた。私たちをジロリと見ると、機械的に言葉を発した。

「作戦会議だ。来てくれ」

私たち二人はにらみ合いながらも後ろの車両に歩いていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8021s/>

---

アッシュ戦記

2011年11月30日10時54分発行